

備前市埋蔵文化財調査報告7

伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅱ

2006

備前市教育委員会

備前市埋蔵文化財調査報告 7

伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅱ

2006

備前市教育委員会



1. 伊部南大糞跡全景（北上空より）



2. 伊部南大糞跡全景（東上空より）



1. 東 6 号窯跡全景（北側より）



2. 東 6 号窯跡出土遺物



1. KP-1地点窯跡全景（北側より）



2. KP-1地点窯跡出土遺物



1. KP-2 地点窯跡トレンチ 2物原（北西より）



2. KP-2 地点窯跡出土遺物

序

本書は、備前市伊部に所在する国指定史跡「伊部南大窯跡」周辺窯跡群の確認調査報告です。この確認調査は、平成11年度から14年度にかけて実施したもので、ボランティア団体「伊部里づくりの会」によって計画された観光開発にともなうものです。平成15年3月には、その前半部分の成果をまとめた「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ」を刊行しており、本書はその後半部分にあたるものであります。

伊部南大窯跡は備前焼の長い歴史の中で、窯の規模や操業期間の長さに関して国内では例のない貴重な窯跡であり、窯業史上貴重な遺跡であるとして昭和34年、国の史跡指定を受けています。史跡地周辺の調査では、予想外に合計8基もの窯跡が確認されました。本報告では、江戸時代末ごろ、室町時代後期、平安時代前半ごろの合計3基についての調査結果を収載しました。

備前市教育委員会ではこれらの調査結果もふまえ、伊部南大窯跡とその周辺の窯跡群、備前北大窯跡、備前西大窯跡、中世の窯跡群について「史跡伊部南大窯跡整備基本構想」を昨年策定し、これらの歴史的遺産を恒久的に保存し次世代へ引き継ぐための作業を進めています。

一次の確認調査からすでに7年もの歳月が流れていますが、伊部南大窯跡周辺窯跡群の確認調査の成果をすべて刊行することができました。本書に収められた成果が、文化財の保護・保存・活用、今後の歴史研究、地域の歴史を深める資料として少しでも寄与できれば幸いです。

最後になりましたが、文化庁をはじめ岡山県教育委員会、並びに地元の関係各位から賜りましたご支援とご協力に対しまして、心から厚くお礼申し上げます。

平成18年7月

岡山県備前市教育委員会

教育長 正宗洋三

例　　言

- 1 本書は国指定史跡「伊部南大窯跡」周辺において、「伊部里づくりの会」によって計画された観光開発とともに、備前市教育委員会が実施した確認調査の報告書である。
- 2 国指定史跡「伊部南大窯跡」周辺で確認された遺跡は「伊部南大窯跡周辺窯跡群」と総称し、岡山県備前市伊部2568-1・2571・2596-1に所在する。
- 3 調査は史跡地周辺において平成11年から平成14年にかけて、4回実施した。一次調査・二次調査および三次調査の一部については、その成果を「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ」にまとめた。本報告書は平成13年10月5日から12月26日まで実施した三次調査、平成14年4月2日から6月13日まで実施した四次調査の成果をまとめたものである。調査した面積は全体で184m²である。
- 4 調査は石井啓が担当した。
- 5 本事業をすすめるにあたっては、文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官坂井秀弥氏、小野健古氏から指導およびご助言を賜った。記して深甚の謝意を表したい。
- 6 発掘調査および、報告書の作成にあたっては、河本清氏から現地指導およびご助言を賜った。明記して感謝の意を表したい。
- 7 KP地点の調査については、土地所有者の金重有邦氏から格別のご配慮をいただいた。明記して感謝の意を表したい。
- 8 報告書の作成は、備前市教育委員会埋蔵文化財作業室において随時実施し、石井が担当した。執筆・編集・構造写真・遺物写真は石井がおこなった。
- 9 遺物の実測は、入江津々美、草加尚子、上西高登、佐伯導代、横井美由紀が行い、トレース業務は入江津々美、草加尚子がおこなった。また、一部を「岡山県緊急地域雇用創出特別基金事業補助金」を受けて、㈱フジテクノに委託した。
- 10 附編1については備前市文化財保護審議会委員小西通雄氏より報告文をいただいた。
- 11 附編2・3については、㈱吉田生物研究所より報告文をいただいた。
- 12 測量については、一部業務を倉渉建設コンサルタント株式会社に委託した。
- 13 航空写真については、有限会社アールシースカイワークス、㈱フジテクノに委託した。
- 14 発掘調査および遺物整理作業については下記の方々の協力を得た。
能勢強　野村文夫　福島一行　湯浅馨　行本英文　小橋節子　梶藤繁美　藤澤健太郎　小林幹佳　藤間泉　石田幸
- 15 調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々・機関のご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表する。

岡山県教育庁文化財課　岡山県古代吉備文化財センター
間壁忠彦氏　葛原克人氏　西村康氏　長尾清一氏　肥塚隆保氏　伊藤晃氏　上西節雄氏
花岡志郎氏　松木和男氏　平井泰男氏　小西通雄氏　乘岡実氏　龜山雄氏　扇崎由氏　白石純氏
大橋雅也氏　武田恭彰氏　田村啓介氏　山本博利氏　重根利弘氏　馬場昌一氏　岡本芳明氏
若松拳史氏　團正雄氏　木村俱子氏　的野豊子氏　米田久夫氏　ほか多くの方々
- 16 出土遺物・実測図・写真等は、備前市教育委員会（岡山県備前市東片上126）において保管している。

凡　　例

- 1 本書に用いた高度は海拔高であり、北方位は磁北で示している。
- 2 本報告書に掲載した遺構・遺物図面の縮尺は、基本的に次のように統一している。
遺構 1/80・1/40 遺物 土器：1/4・1/8
- 3 本報告書で用いた土色の標記は『標準土色帳』（農林水産省・農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本彩色研究所監修）に従っている。
- 4 本報告書に掲載した遺物番号については、ひとつの窯跡について土器・陶磁器ごとに連番としている。
東6号窯跡地点 1～192
KP地点 KP-1: 1～181 KP-2: 301～419
- 5 本報告書の第1図に使用した地図は、備前市作成（昭和63年）の1/10,000の「備前市全図No.4」を複製・加筆したものである。

目 次

卷頭図版

序

例 言

凡 例

目 次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査の経緯	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査の経過	7
第3節 調査および報告書作成の体制	14
第3章 東6号窯の調査概要	23
第1節 位置と調査の概要	23
第2節 遺構の概要	23
第3節 遺物	30
第4節 器種と法量分布について	32
第5節 窯詰めについて	34
第4章 KP-1地点窯跡の調査概要	49
第1節 位置と調査の概要	49
第2節 遺構の概要	49
第3節 遺物	52
第5章 KP-2地点窯跡の調査概要	78
第1節 位置と調査の概要	78
第2節 遺構の概要	78
第3節 遺物	81
第4節 擃鉢の受け部型式分類と物原サンプル	82
第6章 まとめ	110
第1節 はじめに	110
第2節 東6号窯跡の操業期間と窯構造について	110
第3節 KP-1地点窯跡の操業期間と窯構造について	111
第4節 KP-2地点窯跡の操業期間と窯構造について	113
第5節 総括	114
附編1 二基の天保窯に関する文献史料	117
附編2 東6号窯跡検出炭化材の放射性炭素年代測定について	120
附編3 東6号窯跡などから検出した炭化材の樹種同定について	122

附編4 窯の構造・立地からみる備前焼生産年表の予察	125
写真図版	
あとがき	
報告書抄録	

表 目 次

表1 東6号窯跡出土遺物観察表	42	表3 物原サンプルと型式	83
表2 KP-1地点窯跡出土遺物観察表	71	表4 KP-2地点出土遺物観察表	105

挿 図 目 次

第1章		第25図	トレンチ601出土遺物2(1/4).....	39
第1図 伊部町人窯跡周辺の地形と主要窯跡	3	第26図	トレンチ601出土遺物3(1/4).....	40
第2章		第27図	トレンチ602出土遺物(1/4).....	41
第2図 備前歴史フォーラム	7	第4章		
第3図 三次創立現地説明会	9	第28図	KP-1・KP-2地点窯跡トレンチ位置図 (1/400).....	50
第4図 窯跡位置図	11	第29図	KP-1地点窯跡立面図(1/80).....	53
第5図 見学会パンフ	20	第30図	KP-1地点窯跡平面図(1/80).....	53
第3章		第31図	初戸出土遺物1(1/4).....	57
第6図 平成13年度調査トレンチ配図(1/400).....	25	第32図	初戸出土遺物2(1/4).....	58
第7図 平成14年度調査トレンチ配図(1/200).....	25	第33図	1房出土遺物(1/4).....	59
第8図 東6号窯灰原断面図(トレンチ601)(1/80).....	26	第34図	2房出土遺物1(1/4).....	59
第9図 東6号窯跡断面図(1/40).....	27	第35図	2房出土遺物2(1/4).....	60
第10図 トレンチ602断面図(1/80).....	29	第36図	3房出土遺物(1/4).....	61
第11図 トレンチ605断面図(1/80).....	29	第37図	3房から4房の隔壁付近出土遺物(1/4).....	62
第12図 トレンチ603断面図(1/80).....	29	第38図	4房出土遺物(1/4).....	63
第13図 トレンチ604断面図(1/80).....	29	第39図	5房および6房との隔壁付近出土遺物1(1/4).....	64
第14図 トレンチ606断面図(1/80).....	29	第40図	5房および6房との隔壁付近出土遺物2(1/4).....	65
第15図 杯A類法量分布図	32	第41図	6房出土遺物1(1/4).....	65
第16図 杯B類法量分布図	32	第42図	6房出土遺物2・6房東側トレンチ出土遺物・ 隔壁出土遺物1(1/4).....	66
第17図 番法量分布図	32	第43図	隔壁出土遺物2(1/4).....	67
第18図 器種構成図(1/8).....	33	第44図	南北トレンチ出土遺物1(1/4).....	67
第19図 痘詰め復元模式図(1/4).....	34	第45図	南北トレンチ出土遺物2(1/4).....	68
第20図 トレンチ601出土遺物(13年度分)(1/4).....	36	第46図	初戸上層出土遺物(1/4).....	69
第21図 トレンチ601出土遺物(13年度分)(1/4).....	37			
第22図 トレンチ602出土遺物(13年度分)(1/4).....	37			
第23図 トレンチ605出土遺物(13年度分)(1/4).....	37			
第24図 トレンチ601出土遺物1(1/4).....	38			

第47図 表採資料遺物（1/4）	70	第61図 レンチ1出土遺物10（1/4）	94
第5章		第62図 レンチ1出土遺物11（1/4）	95
第50図 K P - 2地点窯跡平面図（1/80）	79	第63図 レンチ2出土遺物1（1/4）	96
第51図 K P - 2地点窯跡擂鉢型式分類図（1/2）	83	第64図 レンチ2出土遺物2（1/4）	97
第52図 レンチ1出土遺物1（1/4）	85	第65図 レンチ2出土遺物3（1/4）	98
第53図 レンチ1出土遺物2（1/4）	86	第66図 レンチ2出土遺物4（1/4）	99
第54図 レンチ1出土遺物3（1/4）	87	第67図 レンチ2出土遺物5（1/4）	100
第55図 レンチ1出土遺物4（1/4）	88	第68図 レンチ2出土遺物6（1/4）	101
第56図 レンチ1出土遺物5（1/4）	89	第69図 レンチ2出土遺物7（1/4）	102
第57図 レンチ1出土遺物6（1/4）	90	第70図 物原出土遺物（サンプル）1（1/4）	103
第58図 レンチ1出土遺物7（1/4）	91	第71図 物原出土遺物（サンプル）2・	
第59図 レンチ1出土遺物8（1/4）	92		
第60図 レンチ1出土遺物9（1/4）	93	表採資料遺物（1/4）	104

第1章 遺跡の位置と環境

伊部南大窯跡周辺窯跡群は、JR赤穂線伊部駅の南約200m、権原山山麓の北向きの斜面、国指定史跡「伊部南大窯跡」周辺に位置する。ここから南側には伊部の町並みが広がり、その中央を東西に国道2号線が横切り、車が頻繁に往来する。町の北部、不老山南斜面には北大窯跡、天保窯が位置する。その不老山を山陽新幹線がトンネルで西に抜けると、標高約300mの医王山の鋭利な山容があらわれ、その山裾には西大窯跡が位置する。さらに西に進むと、12世紀代にはすでに存在し、江戸時代に熊沢蕃山の提案で津田永忠が改修した備前市内最大の池「大ヶ池」が広がる。

この伊部の町の南端に位置する伊部南大窯跡は、「規模や操業期間に関して国内でも例のない窯」として昭和34（1959）年国史跡の指定を受けた。

備前市は、岡山県南東部、兵庫県との県境に位置している。平成17（2005）年3月22日、吉永町、日生町と合併し、現在「海とみどりと炎のまち」新備前市としてまちづくりが進められている。市域の北部、吉永町は兵庫県佐用郡に接し、北は美作市に接する南北に長い地域である。吉永地域は流紋岩土壌であるが、標高539mの八塔寺山は石英粗面岩の残丘である。和意谷には、国指定史跡「岡山藩主池田家墓所」が所在する。市域の南東部日生町は、東は兵庫県赤穂市、南は瀬戸内海に臨む。階段状に降下する山々が直接海にいたる典型的な沈降海岸の地形で、沖合いには鹿久居島、頭島、大多府島、鶴島などのかなる日生諸島が展開する。地質は流紋岩類で、砂浜は少なく、岩が切り立った海蝕崖が多く見られるが、鹿久居島には中世の抛点的な遺跡と考えられる「千軒遺跡」が所在する。

旧備前市域の西部香登から新庄にかけては吉井川左岸にあたり冲積平野の平坦地が広がり、低丘陵上には国指定史跡丸山古墳をはじめとする古墳群が点在する。伊部から三石にかけては急峻な山並みが続き、平坦地が谷に沿って細長く開けている。これは埋積谷とよばれる地形で、後氷期の海面上昇によって瀬戸内海に入り込んだ海水によって谷が沈水し「おぼれ谷」になるのにに対し、海水の侵入が緩やかで堆積作用が優勢である場合に形成される地形である。備前大橋がかかる片上澗はおぼれ谷の典型で、その縁辺部の鶴海、久々井、浦伊部、片上、穂波などに埋積谷の細長い平坦地が形成される。片上には西日本の縄文時代中期末の集落遺跡として著名な長縄手遺跡が所在する。

山地の部分は市域総面積の2／3以上をもしめる。その地質は流紋岩や石英斑岩等である。流紋岩地域は花崗岩地域にくらべて、樹木が再生しやすく、アカマツ林が広く発達する。事実、慶長期に描かれた「備前國図」には伊部付近に松林が描写されている。この流紋岩から生成される山土や堆積した「田土」などは備前焼の原料粘土として使用され、独特の味わいを器表に描き出す。この豊かな山林資源、原料の粘土、水運に恵まれた立地などが、中世以降、窯業史を飾る「備前焼」を生み出すことになる。

備前市において最も古い時期の遺物・遺跡は龜井戸魔守の調査の際確認されたサヌカイト製ナイフ形石器と翼状剥片で、旧石器時代に属するものであるが、遺構に伴うものではない。

続く縄文時代では、早・前期には吉井川河口や島嶼部に貝塚が点在するが、備前では中期末の集落が確認された片上の長縄手遺跡、後期前半の新庄西畑田遺跡などが知られる。

弥生時代では堅穴住居や大溝などが確認され、母村的集落が想定されている、前期後半から中期中

ごろまで継続した船山遺跡などがある。

古墳時代では吉井側西岸の浦間茶臼山に統いて、全長68mを超える前方後円墳の長尾山古墳が築かれ、これに統いて40mを超える大形円墳、新庄天神山古墳、丸山古墳、小丸山古墳などが展開する。内部主体を横穴室石室とする後期の古墳は石室長9.5mの池瀬古墳をはじめ大内地区を中心に10数基の大滝道古墳群、香登本の谷筋に展開する奥谷古墳群などが知られ、その後の香登庵寺への建立につながる。

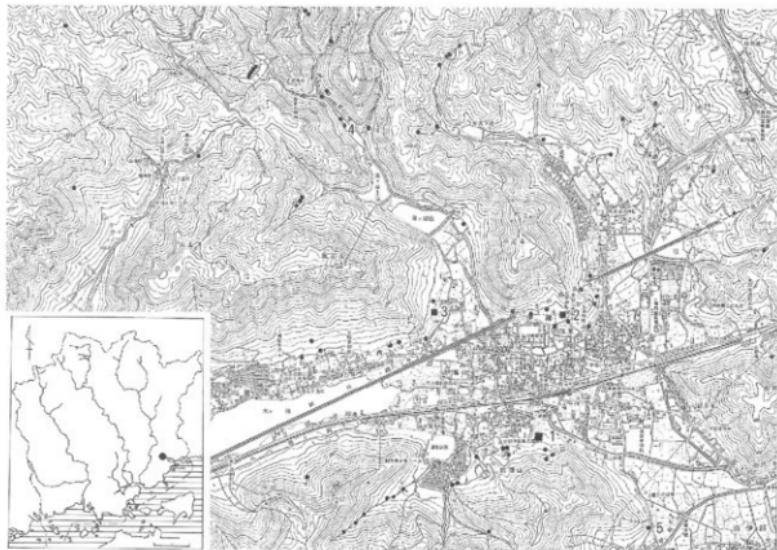
また、市域の南西部、長船町に接する佐山地区は、中国地方で最大の須恵器窯跡群である邑久古窯跡群の北東端に位置する。佐山では遅くとも7世紀末ごろには生産が開始され、奈良時代に最盛期を迎え、平安時代後半まで続けられるが、その後はこの地で生産がされなくなる。それに呼応するかのように伊部の地で本格的に備前焼の生産が開始される。

平安時代の末、西の山窯跡や大ヶ池南窯跡など伊部の山麓で生産が開始された備前焼は、鎌倉時代中ごろになると山の中腹に立地することが多くなり、南北朝期にはさらに高度をあげ、標高400mをこえるような熊山山塊に位置するものもある。熊山山頂には熊山遺跡を代表とする石積み遺構が点在し、平安時代には靈山寺という山上寺院が建立される。南北朝末ないしは室町時代はじめ頃、ふたたび窯は山麓に築かれるようになる。規模も山崎古窯跡の幅2.5m、推定全長20m、不老山東口窯跡の幅3.4m、推定全長40mも巨大化し、量産化を指向する。その後16世紀後半のある段階で、山麓に点在していた大窯は北人窯、西大窯、南大窯へ集約されることになる。

時代はさかのぼるが、律令制下の旧備前市域は、当初邑久郡香登郷、方上郷などに属していたようで、その後天平神護2(766)年、藤野郡(のちの和気郡)に編入されている。現在の旧備前市域は『後名類聚抄』では和氣郡坂長郷、香止郷であるが、記載のない「方上郷」は「延喜式」では美作の港「片上津」となっている。香止郷は伊部を含む香登の平野部だったと想定されるが、白河天皇の勅旨田となり、その後堀河天皇の時代(白河院の院政期)に莊園として成立する。その後、香登荘は鳥羽院、八条院に伝えられるが、母の美福門院藤原得子の菩提を弔うために高野山菩提心院に領家職が寄進される。こうして香登荘は八条院を本家とし、菩提心院を領家とすることになる。

菩提心院は、高野山内で金剛峰寺方と対立していた大伝法院方の末寺に属する。その紛争の結果、正応元(1288)年大伝法院は、和歌山県那賀郡根来町へ移る。この地にある根来寺はその大伝法院を前身とする真義真言宗の總本山であるが、その坊院跡から埋甕遺構として大量の備前焼の大甕が出土したことで知られる。その数は根来寺全山で、1,500個以上といわれており、その多くが16世紀後半に属するものである。用途は甕倉で油を蓄える容器として使用が推定されている。その量的なものを香登荘と大伝法院との関係に見る向きもあるが、香登荘は南北朝の動乱によって領有は仁和寺に帰し、最終的に室町幕府領として伝頨されていったと考えられている。したがって大量出土の理由を別に考える必要がある。

室町時代、備前の地は赤松氏、山名氏、浦上氏など勢力がめまぐるしく入れ替わるが、最終的に宇喜多氏が権力を握る。そのころ活躍した豪商で来住法悦という人物は、片上湾の最奥部浦伊部に居住し、瀬戸内海の交易で何万石もの富を築いたという。交友関係も日蓮をはじめとする日蓮宗本山関係者、保津川を開削したことで知られる京都の大商人角倉了以との結びつきがある。天正18(1590)年には、岡山城築城の銀を調達した功績により、岡山城下に一町を賜り、屋敷を構えるなど宇喜多氏とも非常に強く結びついている。



1 南大窯跡 2 北大窯跡 3 西大窯跡 4 爰ヶ瀬窯跡 5 山崎古窯跡

第1図 伊部南大窯跡周辺の地形と主要窯跡

浦伊部の地は伊部南大窯跡からわずか1.5km東にあたり、備前焼を海上ルートで積み出す際、要地となったところで、根来寺での大量の備前焼大甕出土の背景には豪商来住法悦を要とした海上交易ルートのかかわりが深いと考えられる。平成12年の調査で確認され天正期の窯と推定されている東3号窯跡はまさに根来寺に大甕を大量に提供した窯のひとつであった。

「香登莊」と備前焼の関係についてみてきたが、文献資料・考古資料に「香登」がやきものの产地として登場することもある。和歌山県西牟婁郡日置川町長壽寺境内から出土した大甕は「備前國住人香登御庄口 二 厲応五年口 あつらう也」銘文があり、「暦応5(1342)」年の年号は知見のある乍銘資料としては最古のものである。

応安4(1371)年、九州探題へ下向する途中の今川了俊は、「さて、かがつ(香登)というさとは、いえいえごとに玉だれの小瓶といふ物を作ところなりけり(中略)某日はふく岡につきぬ・・・」という記述を『道ゆきふり』という紀行文の中に残している。

その福岡については、時代が少しさかのぼるが、正安元(1299)年円伊を主宰とする工房で制作された『一遍聖絵』の福岡の市の場面に、布や魚鳥など商いの商品とともに簡単な掘建て小屋の下に備前焼が転がっている様が描かれている。一遍がこの地を布教に訪れたのは、弘安元(1278)年ごろだったといわれている。

このほか「香登莊」の関係ではないが『兵庫北関入船納帳』に文安2(1445)年に備前焼の甕や甕

が1200個余り兵庫港（現神戸港）に運ばれた記載がある。

このように過去の備前焼は機能性の高い商品として西日本を中心に流通し、織豊期、その味わいから為政者に茶道具として取上げられた。近世以降は他の窯業地で生産された施釉陶や磁器に商品として市場をうばわれ衰退の道をたどるが、昭和に現れた備前焼中興の祖と呼ばれる金重陶陽によって、美術品としてその市場価値を見出していく。今にいたる。

現在、窯元・備前焼作家は400人を超えるという。その未来はどこに向かっているのだろうか。

*本章「遺跡の位置と環境」は備前市教育委員会2003「伊部南人窯跡周辺遺跡群確認調査報告書1」の第1章を加筆訂正したものである。

（参考文献）

- ・記念誌編集委員会『わがまちの文化遺産』 備前市文化協会 1998
- ・桂又一郎『伊部南大窯址発掘資料』 日本陶磁協会 1952
- ・文化庁文化財保護部史跡研究会『岡脱日本の史跡第8巻近世近代2』 紀行社 1991
- ・谷口澄夫・石田寛監修『岡山県風土記』 旺文社 1996
- ・光野千春他『岡山の地学』 山陽新聞社 1982
- ・備前市総務部市史編さん室『備前市二十年の歩み』 備前市 1993
- ・岡山理科大学『岡山学』研究会『備前焼を科学するシリーズ『岡山学』1』吉備人出版 2002
- ・岡山大学附属図書館『備前慶長国絵図のふしぎ』『池田家文庫等貴重資料展リーフレット』 2000
- ・亀山行雄『岡山県備前市長瀬手遺跡』『日本考古学年報』46 日本考古学協会 1993
- ・岡山県史編纂委員会『岡山県史 古代II』第3巻 岡山県 1988
- ・上西節雄『日本のやきもの備前』 淡交社 2002
- ・京都国立博物館『特別陳列修理完成記念 国宝・一遍聖絵』 2003
- ・北脇義友・目賀道明『「伊部と秀吉」展によせて』 1992
- ・和歌山県立博物館『根木寺の歴史と文化—興教大師覚護の法灯—』 2002
- ・竹林栄一『中世瀬戸内の商品流通—兵庫北関の二つの入船軒からみた—』『研究報告』15 岡山県立博物館 1994
- ・河本清・葛原克人『不老山古備前窯址』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 岡山県文化財保護協会 1972
- ・田代健二『東備西播開発有利道路建設事業実施にともなう埋蔵文化財調査報告』 備前市教育委員会 1974
- ・田代健二『龜井戸魔寺跡認証調査報告』『備前市埋蔵文化財調査報告』2 備前市教育委員会 1984
- ・田代健二『龜井戸遺跡認証調査報告』『備前市埋蔵文化財認定報告』3 備前市教育委員会 1986
- ・田代健二『備前市文化財年報』(1)『備前市埋蔵文化財調査報告』4 備前市教育委員会 1988
- ・田代健二『船山遺跡発掘調査報告』エヌ・ティー・エヌ東洋ペアリング運動場建設事業埋蔵文化財調査委員会 1985
- ・田代健二『備前市内採集の遺物について』『古代吉備』第10集 1988
- ・千葉豊『備前市新庄西町Ⅳ遺跡採集の縄文土器』『古代吉備』第9集 1987
- ・時賀奈少ほか『船山遺跡』『岡山県埋蔵文化財調査報告』155 岡山県教育委員会 2001
- ・中野栄大『備前国香登社』『岡山県史研究』第5号 岡山県史編纂室 1983
- ・長船町史編纂委員会『長船町史』通史編 2001
- ・岡山理科大学『岡山学』研究会『備前焼を科学する～窯はなぜ移動したか～』 2000
- ・重根弘和『山崎山窯跡』『岡山県埋蔵文化財報告』167 岡山県教育委員会 2002
- ・亀山行雄ほか『長瀬手遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査方報告』189 岡山県教育委員会 2005

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

1. 平成13年度

- 10月5日 三次調査の器材を整え、法58条の2の報告をおこなう。
- 10月9日 三次調査開始。「東6号窯跡」「東3号窯跡の全長」「金重地点1号窯跡（第三の天保窯）」「同2号窯跡」を確認。
- 12月1日 現地説明会開催。約150名の参加。
- 12月25日 三次調査終了。
- 平成14年3月7日
伊部南大窯跡が史跡公有化時の会計検査の対象となる。検査官より「市民や見学者が窯跡の全体像・内容を理解しやすいように復元図を提示した説明板や模型などを設置し、より活用できる史跡として公開するよう」講評を受ける。
- 3月26日 岐阜県土岐市「元尾敷窯跡」（当時整備中）を見学。助言を受ける。

2. 平成14年度

- 4月5日 岐阜県教育庁文化課へ今年度の事業内容の説明。指導、助言を受ける。
- 4月15日 奈文研の西村康先生に依頼して、伊部南大窯跡史跡地内で磁気探査及び地中レーダーの探査をおこなう。指定地内にもう1基窯がある可能性。
- 4月22日 四次調査開始。東6号窯跡の調査。同日、58条の2の報告をおこなう。
- 5月28日 文化庁文化財調査官坂井秀弥氏より指導を受ける。（資料1参照）
- 5月29日 東6号窯跡を3日間の予定で一般公開。合計60名程度の見学者あり。
- 6月14日 四次調査ほぼ終了。遺物整理開始。
- 8月23日 伊部地区との協議のため平成14年度第1回史跡伊部南大窯跡等整備連絡会の開催。教育委員会が提示した整備案について異論はなかったが、実施期間10年の短縮を求める意見がある。（資料2参照）
- 9月2日 市長はじめ四役で構成される府議で南大窯跡整備について専門委員会を立ち上げることの了解を得る。
- 11月1日 「史跡伊部南大窯跡整備委員会設置要綱」を施行。（資料3参照）
平成14年3月9日、第1回「史跡伊部南大窯跡整備委員会」開催。（資料4参照）
- 3月15日 東6号窯跡西上部を九十九折状の小型重機で造成。事前連絡なし。
- 3月31日 西1号、西2号、東3号～5号の調査内容を収録した「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ」を刊行。

3. 平成15年度

- 10月8日 伊部の市政懇談会で9月18日の山陽新聞の記事を紹介し、伊部南大窯跡については地元が6年間もがんばってきたのに「前向きな取り組みが見えない」「学識経験者の皆さんによる整備委員会はあると聞いていますが、地域を交えて情報交換が成されるべき」などの意見がでた。教育長が整備するにはいろいろな問題があることを説明し、今後「意見交換の会」や「資料館で史跡を紹介する企画展」を開催すると回答。
- 11月26日 桜ヶ丘いきいき交流センターで開催された「東備地域知事・町内会長等懇意」で伊部総区長柴部暁星氏より「地区内の史跡である南大窯について、国（文化庁）の指定を受けてい関係でボランティアによる周辺整備を行なおうとして教育委員会と衝突することがたびたびある。地元からお願いしたことについて、もっと事務処理のスピードアップしていただけないか」という要望が県知事になされた。「教育委員会の担当課へ、事務のスピードを上げて処理するようこちらの方からもお願いしておく」と県知事が回答。
- 12月8日 「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ」を関係機関に配布
平成16年1月9日
平成15年度第1回史跡伊部南大窯跡整備委員会開催。（資料5参照）

4. 平成16年度

- 6月9日 坂井秀弥文化庁主任文化財調査官より指導を受ける。（資料6参照）
7月10日 歴史講座「備前焼研究最前線～千年の歴史を8時間で学ぶ～」開始。
7月13日 歴史民俗資料館企画展「発掘資料が語る中近世の備前焼」開催。
8月5日 史跡伊部南大窯跡保存整備基本構想策定業務を競争入札の結果、336万で㈱空間文化開発機構と契約。
9月21日 平成16年度第1回史跡伊部南大窯跡整備委員会開催。（資料7参照）
12月21日 伊部地区との協議のため平成16年度史跡伊部南大窯跡等整備連絡会開催。（資料8参照）
平成17年2月6日
平成16年度第2回史跡伊部南大窯跡整備委員会開催。（資料9参照）
2月24日 史跡伊部南大窯跡整備委員会委員葛原克人氏倒れられる。
3月18日 史跡伊部南大窯跡保存整備基本構想策定。
3月22日 備前市、日生町、吉永町が合併し、新「備前市」誕生。
3月22日 坂井秀弥文化庁主任文化財調査官より指導を受ける。（資料10参照）

5. 平成17年度

- 9月10日、11日 備前歴史フォーラム「備前焼研究最前線Ⅱ」開催。各日とも参加者約100名。
6月1日 伊部南大窯跡発掘調査について4,484千円の国庫補助交付決定を受ける。
8月19日 伊部南大窯跡内の発掘調査のため、法125条第1項による現状変更許可申請をおこなう。
9月16日 現状変更の許可がおりる。
9月16日 平成17年度第1回史跡伊部南大窯跡等整備連絡会開催。（資料11参照）
10月6日 伊部南大窯跡発掘調査開始。

10月 7日 法99条の規定により埋蔵文化財発掘調査の報告を行なう。

10月15日、16日 備前焼まつりにあわせて発掘調査の現場をみてもらうため「伊部南大窯跡自由見学会」を開催。15日は雨天のため中止。16日は約40名の見学者あり。(資料12参照)



第2図 備前歴史フォーラム

12月 2日 板井秀弥文化庁主任文化財調査官より現地にて指導を受ける。その後、備前市指定史跡北大窯跡、西大窯跡、愛が淵窯跡なども見学。(資料13参照)

12月 3日 平成17年度第1回の史跡伊部南大窯跡整備委員会開催。現地にて指導を受ける。(資料14参照)

12月10日 発掘調査現地説明会。参加者約150名。

12月14日 史跡伊部南大窯跡整備委員会委員葛原克人氏永眠される。享年63歳。

12月27日 発掘調査終了。

平成18年1月 6日

遺物整理開始。

2月 1日 平成17年度第2回史跡伊部南大窯跡等整備連絡会開催。(資料15参照)

2月24日 平成17年度第2回史跡伊部南大窯跡整備委員会開催。(資料16参照)

3月 20日 「北大窯跡・西大窯跡調査概報」刊行。

3月 20日 区との協議が整わないまま、史跡南側に作業道が付けられる。

6. 平成18年度

5月30日 伊部区に対し、追加指定想定地内での墓地造成の中止協力を求める。

6月 1日 伊部南大窯跡発掘調査について6,350千円の国庫補助交付決定を受ける。

7月28日 伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書II(本書)刊行。

第2節 調査の経過

1. 三次調査の経過

期 間 平成13年10月 5日～12月26日

10月 5日 器材準備。法58条の2の報告をおこなう。

10月 9日 器材搬入、整地を行いテント設営。

- 10月10日 東3号窯の焚口地部分を確認するためにトレント301をテント東側に設定し掘り始める。
- 10月11日 伊部南大窯跡及びその周辺の地形測量の打合せを、現地で㈱クラソクの技師とおこなう。
- 10月12日 トレント301では、東3号の焚口が大部分削平を受けていることが判明。
- 10月15日 作業道のため昨年度調査できなかった部分にトレント302を設定。東3号の北側端（焚口部分）を確認するため。
伊部南大窯跡約南東70mの地点にトレント601を設定。分布調査の際、作業道の岸面で黒色土と須恵器片が確認されたので、その性格を明らかにするため。
- 10月16日 テントの台風対策をおこなう。雨天作業中止。
- 10月18日 トレント601で黒色土のたまりが確認され、それがかなり広範囲に広がる可能性が出てくる。
- 10月19日 トレント302で東3号の窯の床と一部柱基底部を確認。
トレント601で確認された黒色の広がりを確認するために、南5mの所に平行してトレント602を設定。
- 10月23日 トレント601の黒色たまりの上面にかなりの湧水があり、写真撮影が進ます。
トレント602の東端で少量の須恵器片と黒色土を確認。
- 10月24日 トレント601出土状況の写真撮影。平面図作成。
トレント603を設定。黒色のたまりの東への広がりを確認するため。
- 10月25日 トレント604を設定。磁気探査で反応があった箇所の遺構を確認するため。
- 10月26日 トレント301出土状況の写真撮影。
トレント601黒色たまりが東に広がるので、トレントを東へ拡張。
トレント605を設定。掘り下げ開始。ごく少量の須恵器片を確認。
- 10月29日 トレント301、302断面図作成。
トレント605上層で須恵質の土鍾を確認。
- 10月30日 トレント601東拡張部分で黒色たまりはおさまることを確認。
トレント602の東端で確認された焼土層は幅1m前後で東へは広がらないことを確認。
トレント604北側部分を拡張。確認された集石の性格を把握するため。
トレント606を設定。南側山頂に向かっての遺構のひろがりを確認するため。
調査担当石井、日本六古窯サミット特別展「日本六古窯名品展」の打合せ。
- 10月31日 トレント302平面図作成。
トレント601東拡張部分がほぼ堀上がり。
トレント602堀上がり。平面面写真撮影。
トレント604継続して掘り下げるが、集石の性格は不明。
トレント605東端で、須恵器坏片及び窯壁と思われる部分を確認。この時点で初めてトレント602の焼土層が窯の壁で、焚口付近であることが判明。全長5m弱、幅1m弱、急勾配の傾斜をもつ窯を想定。
トレント606継続して掘り下げる。北側山頂に向かっての遺構の広がりはない模様。
- 11月1日 トレント601遺物出土状況6×7写真撮影。
トレント602断面写真撮影。

トレンチ605煙出し部分のメモ写真。中央軸を設定、半分下げる。

トレンチ606写真撮影。

11月2日 トレンチ601遺物出土状況平面図作成。

トレンチ602断面図作成。

トレンチ604北側に拡張して継続して掘下げ。

トレンチ605窯内のみ半分掘下げた所で、 6×7 写真撮影。

トレンチ301トレンチ東側黒色部分掘下げ。

11月3日～11月12日まで

日本六古窯サミット特別展「日本六古窯名品展」借用資料返却のため現場を1週間中断。

11月12日 トレンチ601北側を拡張して黒色部分を掘下げ。

トレンチ602断面図作成。

トレンチ605煙出し部分の平面図作成。

トレンチ604最終的に遺構・遺物確認されず。集石は自然の堆積の可能性が大きい。写真撮影のための清掃。

金重第1地点調査開始。調査前の写真撮影。長軸の設定。掘下げ開始。煙出しの一部を確認。

11月13日 トレンチ301継続して黒色部分掘下げ。

トレンチ601黒色たまりの状況がよくわからないので、サブトレンチを設定して掘下げ。

トレンチ602～605窯断面図作成。

トレンチ604堀上り。写真撮影。

金重第1地点長軸のトレンチ内で、窯壁、土柱を確認。土柱は従来の丸柱と角柱の2種類ある模様。

11月14日 トレンチ601サブトレンチ掘り上がり。断面写真撮影、図面作成。

トレンチ604断面図作成。

トレンチ606断面図作成。

金重第1地点長軸トレンチを引き続き掘下げ。「大日本伊部陶」との陶印のある破片確認。耕土置場を2ヶ所追加。

11月15日 トレンチ301、302の配置図を作成。トレンチ601～606の配置図を作成。

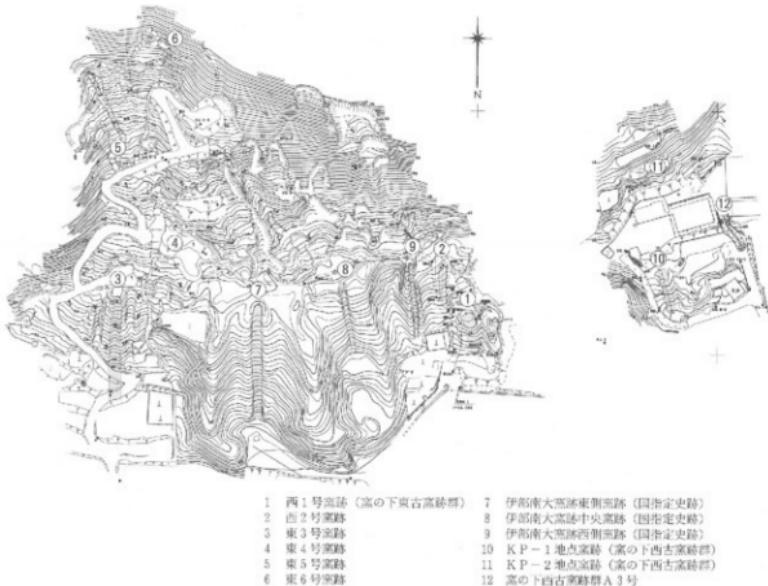
トレンチ301継続して黒色部分掘下げ。

金重第1地点焚口を確認。長軸トレンチ中程で、床面の角度を補正する板状の窯道具を確



第3図 三次調査現地説明会

- 認。以上から、この窯は全長18m以上と想定。
- 11月16日 金重第1地点初戸部分東半分のみ掘り上がり。煙出し部分の東南コーナー確認。煙出し南側溝を堀上。溝南側は、客土か。この時点での窯が初戸+6部屋+煙戸（煙山）の8部屋で構成されていることが判明。
- 11月19日 金重第1地点窓断面図写真撮影。各房の東側の壁の位置を確認するために、長軸に直交する形で4箇所の拡張区を設定。窯西側未掘部分の草刈。
- 11月21日 金重第1地点拡張区がほぼ掘り上がる。その結果、煙出し付近で窯床の傾斜が緩やかになっていること及び床が張り替えられていること、初戸と1の部屋の仕切りの柱が巨大な3本柱であることが判明。
- 11月22日 23日に開催される吹奏楽フェスティバルの準備のため現場中止。
- 11月26日 金重第1地点写真撮影のため全面掃除。
- 11月27日 金重第1地点全景及び部分写真撮影。
金重第2地点伐採開始。
- 11月28日～30日 現地説明会準備。見学ルートの整備および環境整備。
- 11月30日 備前市文化財保護審議会開催。現地見学。
- 12月1日 現地説明会開催。現場が史跡地周辺のかなり広い範囲に及ぶため、コースを周遊する形で説明を行う。約120名の方の参加があり。
- 12月3日 金重第1地点 窯の測量のため割付。
金重第2地点 トレンチ1、2設定。
- 12月5日 金重第1地点 平断面図作成。
金重第2地点 トレンチ1掘り下げ開始。表土直下で床面を確認。
- 12月7日 金重第2地点 トレンチ2掘り下げ開始。
- 12月10日 金重第1地点 実測継続。
金重第2地点 トレンチ1の西側で確認された物原の掘下げ。
- 12月11日 金重第2地点 トレンチ1ほぼ掘り上がり。
- 12月12日 金重第2地点 トレンチ2中央付近で窯の落ち込みと考えられる地点を確認。
- 12月14日 金重第1地点 実測ほぼ終了。
金重第2地点 窯内ほぼ掘り上がり。
トレンチ301・302埋め戻し。
- 12月17日 金重第2地点写真撮影。トレンチ603・604埋め戻し。
- 12月18日 トレンチ601埋め戻し。
- 12月19日 金重第1地点埋め戻し開始。
金重第2地点トレンチ1・2平断面図作成。
- 12月20日 金重第1地点埋め戻し終了。
- 12月21日 金重第2地点埋め戻し終了。
- 12月25日 器材撤収。テント片付け。第3次伊部南大窯周辺確認調査現場終了。



第4図 窯跡位置図

2. 四次調査の経過

期間 平成14年4月3日～6月13日

4月2日 磁気探査のため史跡地内草刈開始。発掘調査予定地の地権者にあいさつし、承諾書をもらう。

4月3日～5日 8日～9日

草刈。

4月10日 磁気探査のための調査区を設定。庶務課職員の協力でくい打ち。午後から現場テント設営のための整地、コンバネ搬入。

4月11日 器材搬入。テント設営。

4月12日 磁気探査用器材を受け取るため、奈良へ出張。

4月13日 調査関連のため事務。

4月15日～18日

奈良文化財研究所埋蔵文化財センター測量室長西村康氏による磁気探査。調査結果の詳細は伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ参照。18日には調査を公開。20名前後の参加あり。

4月20日 調査関連の事務。

4月22日 発掘地点が標高60m付近にあるため、コンバネなどを猫車で複数回にわけて運び上げる。

現場は急傾斜地のため、コンバネを利用して排土置場を設営。

- 4月23日 磁気探査用器材を返却するため、奈良へ出張。
- 4月24日 トレンチ601、602の埋め戻し上を排出。
- 4月25日 トレンチ605埋め戻し土を排出。窓にともなう造構を確認するためトレンチ602を東側へ拡張。灰原や窓の広がりの範囲を確認するためトレンチ601を南側へ拡張。
- 4月26日 カメラ不調。トレンチ602東拡張区には造構はない模様。トレンチ601南拡張区の表土層をはぐ。近世末備前焼片確認。
- 現場終了後、佐山地区でオオサンショウウオが発見されたとの報があり、対応に追われる。
- 4月28日～5月6日 現場ゴールデンウィークのため休み。
- 5月7日 トレンチ601南側拡張区掘下げ。午後雨のため中止。
- 5月8日 トレンチ601南側拡張区掘下げ。南端、表層下5cm部分で径40～50cmの黒色土の部分検出。
- 5月9日 トレンチ601南側拡張区北側部分掘下げ。先日確認した黒色土部分検出写真。南側拡張区内に窓の長軸延長ラインを設定。
- トレンチ602東側拡張区壁写真。
- 5月10日 雨天。現場中止。
- 5月13日 トレンチ601南側拡張区 北側部分掘下げ。黒色土部分、平面図作成、半裁掘上。
トレンチ602とトレンチ605間の窓主要部分に西1～3区、東1～3区を設定。西1、2、3区の表土層を下げる。この時点で窓のプランは検出できず。
- 5月14日 トレンチ601南側拡張区 北半分を引き続き掘下げ。黒色土部分、全面写真。
トレンチ602南側 西1～3区掘下げ。
- 5月15日 雨天作業中止。
- 5月16日 にわか雨程度だが、急斜面のため滑落の恐れがあるので作業を中止し、道具の手入れを午前中おこなう。
- 5月17日 雨。作業中止。
- 5月19日 調査資料作成。
- 5月20日 トレンチ601南側拡張区 十手はずし。西側から1.5m部分で鉢確認。全体に水が染み出て部分的にしか作業できず。
トレンチ602南側 西1～3区、東2～3区、数cm掘下げ。東2、西3区でかすかに窓壁検出。
- 5月21日 トレンチ601 ベース層上の流土層をさげる。相変わらず湧水あり。
トレンチ602南側 西1～3区、東1～3区、掘下げ精査。ほぼ全区で窓壁検出。写真撮影のため掃除。
- 5月22日 トレンチ601 流土層掘下げ。湧水が多いので、西側に排水溝設定。窓の長軸延長ラインの断面撮影。
トレンチ602南側 窓跡検出時の全景写真。窓内掘下げ。西2区で床面確認。
- 5月23日 蒸し暑さのためか、作業員がほとんど来ず。
トレンチ602南側 東1、2区窓内掘下げ。西1、2区窓内掘下げ完了。この時点で窓の

- 構造がほぼつかめる。全長4m弱、最大幅1m強、勾配30度。
- 5月24日 日中かなり暑くなる。
 トレンチ601 溝水がおさまったので、北半分の面をそろえる。
 トレンチ602南側 東3区掘り始め。他の区はほぼ完了。東1区、天井残存部写真。東3区で、床面に引きちぎられるような感じの割れ目。
- 5月25日 補助金関連事務。
- 5月27日 トレンチ601 灰原上面検出時写真。
 トレンチ602南側 セクションポイントにそって土手整形。
 見学者用の土手設営。大手前大学赤松さん見学。
- 5月28日 トレンチ601 黒色土を堀下げ。
 トレンチ602南側 土手の整形。
 文化庁坂井秀弥文化財主任調査官、岡山県松本和男課長代理現地指導。窯についてはこの状態で埋め戻すよう指導あり。
- 5月29日 トレンチ601 黒色土上面薄くはいで、遺物検出。
 トレンチ602南側 土手清掃。
 午後からR.Cスカイワークスのラジコンヘリによる写真撮影。撮影中、ヘリが墜落したため、翌日再撮影。本日より現場公開。堀江祥山氏、横山隆俊氏等見学者約20名。
- 5月30日 トレンチ601 土手の北側と南側で遺物の検出状況が異なっていたが、精査で解釈可能になる。
 トレンチ602南側 現時点での全面写真。
 午前中、R.Cスカイワークスと再打合せ。午後ラジコンヘリで撮影。
 倉前陶芸センター研修生、河本清くらしき作陽大学教授等約10名の見学者。
- 5月31日 トレンチ601 写真測量準備。フジテクノと打合せ。
 トレンチ602南側 平面図作成。
- 6月3日 午後から文化財補助金ヒアリングのため、午前中のみ窯の平面図作成。
- 6月4日 トレンチ601 写真測量のため、清掃。
 トレンチ602南側 窯延長断面作成。
- 6月5日 本日33.2度の最高気温。
 トレンチ601 遺物検出写真を6×7で。ベース層の最終確認のため、サブトレ設置。
 トレンチ602南側 窯の図面にレベル入れ。遺物ナンバーワーク取り上げ。
- 6月6日 本日32.6度の最高気温。
 トレンチ601 窯延長断面写真。実測。遺物をナンバーワークで取り上げ。
 トレンチ602南側 全面清掃。
- 6月7日 文化財担当者会議のため現場休み。
- 6月8日 トレンチ601 遺物取り上げ継続。
 トレンチ602南側 全景写真。部分写真。
- 6月10日 トレンチ601 埋め戻し開始。
 トレンチ602南側 西3区実測。

- 6月11日 台風接近の影響で湿度が高い。
トレンチ601 南側ほぼ埋め戻し完了。
- 6月12日 最高気温31.6度。全面埋め戻し完了。
道具箱などを解体して、コンパネなどを持って下山。
- 6月13日 最高気温31.2度。テント・器材撤収。
伊部南大窓跡周辺で実施した4次に及ぶ窓跡群の調査は、この日すべて終了。

第3節 調査および報告書作成の体制

調査および報告書作成は以下の体制で行った。

備前市教育委員会

- 教育長 中西利男（～平成16年5月）
　　H下弘海（平成16年5月～平成17年5月）
　　正宗洋三（平成17年6月～）
教育次長 武内清志（～平成17年3月）
　　東原恒男（平成17年3月～平成17年6月）
　　杉原慶悟（平成17年7月～）

生涯学習課

- 課長 甲矢 弘（～平成15年3月）
　　武内清志（平成15年4月～6月）※教育次長兼務
　　細見峰一（平成15年7月～平成17年3月）
　　谷口富祥（平成17年3月～）
課長代理 山下茂樹（平成12年4月～平成15年3月）※文化係長兼務・現場総括
　　木長章彦（平成16年4月1日～18年3月31日）
　　福山哲明（平成18年4月～）
文化係長 岡正千丈（平成15年4月～平成16年3月）
　　石井 啓（平成14年4月～副主幹～平成16年4月）※調査、整理担当
主任 福本浩子（平成16年4月～）

備前市歴史民俗資料館

- 学芸員 岩崎紅美（平成17年4月～）
常勤臨時職員
　　入江津々美（平成13年4月～非常勤臨時職員～平成18年4月）
非常勤臨時職員
　　草加尚子（平成14年4月～平成17年5月）
　　松末左知子（平成17年4月～平成18年6月）

資料1

文化庁文化財調査官坂井秀氏来函について

日 時 平成14年5月28日(火)

出席者 文化庁記念物調査会議室
岡山県教育委員会文化課課長代理 坂井秀氏
備前市教育委員会生徒学習課課長代理 甲斐・弘
備前市教育委員会生徒学習課課長代理 山下茂樹
備前市教育委員会生徒学習課副主幹 石井・将
場 所 14:00 伊丹市2階会議室
(課長桂道説明・石井道跡整備説明)
14:30 伊部南大窓跡及びその周辺
15:30 西大窓跡・北大窓跡・天保窓

指掌内容

- 周辺について、図面上で追加指定も可能。
- 中世の西日本の多くの遺跡で備前焼が出土している。そういう意味でも周辺でも近世の窓跡だけでなく、中世の窓跡にも着目し、全体の群として指定の方針もありうる。また、そういう意味でも備前焼の資料館などがあれはいいのではないか。
- 市街地「西大窓跡」「北大窓跡」「天保窓」も伊部南大窓の追加指定時に「近世の備前焼」という総合的な視点で指定を考えてもいいのではないか。そのためには、文化部の補助金(重要文化財認定費負担金)などの支援を受け、それぞれの遺跡の基本的調査(地形測量、試掘、窓跡の基礎などを確認)を実施してみてはどうか。
- 「備前焼」は西日本の宝塚焼の中でも重要なことで、市全体の姿勢として、史跡等を取上げ、活用していくことが望ましいのではないか。
- 一度、東京へ市としては伊部南大窓跡およびその周辺、また市内に所在する備前焼の窓跡群についてはこう考える。という印象をもって说明していく必要がある(松本課長代理)。
- 現在調査中の東6号については、窓跡についてはこれ以上調査せず、将来の整理に備えて、保存を考えた埋戻しをしてください。また、物販については、プラン(平面)が確認できたら、それだけだと思います。

資料2

平成14年度第1回史跡伊部南大窓跡等整備連絡会について

日 時 平成14年8月23日(金) 14:00～15:40

会 場 備前市伝統産業会館2階会議室
出席者 木村宏道(陶友会理事長) 鹿部鉄蔵(伊部紳氏会長)
水野順三(伊部瓦づくりの会事務局長)
宮本透(陶工会所専務)
長尾清一(保護審議会委員長) 土地所有者および代理

備前市教育委員会
中西利男教育長 甲斐弘課長 山下茂樹課長代理
石井啓副主幹

(1) 市の方方提示後の質問等について

- どこまで補助金がでるのか。
- 周辺について新たに落ではないのか。とにかく窓についてでは現状で保護して欲しい。「小さな世界都市構想」とリンクさせることではないか。
- この連絡会の意見はどうなるのか。この会の性格は、教育委員会としては具体的にどうしたいのか。
- 墓地については別に移転してもいいのではないか。
- できるだけ早く、計画を前倒して進め欲しい。
- 確定したばかりの備前焼振興策とすりあわせをして欲しい。
- 文化財を保護する立場から、計画は進めていただきたいが、もう少し遅い期間で実施できるよう財政部局と調整して欲しい。
- 土地所有者としては協力します。
- 地元としては協力します。
- 両辺の道路など環境整備については関係部局とよく調整をしてください。
- 次回会議は伊部南大窓跡の草刈を委託管理している「人前町内会」

員を加える。

- 専門委員会が立ち上がり、基本構想などができるがれば、この会に提示し、意見をもとめることになると思う。(事務局)

会の運営

- 教育委員会の提示した整備案については、とくに異論ではなく、了承できるが、実施期間については10年とは言はず、できるだけ速やかに短期間で完了させて欲しい。土地所有者についても、用意等そういう段階になれば協力します。

資料3

○史跡伊部南大窓跡整備委員会設置要綱

平成17年3月22日
教育委員会訓令第9号

(設置)

- 第1条 史跡伊部南大窓跡の史跡整備事業**（以下「事業」という。）について円滑な推進を図るため、史跡伊部南大窓跡整備委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(新規会員)

- 第2条 委員会の新規会員は、次のとおりとする。**

- 史跡伊部南大窓跡の整備について指導すること。
- 委員の実施について審議・指導すること。
- 前各号に掲げるもののほか、目的達成のため必要な事項（組織）

- 第3条 委員会は、委員8人以内で組織する。**

- 委員は、史跡伊部南大窓跡に關するものうちから、教育委員会が指名する。

(委員長及び副委員長)

- 第4条 委員会に、委員長及び副委員長各1人を置く。**

- 委員長及び副委員長は、委員の互選による。

- 委員長は、公序良俗に従事する。

- 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、その職務を代理する。

(会議)

- 第5条 各会員の会議は、委員長が招集し、委員長が議長となる。**

- 委員会は、委員の半数以上が出席しなければ会議を開くことができない。

- 委員長は、必要に応じて、委員会に関係者の出席を求める。説明人は意見を述べることができる。

(任期)

- 第6条 委員の任期は、事業の完了の日までとする。**

(出候)

- 第7条 委員会の庶務は、教育委員会生徒学習課において行う。**

(その他)

- 第8条 この附則に定めるもののほか、委員会に於し必要な事項は、委員長が別に定める。**

附 則

この附則は、平成17年3月22日から施行する。

資料4

平成14年度第1回史跡伊部南大窓跡整備委員会について

日 時 平成15年3月9日(日) 13:30～15:30

場 所 市役所2階会議室

出席者 河本清委員長 及川清一部委員長 田中忠彦委員

木村謙委員 篠原信人委員

岡山県教育文化課

松本和男課長代理 木村啓介課長補佐

備前市教育委員会 中西利男教育長

生涯学習課 甲斐弘課長 山下茂樹課長代理

石井啓副主幹

協議事項

- (1) 委員長・副委員長の選出

委員長 河本清 委員

副委員長 長尾清一委員

- (2) 実跡伊那大室跡整備委員会設立までの経過報告について
- ・「小さな世界都市構想」、『街頭虎振政策』の内容についての質問。(西村委員)
 - ・「追加指定」を含めてこの委員会として考えていくんですね。(葛原委員)
 - ・「えむら」の内訳、夢遊症施設の性格について質問。(葛原委員)
 - ・「切端の開発」は市(山長部局)も含んでいたんですね。(開発委員)
 - ・上層階を教育委員会がとり市長部局と「すり合わせ」を。(葛原委員)
 - (3) 整備基本方針について
 - ・備前市の地盤的なもの、年代的なものについて質問。(西村委員)
 - ・まず「南大窓跡」を察知し、後で周辺の窓の整備にとりかかるのがいいのではないか。(佐藤良代議員)
 - ・南大窓でもモデル的な整備を行い、段階的に西、北の整備に移っていくのがいいのではないか。(田村博良博佐)
 - ・10年というスケジュールはやはり長い。1段階、2段階と分けていくのがいいのではないか。備前市の歴史をきちんと押さえられる作業が必要ではないか。(葛原委員)
 - ・南北窓、西大窓、北人窓は備前虎の歴史の核になるので、西人窓跡群は比較的の果たして残存している。南大窓群を察知して、西人窓跡群にかかるスケジュールがいいのではないか。北・西人窓跡測定するのなら、裏側の制约はどうあります。(河本委員)
 - ・伊那の全谷体を見ながら、南大窓をはじめに整備しよう。でも、10年は長い。(河本委員まとめ)
 - ④のトレンド調査などどこを狙っている。(河本委員)
 - ・磁気探査で反応のあったもうひとつの方について一番興味がある。その調査は整備計画ともすり合わせなければならない。(開発委員)
 - ・史跡内を見学者が歩く道、史跡までのアプローチ、道、ガイドダンス、駐車場など整備になると総合的に考えていく必要がある。(西村委員)
 - ・史跡の北山場の活用も考えなければならぬ。(河本委員)
 - ・南北窓だけ見に来るのだけでなく、周辺の観光も含めたコースの中に位置づけるのがいいのではないか。(開発委員)
 - ・資料館、ガイドンス施設を充実しないと、人がこない。(河木委員長)
 - ・環境、自然時学、保存科学など専門家の意見を聞く必要があるのではないか。(西村委員)
 - ・崩落等の問題はあるが、物辱等は迫力があるので、報告書に残す方向で考えた方がいいのではないか。(河本委員長外)
 - ・委員会で整備の方針を立てて、基本計画の策定はコンサルタントを立ててとりかかり(市役所)、駐車場など周辺の整備は文化財にした岡山県内蔵油の補助金をもらい、ガイドンス施設は文化庁の助成金、それと全般的な施設をコンサルタントにかかるかして、前倒して16年度で実施して。(田村博良・佐藤)
 - ・東屋未定地については、岡面上で決定する方向だが、西側だけでも先に指定は可能ですか。(開発委員)
 - ・飛び地になっているや重疊点の窓についてはどう考えますか。(河本委員長)
 - (4) 視地観察
 - ・特に必要なところで、中止。
 - 説明
 - ①できるだけ早くスケジュールを実施する。
 - ②南北窓跡の整備を先におこない、北、西等についてはその後着手する。
 - ③整備について自然科学、環境など専門家の意見を聞くことについて事務局で配慮する。
 - ④次回開催時に材料(コンサルからベース図等の提示)の提示がなければ、会議は延期しないので、他の窓の整備開催の資料も含めて、事務局で配慮をお望みします。
 - ⑤可能な作業、例は西側の追加指定などからおこなう。次回の開催は事務局で調整する。「追加指定」が協議確のみの委員会は間接せず、持ち回りで行なう。

資料5

平成15年度第1回河本委員会について

- 日 時 平成16年1月9日(金) 14:00~18:00
 場 所 優前市市民センター4階第2会議室
 出席者 付木本委員長 長尾清一委員長 明野忠彦委員
 岡山県教育庁文化課 平井泰男課長補佐
 優前市長 東山正樹(あいさつ)
 優前市教育委員会 中西利男教育長
 生涯学習課 総見峰一課長 田中丈士幹 石井将副幹
 あいさつ
 優前市長
 白川新介
 会議及び報告
 - (1) 平成14年度第1回委員会(平成15年3月9日)の議事報告及び現状までの経過
 - ・石窓跡報告
 - ・整備計画策定にあたっての調査予定は、複元的整備になるのか、現状維持の整備になるのか。(肥原委員)
 - ・市はどういう観點をしたいのか、何をしたいのかという考え方があつた上で話をどううる。(開発委員)

(2) 実跡伊那大室跡調査の現状と課題について

 - ・岡本・佐藤報告
 - ・指標地やその周辺の境界の確認及び作業段取りの確認。(河本委員長)
 - ・市として整備計画イメージ図はないのか。(河本委員長)→細見貢長が中央区予算の状況の説明。前回の復元想定図をコピーして配布・説明。
 - ・史跡地はかなり傾斜がある。樹木は跡跡保存のため除去されるとは思われるが、そうすると雨水がかなりあると思う。整備前の今段階からどこかの大字等に依頼して雨水量などの調査をしてみては。(肥原委員)
 - ・窓の床面を全部出すとなるといろいろ問題があるかな。(岡本委員長・肥原委員)
 - ・整備後の皆様も考えておかないと。(肥原委員)
 - ・大保護の復元、「現在の窓葉技術者」ができるのか。(開発委員・肥原委員)
 - ・復元的整備をしないと見に来た人が理解できないでは。(肥原委員)
 - ・物辱の整備はどうするのか。(肥原委員)
 - ・物辱の新規を開拓地で見せるのはかなりおがかりになるね。(河本委員長)
 - ・基地移転は考えていないのですね。(河本委員長)
 - ・北の広場の活用方法は。(開発委員)→備前虎造より前歴「かべりたいまつ」などのイベント会場としての割り合せが必要。(牛端局)
 - ・道路の中に人が入れるのは危険ですね。(肥原委員)
 - ・天保屋は最近遺跡が見えるようになります。(河本委員長)
 - ・整備費用はどれくらい思っているのか。(肥原委員)→「物辱の安定化」をのぞいて3億円ぐらい。(事務局)
 - ・物辱の断面の剥ぎ取りを行なって、ガイドンス施設に展示しては。(事務局)→技術的にはできるのでは、例えばウレタンでプロテクタを張りとか。(肥原委員)
 - ・お金があればさっちり保存処理をして東屋をみせることも可。被るのメンテ費用も必要。東屋の一部を見せていいけど。(肥原委員)
 - ・たとえば東屋については完全に埋め戻しをして保存するのではなく、一部をみせたほうがいいのでは。(河本委員長)
 - ・東、中央、西の窓については確認調査時、それぞれきちんとトンネルを入れ、現状・構造・年代をつかめば、整備手法はおのずと明らかにならう。(開発委員)

整備についての基本的考え方

 - ・物辱については一貫徹底の所の確認調査を行い、剥ぎ取りまたはブロック取りを実施後、ガイドンス施設ができるべきで展示。
 - ・東、中央、西窓については確認調査を実施し、その後整備手法を収容するか、現状維持では完全に埋め戻して保存するのではなく、一部露出展示等で現野にいておく。
 - ・大保護については全面して遺構を露出し、保存処理をしたのち覆屋を展示。どこまで復元するかは予算との兼合いになる。

(3) 整備委員会への準元代表の選任について

岡正雄・石井報告

- ・準元との関係は大事だからいいのでは。(岡正雄)
- ・懇ね了解しました。(各委員)

(4) その他

- ・説明板、標柱、ベンチの更新の報告。(事務局)
- ・追加指定については、東側部分も平成末定期の解消の努力をしつつ、西側の申請を先行していただき。(事務局)
- ・重複地點の天保窯については整備計画の中に含めない。(事務局)
- ・次回開催日は来年度予算が計上されれば、4月下旬から5月上旬にかけて第1回を開催し、あと2回程度開催できれば(事務局)

閉会あいさつ 長屋町委員長

予算獲得について努力してください。

資料6

国指定史跡「伊那大窯跡」等についての打合せについて

日 時：平成16年6月9日(水) 15:30～16:00ごろ

出席者：文化庁文化財部記念物課鑑定課文化財部専門主任文化財調査官

板井秀弥

岡山県教育厅文化財課絶賛部門担当 平井泰男

飯前市教育委員会生涯学習課文化係長 石井 啓

●経過説明

○坂井主任訓育官より以下の指導を受ける

- (1) 伊那南大窯跡の基本構想を作成する際は、当然中古の段階も含めて、飯前北大窯跡、飯前西大窯跡も視野にいれつつ、計画策定を行なうこと。
- (2) 伊那南大窯跡の西側の隣接地だけの追加指定では、「飯前はこんなもんかと思われる」で飯前北大窯跡・飯前西大窯跡も含めての国の追加指定を考えたい。市指定として保護されているので国指定になっていきやすと思う。時期については平成16年12月ごろ申請し、17年度春の指定としたい。時期については別に限らなければ、北・西大窯跡の資料を坂井主任調査官まで事前に提出してください。
- (3) 伊那南大窯跡の東側追加指定現状の状況は、改修しました。追加指定が現段階では困難かもしれません。今後整理を進めていく中で方策を考えていましょ。
- (4) 飯前城は日本を代表する焼き物です。飯前城の古跡群との保存や整備については結構取り組みが必要と考えます。例えば調査員の員長など調査体制の強化をはかったらどうでしょうか。

今後のスケジュールについて(予定)

8月下旬～9月中旬	平成16年度第1回史跡伊那大窯跡整備委員会
10月中旬～11月中旬	平成16年度第2回史跡伊那大窯跡整備委員会 幸ヶ丘跡調査がつかない場合は持ち回り
9月下旬	「第3回史跡伊那大窯跡等整備連絡会」の開催など県との調整
17年1月	南大窯跡西側隣接地、飯前北・西大窯跡など国へ追加指定申請
17年1月下旬～2月上旬	平成16年度第3回史跡伊那大窯跡整備委員会
17年3月	「基本構想」成果物作成
17年5月	文化審議会が指定を文部科学省へ答申

資料7

平成16年度第1回史跡伊那大窯跡整備委員会について

日 時 平成16年9月21日(火) 14:00～16:30

場 所 飯前市役所2階 応接会議室

出席者 河本清臣委員長・長尾信一副委員長・間瀬忠彦委員
 西村敬委員・葛原克人委員
 阿山原教育府文化課・田中齊樹施設主幹
 平井泰男総括参事
 飯前市教育委員会 日下弘尚教育長
 細見純一生涯学習課課長・石井啓文化係係長
 福本浩子文化係主任
 (株)空間文化開発機関研究 杉本政和研究員

1 開 会
 あいさつ 教育長
 自己紹介

2 協議及び報告

(1) 文化庁との協議内容

- 資料にもとづく事務局説明→なし
- (2) 史跡伊那大窯跡保存整備基本構想について
 ○意見・質問等
 ●基本構想全体について
 ○飯前市の都道府道にも係るような内容の構想となっているが、他都道府の調査が必要になるのではないか。飯前市では今後しばらく大規模な開発の予定はないのか?(葛原委員)
 →現在のところ開発の予定はない。(教育長)

- 整備の方法について
 ○地元の陶芸家の力から協力を得て窯を復元したり、セラミックセンターの技術協力を受けたりしてはどうか?(西村委員)
 ○陶芸家の方々を結びつけて整備に協力してもらうのは。(間瀬委員)
 ○陶友会等、陶芸家の組合を巻き込むのはどうか。個人個人に協力を求めるよりもやりやすいのでは。(西村委員)
 ○陶友会は財団法人といふこともあり整備に巻き込むのは難しいと思われる。(事務局・教育長)
 ○天保窯を復元(修理)して火を入れれば面白い。やってみようという意気込みのある陶芸家はいないものか。(西村委員)
 ○天保窯を復元するのは難しい。管理者の数が長年間に分かれ、今は200～300名になっている。一人一人に承認をもらうのは事実上不可能。(事務局)
 ○天保窯は市に当面してもらうなどしないと状況での整備は困難。(葛原委員・河本委員長)
 ○伊那南大窯跡の東側追加指定現状の状況は、改修しました。追加指定が現段階では困難かもしれません。今後整理を進めていく中で方策を考えていましょ。
- 飯前城は日本を代表する焼き物です。飯前城の古跡群との保存や整備については結構取り組みが必要と考えます。例えば調査員の員長など調査体制の強化をはかったらどうでしょうか。

●ネットワークについて

- アクセス、ネットワークを整備することが大切。現状では鉄道や国道によって南大窯と北・西大窯とが分断されてしまっている。鉄道に陸橋を架けるなど策を講ずるべき。(西村委員)
 ○駅前の再開発との関連は無視できない。(西村委員・間瀬委員)
 ○船長では実質に飯前城の鐵道沿線でやっている。こういったものと連動したネットワーク構想にできないか。(河本委員長)
 ○飯前市に留まらずもう少し豊富な文化財とともに済溝を持ってはどうか。行政方面に歸られる見方をしていると、近隣の良い文化財を見落としてしまう。(西村委員)
 ○飯前市は有名な文学者とも関係が深い。文学に遺などのネットワークを考えるってどうか。(葛原委員)
 ○現在白宗臼石室は取り壇して、文庫だけが陶芸家の方々の寄付等で応急対策を受けている。(事務局)

- その他の
 ○次回の委員会には、鉄道によって分断されている構想範囲をうまく結びつける具體案を2～3案提示してほしい。
 ○12月中旬をもとめに今回出された意見を取り入れて、構想の内容を詰めてほしい。
 ○活用整備という用語が多用されているが、これは保存整備とのように異なるのか。保存整備という語は聞いたことがあるが、活用整備という語は聞いたことがない。活用整備という語の意味、定義付けをしてもらいたい。(河本委員長)

- 丸山古墳は鶴山丸山古墳が正しい。丸山古墳だけではどの丸山古墳かわからない。(河本委員長)
- 伊弉諾という地名の使用は不適切。(河本委員長・間咲委員)
- (3) 平成17年度史跡等地元発掘調査計画について
 - トレンチの幅について確認。(河本委員長)
 - トレンチ6が大規模なのは、断面割が取りが目的なのか。(西村委員・間咲委員)
 - トレンチ6削ぎ取りはかなり困難なでは。危険性があるのでは。補修の仕方も考える必要があるのでは。(葛原委員・間咲委員・西村委員)
 - トレンチ1、2の設定の意味は。(西村委員)
 - 宮内の土柱の搬方は。(西村委員)
 - 東側空堀の巨大木は調査時などどうする。(河本委員長)
 - トレンチ7の設定の意味は。トレンチ8との関係は。(西村委員)
 - 17年度の調査の開始時期は。(河本委員長)
 - (4) 整備委員会への地元代表の選出について
 - 協賛額について説明(事務局)
 - 選任については反対。間にたって調整するのが行政の役目。委員の選任の判断は事務局の役目。(葛原委員)
 - 学識経験者、たとえは現代作家(人間幽宝)などの方も考えられるが。。。 (河本委員長)
 - 委員の選任については事務局で参考していただきたい。(委員会)
 - (5) その他

3 閉会

あいさつ 委員長

資料8 平成16年度史跡伊那南大茎跡等整備連絡会

日時：平成16年12月21日（火）18:00～20:00

会場：備前市保健センター3階研修室1

出席者：木村正造（斯文会理事）、奥畠悠里（伊那総区長）、

草地位志（伊那市里づくり推進の会）

草地位志（大桑町内会長）

長尾清一（鹿児島市文化財保護審議会委員長）

尼元元重（大桑町内会副会長） 土地所有者および代理

備前市教育委員会 研見賀一郎・学習指導課長

石井浩文化係長 福本浩子主任

- 伊那南大茎跡等の整備基本構思について提出後の意見など
 - 更6号空堀の上にはもう誰もいないのか。埴輪跡の台は東京駅の大井をさえる柱で貴重なもの、風化が進んでいるので、配慮してほしい。→コンクリートでも相談してみる。(事務局)
 - 南大室には看板など、モニュメントが必要。美術館的な施設ができる、南大室跡がよくならない。史跡整備で立ち入り禁止にされることは困る。ボランティア育成制度の実例。(事務局)
 - 夏3号跡踏付道の上については風などで倒れる恐れがあるので、木をまよきたい。高さを低くしたい。
 - 保存整備だけでなく、観光等も現状に入れてほしい。→他の部署にもアピールしてほしい。(事務局)
 - 運り上などの整備手法はそれないのか。→さまざまな整備手法がある。(事務局)
 - 指定申請はいつするのか。方向を因めてできるだけ早くしてほしい。→北・西大室の面削後、指定候補範囲が確定後。(事務局)
 - 東側空堀の前にあるコンクリートのラインと北側面地の崩落がなんとかならないか。土を盛るか、切るか。(安部・草地位)
 - 合併があるので、南大室に集中できるのか。文化庁と市の考え方には違いがあるのでは。→文化庁の考え方にも変わってきてている。既往だけでなく、活用もという風に。(事務局)
 - 草刈も観光客がたり、学習の場として利用されると助かる。より安全によりわかりやすく展示を。前の出入口も車を止められるようになったし。案内板を設置するのも立てたほうがいい。
 - 封間が少し長いのは。計画が早く進むように。周辺の看板も考えてほしい。
 - 園内に入った大きな看板などを設置してほしい。→面工や企画とも相談していく。(事務局)
 - 整備委員会への地元からの選任についての説明。(事務局) →別に入らなくていい。かまいません。

資料9

平成16年度第2回史跡伊那南大茎跡整備委員会について

日 時 平成17年2月6日（火）13:00～15:30

場 所 備前市役所2階 応接会議室

出席者 河本清美委員長 長尾清一副委員長 間咲忠彦委員

西村謙委員 畠原克人委員

岡山県教育府文化課 半川泰男総括顧問参事

田中秀樹准主幹

備前市教育委員会 日下弘治教育長

細見峰一郎学習課課長 石井博文化係係長

福本浩子文化係主任

(株)空間文化開発機器研究 真鍋建氏男代表取締役

杉本政和研究員

1 開会

あいさつ 教育長

あいさつ 委員長

2 協議及び報告

- (1) 第1回史跡伊那南大茎跡整備委員会からの現在までの経緯報告
- 12月21日開催の「史跡伊那南大茎跡等整備連絡会」について、事務局説明。

横山さんから質問で、指定申請を急いで欲しいという理由は。(河本委員長・間咲委員)

- 裏面の削落は早く対応したほうがよいとのことです。(西村委員・間咲委員・河本委員長)

- (2) 史跡伊那南大茎跡整備基本構思について
 - 「乗り窓」の用語を使うのか？既にできないのか。(間咲委員) →穴窓で統一する。(委員会) 適切指定時に指定済み理由を変更することは可能。(空間文化 真鍋取締役)
 - 利用プログラムの「伊那大室跡の四季」の「冬の海鳥」「鳥」 「ワラビ」「天の川」「雪景色」など季節感がされているものがある。(間咲委員) →山の観光パンフを参照した。(空間文化 真鍋取締役)

●基本構思について説明 (空間文化 真鍋取締役)

- 整備委員会で協議するのは基本的な考え方から行うのか。(委員会) →基本構思をまとめるための協議である。(空間文化 真鍋取締役)
 - 存在の顕在化とはどういう意味か？(河本委員長)
 - 市の総合計画とのやり合わせは？(河本委員長) →合併後に新市の総合振興計画に盛り込む。(組合課長)
 - 南大室跡の展望空間の扱いは？(河本委員長) →整備未定なので、取扱が難しい。(事務局)
 - 備前焼つまりは南大室跡にはほとんど見学者がない。(間咲委員)
 - 「ボランティア」「組織化・開拓など」と「安全」が重要なポイントになると思う。(西村委員)
 - 南北分断の問題の解決(地下道、デッキ)も大切なポイントになる。(西村委員・間咲委員・河本委員長)
 - 「備前焼信頼発信基地」という考え方はなかなかいいのではないか。(西村委員)
 - 合併によって階段、備前焼、日生などの観光資源が一体として考えられる。(日下教育長)
 - 16%の人口が備前焼に関連しているのは大きいし、取り込めるのでは。(西村委員)
 - 都計画道路については地下トンネルとして計画图に入れる。(各委員)
 - 南大室のいつ時代を整備するのか(同時並存?)、窓の存在したときには樹木など景観は？(真鍋代表取締役) →樹木はあるが、窓は同時に施設でいい。(間咲委員)
 - 西大室跡のイベント広場の新規開室は難しいのでは。条例で制限があるのでは。(事務局)
 - ユニーク・ラーニング・パブリックは意識した表現にする。(河本委員長)
 - 南北分離の解消にいいアイデアは？→複数路をまたがる駅舎の改築などがある。(空間文化 真鍋代表取締役)
 - まちに對象は何かあるか？(西村委員) →生息環境をなくす。ニコチン、硫黄などもある。(空間文化 真鍋取締役) →タバコを

植えるのは? (西村委員)

- 明板面に樹前波をつかうのは、待など補助的に使う方がいいのでは? (各委員)

3 閉会

あいさつ 長尾副委員長

資料10

史跡伊部南大室跡発掘基本構想等についての打合せについて

日 時: 平成17年3月22日(火) 11:30～12:30ごろ
出席者: 文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門主任文化財調査官
坂井秀亦
文化庁文化財部記念物課史跡調査部副主任文化財調査官
小野健古
岡山県教育庁文化財課能編括番事務官 幸平泰男
備前市教育委員会生涯学習課文化係長 石井 啓

●説明説明(石井参考・空間文化・石井説明)

●坂井主任調査官・小野調査官より以下の指導を受ける。

- 市指定史跡「伊部・北大室跡」については、補助事業で測量後、簡単な報告書を平成17年度末までに作成すること。(坂井主任文化財調査官)
- (2) 平成18年度7月、作成した報告書をもとに伊部南大室跡の西側隣接地とともに一起去り国指定申請すること。指定名称としては「備前御庭園」などが考えられる。(坂井主任文化財調査官)
- (3) 追加指定申請候、近世だけではなく、中世の墓跡も含めて面的な保護をかんがえていくこと。近いうちに中世の墓跡の現状確認にいたい。(坂井主任文化財調査官)
- (4) 「まちづくりと史跡修復」の専門家(大学の先生)を委員として加える必要があるのでは。(小野主任文化財調査官)
- (5) 市としては、積極的に取り組んでいくのか。整備委員会のメンバーに、市役所の都市計画部門、企画部門、観光部門の担当者をオブザーバーとしていてはどうか。(小野主任文化財調査官)

今後のスケジュールについて(予定)

17年度

- | | |
|---------|----------------------------------|
| 4月～7月中旬 | 西・北大室跡の内地登記・相続調査 |
| 7月 | 西・北大室跡の測量調査(国庫補助付決定後) |
| 8月下旬 | 「第4回史跡(伊部南大室跡等)整備連絡会」の開催など地元との調整 |
| 9月上旬 | 「備前造フォーラム」開催(資料館紀要刊行) |
| 9月～12月 | 伊部南大室跡史跡地内発掘調査 |
| 10月 | 平成17年度第1回史跡伊部南大室跡監査委員会(調査指導) |
| 2月 | 平成17年度第2回史跡伊部南大室跡監査委員会 |
| 3月 | 史跡伊部南大室跡周辺跡群調査調査報告書刊行 |
| 3月 | 西・北大室跡調査根拠発行 |
| 15年度 | |
| 15年7月 | 南大室跡西側隣接地、備前北・北大室跡など周へ
追加測定申請 |

資料11

平成17年度史跡伊部南大室跡等整備連絡会

日 時: 平成17年9月16日(金) 18:00～19:30

会 場: 備前市霞ヶ丘センター3階研修室1

出席者: 木村宏道(陶友会理事)・平川史(陶友会理事事務)

　　堺部謹賀(伊部地区会員)・西岡尚樹(伊部里づくり推進の会)

　　長尾清一(備前市文化財保護審議会委員長)

　　備前市教育委員会 谷口富洋課長・石井裕文化係長

　　坂本浩子主任

開会あいさつ

谷口課長

①伊部南大室跡等の保存整備基本構想案(冊子)について提示後の

意見など

- 北大室跡は福語神社を含めた文化ゾーンとして考えたほうがいいのでは。地域に親しみの持てるもの、愛着のもてるものに。「現在駐車場もない。市役所や区を含めて考えていかなければ。申請の許可をもららう態、ご努力を」(事務局)

・北大室のいらぐるん下の高はどうなっている? →市指定地にはなってないが、これから調査をしていく。(事務局)

- ・南大室門前の2haについては、伊部区が購入した。筆頭未定については、今度のチームで解説作業をしている。廟里庵の下まで作業道をつづりようと思う。おおきな改変をなさうつもりがない。後採については規模が大きいので農林水産課に申請中。東3号竪穴の穴口は、後採した木を燃やすため。また、頂上を脊梁的に無理やり公開化をした。→公有化できないということで、文化庁と協議してきた。分離して公有化できるとなると、文化庁と再度議が必要になってくる。(事務局)

・東3号竪穴の東側に実際に焼成できる窯を置きたい。東3号窯跡を生かすかを文化史と諧調してほしい。→東3号窯跡のところは、公有化が前提に考えている。補助率が80%のうちに実施したい。ただ、東3号窯跡と指定範囲に個人の軸地があるので、公有化が可能か、文化庁とも協議をしていただき。(事務局)

②伊部南大室跡発掘調査について

- ・発掘まつりに現場を公開する意味は。→史跡を訪れる観光客の安全の確保と史跡の広報(事務局)

・作業員募集の協力(事務局)

閉会あいさつ

長尾文化財保護審議会委員長

予算が新しいことです。

資料12

国指定史跡 伊部南大室跡 発掘中!



調査地点の復元伊部油池一帯では、古くから焼き物の遺跡として知られており、現在も400年を超える歴史や作業が受け継がれています。備前市教育委員会では、平成11年度から4年間にわたって復元調査の歴史の中でも最大の課題である伊部南大室跡周辺の発掘調査を行ってきました。今年の調査で新たに多くの遺物が発見され、江戸時代の埋蔵品の出土につきまぎらわしい問題が解決されることが期待されています。

10月・11月四日と六箇所作業を行っています。各自に見学ができるまで、お気軽にお立ち寄りください。

13日(土)9:00～12:00 13:00～16:30

16日(日)9:00～13:00

・少雨決行・見学は時間内なら随時可能 調査員が挨拶挨拶を承認します。



連絡先 備前市教育委員会生涯学習課
kyouyou@city.sizen.okayama.jp

歴史的価値と歴史大室跡

歴史的価値の定義は、古代時代の建築物(うち世界遺産のもの)が修復して賞を取ることに由来する。世界遺産には、その歴史的価値の高さを評価されるところから、それを主な目的とする歴史的価値は、歴史的・科学的・文化的・景観的など多岐にわたり、その特徴のうち最も重要なのが歴史的価値である。そして、既存の歴史的価値に加えて、歴史的・科学的・文化的・景観的価値をもつて、その他の歴史的・科学的・文化的・景観的価値が、現存するものとして評価されるものがある。このように、歴史的・科学的・文化的・景観的価値をもつて、その他の歴史的・科学的・文化的・景観的価値が、現存するものとして評価されるものがある。

江戸時代から現在までの長い歴史の中で、常に山形の歴史で語られるところから、天保年間(1830~1849)に「伊部南大室跡」(天保年間)が登場し、やがて大室跡と改められた。

また、明治時代から現在までの長い歴史の中で、常に山形の歴史で語られるところから、天保年間は、伊部南・中大室跡・西側大室跡の三つの跡のうちの西側大室跡(西側大室跡)が最初に登場し、からめていふと、歴史的価値は現存するものとして評価されるものである。西側大室跡は、西側大室跡のうちの西側大室跡(西側大室跡)が最初に登場し、からめていふと、歴史的価値は現存するものとして評価されるものである。

その後、西側大室跡(西側大室跡)が現存するものとして評価されるものである。



第5図 見学会パンフ

資料13

国指定史跡「伊部南大室跡」等の現地指導について

日 時：平成17年12月2日(金) 9:40~14:00ごろ

出席者：文化庁文化財部記念物課長・文化財部門主任・文化財調査官

坂井秀弥

岡山県教育庁文化財課総括副事務官 平井泰男

備前市教育委員会生涯学習課長 谷口富洋

(議会のための中止)

備前市教育委員会生涯学習文化係長 石井 啓

備前市教育委員会生涯学習課主任 福本浩子

現 地：伊部南大室跡→西大室跡→北大室跡→愛が隠れ跡→グイビ
ガ谷跡

●伊部南大室跡の発掘調査について

- ・東側大室跡のT6と西側大室跡のT14については、構造の把握という目的意識があれば、ごく小規模な範囲で、断面にトレンチを入れてもいいのではないか。
- ・未着手になっている調査地点については、来年度事業としてすることも可能。ただし今回の調査のように計画倒れにならぬよう、細密な計画を。

●伊部南大室跡の追加指定について

- ・東側追加指定地は、現代使用の墓地等を除いた3の付近でもかまわない。ただし、地元が墓地隣接地へ道路等をつけたり、山頂に墓地公園をするのであれば、祖原山と南大室という景観が台無しになる。墳丘へは景観に配慮してもらうよう働きかけるとともに、場合によっては黄色部分を含む範囲を拡大して指定することも可能である。桂が建設するこの部分の位置付けとしては、備前院修理のためや築堤時の土石搬運場となる。

●西大室について

- ・現地確認と追加指定範囲の確認
- 北大室跡について
- ・現地確認と追加指定範囲の確認
- ・街定範囲にある部屋社は備前院の附郭ということで、是非入るべきである。窓の保存と景観の保持を前提として現状変更は認める。

●愛が隠れ跡・グイビガ谷跡

・中世備前朝の代表的な宗跡として現地確認。

・両者とも保存状態が良好であるし、17基が備前朝山古室跡群として市町村史跡になっている。中世備前朝の国指定として、将来的にいい方向付けができると思います。

●全体を通して

・指定名称としては「備前朝代跡(南大室跡・北大室跡・西大室跡)」を考える。

・指定理由としては、「南大室・北大室・西大室はそのそれぞれが、近世の備前朝を代表する重要な高跡群である」と考えられるのでは。

今後のスケジュールについて(予定)

17年度

12月下旬 伊部南大室跡発掘調査終了

1月ごろ 第17年度第2回史跡伊部南大室跡等整備端絡会」の開催

2月ごろ 平成18年度第2回史跡伊部南大室跡整備委員会

3月 「西大室跡・北大室跡測量調査報告書」刊行

3月 「伊部南大室跡周辺宗跡確認調査報告書Ⅱ」刊行

18年度

7月 南大室跡西側隣接地、備前北・西大室跡などへの追加指定申請

10月 第2次伊部南大室跡発掘調査(～12月)

11月 平成17年度第1回史跡伊部南大室跡整備委員会

12月1日 文化審議会が指定を文部科学省へ答申

19年度

- ・公有化
- ・遺物整理→報告書作成
- ・基本計画の策定

資料14

平成17年度第1回史跡伊部南大室跡整備委員会について

日 時 平成17年12月3日(土) 13:00~15:30

場 所 備前朝伝統産業会館2階研究室

出席者 河本委員長 長尾清一副委員長 関川忠也 西村康委員

岡山県教育庁文化財課 平井泰男總括副事務官

成澤俊哉監修主幹

備前市教育委員会 谷口富洋生涯学習課課長

石井啓文化係係長 福本浩子文化係主任

1 開 会

あいさつ 教育長代理で生涯学習課長

合併のこと

あいさつ 河本委員長

整備の方向は?

2 協議及び報告

(1) 平成16年度第2回史跡伊部南大室跡整備委員会から現在までの経過報告

・平成16年度第2回史跡伊部南大室跡整備委員会について

・平成17年9月16日開催の「史跡伊部南大室跡等整備連絡会」について

■作業道とは? (河本委員長) 施工區へ接続する道だが、計画自体不明。(西村委員)

■作業道のメリットは? (西村委員) 車で区へ接続する道の確保。具体的構想が出てこない。

■性急な整備はやめてもらおうよ! 積務局から協議してほしい。(河本委員長)

② 平成18年度事業計画について

■地盤調査の整備をしないよう地盤調査をしっかりお願いしたい。(河本委員長) がべりだいまつとの話を残さないと言葉は嬉しいのです。(西村委員)

■がべりだいまつは新しい祭り? 山根が削られて景観がだいなし。今後の開発でさらなる景観が損なわれるのか心配。下山山底に無理

- 墓地公園は必要があるのか？（西村委員）
- 山の頂上を開拓するのはどうか。崩れるし景観がよくない。山の裏側からの道だと伊部のひとにメリットがない。（岡部委員）
- 国領青色部分を含めて追加指定を望みたい。（全員）
- 崖面の整備した地形は崖に沿わるものに違いない。（岡部委員）
- 崖面の整備は地形図から見る限り人工的ですね。（西村委員）
- その部分の整備の方法は。（西村委員）文化庁から整備はしたの底の部分だけよいとの指摘。（事務局）
- 整備は他の都署と連携をしてすこしてほしい。市全体でとりくむべきこと。（各委員）
- 指定名について「防衛施設跡跡」がいいのでは。いろんな方の意見聞いてみる必要がある。（各委員）
- スケジュールに一問問題。2018年1月は指定公示。追加指定申請は一度にまとめてしなければならない。（平井副委事）
- 指定申請は延ばさず。どんどん後になるのがんばってやってもらわないと。（河木委員長）
- 單市の報告書は無理せず年度でもいいのでは。（河本委員長）（岡部委員）

(3) 現地指導

- 東側斜面の埋道、西半分を張って煙道部分の確認をしてください。
- 中央空跡、煙出部分の解釈については、色々意見があるが、幅はきちんと確認してください。
- 西側斜面、埋山部の確認を。隔壁先生が測量したとき、縦木先生がすぐで、真直しているので見てかまわない。
- 原物で一番新しい陶器片の確認を。
- 現地説明会の時、胸片をもって帰られないように要注意。
- 現状変更是指定地内の発掘調査であれば、多少の場所の変更は可能。

3 開会

あいさつ 岸委員長

資料15

平成17年度第2回史跡伊東南大窓跡等整備連絡会議要録

日 時：平成18年2月1日(水) 18:00～17:40

会 場：静岡市保健センター3階研修室1

出席者：木本宏造（歴前施設友会理事長）

平川 忠（歴前施設友会理事幹事）

柴船勝巳（伊部区役員長）

永岡副知（伊部市づくり推進会の会）

尼子元重（大南町役場社会課）

喜木俊二（歴前施設友会議事専務理事）

長尾清一（静岡市文化財保護審議会委員長）

土地所有者

オブザーバー

伊部区有林関係者 十瀬豊 古田たくみ

消伊部区長 横上義一

●協議事項

(1) 追加指定地について

- ・一帯を開放した。黄色部分は伊部地区の心臓部になる。黄色部分に道が通らないと他の地区が分断されてしまう。車が走れる道がほしい。4メートルの道路をつけたい。明日・明後日に重複を入れる。
- ・文化庁は、景観を含めた埋場でないと追加指定はしない。（北・西を含め）もし景観が壊れると追加指定自体がなくなる可能性がある。四査だけで終わってしまう。（事務局）
- ・道は、當時車は通らない。車に足に来ても入れないか。
- ・具体的な面図があれば、文化庁や県と話ができる。すぐ県だけでは結論がでるものではない。文化庁や県と話をせず、道を造ってしまって後に文化庁が投票に来たら、追加指定はできなくなる。黄色部分については、文化庁は追加指定もできますよ。というヒュンアンス。これは景観を守るために。（事務局）
- ・道については現地で県に説明する。協力はするが道は造る。
- ・先に現実的な計画図がないと。（事務局）
- ・景観とはどの程度のものか。問題点はどこか。他の史

跡地でも史跡を活かした公園化とかある。

- ・文化庁は、黄色部分は何も手を加えなくていい、という意図。（事務局）
- ・とにかく十を入れた。史跡の南側で境界線の所。
- ・追加指定の可能性がある中で、事前協議は必要。事業者の着手は事前協議なしでは難しい。文化庁までの相談が必要。追加指定申請は確実に推定し、青色部分一般公開する。(③の東側部分では窓の上に通っている道については協議が必ず必要。他の部分は候哉などしている)。（事務局）
- ・この連絡会の初めの立ち上がりは、青色部分の整備についての懸念合はった。その後③と④の窓を含めた指定になり、今度は黄色部分が変わってきた。窓の広がりをもっての指定という具合になってきた。（事務局）
- ・どういった道路形態になるか出します。今も周辺を歩けるからそいういた道つけたい。
- ・いつ、どこで、だれが、どうするか、具体的なものが必要。それをたたき合いで話題を盛らせる。そういうた壁面について計画の内に入れ込んでいけば、補助対象にもなる。
- ・一回書いてしまします。
- ・文化庁は追加指定は緑色だけでいいとかえるのか、
- ・何十年もほったらかしにしていていたではないか。それをこちらが整備していく。指定をして何をしたいのか知らない。窓が他の山に山たたらの追加指定とかにかかるのか。（オブザーバー）
- ・予算的なことなどで、確かになかなか整備できなかったが、スケジュールを組んで補助等が実現でれば21・22年にかけて整備を行な。なぜ指定が必要かということは、跡跡は後後に伝えていくために、保存・保護をしていく。（事務局）
- ・黄色部分は景観としての追加指定か。（④⑤⑥の窓の保護のためか）
- ・文化庁は景観として。（事務局）
- ・地元も一生懸命だから、道をつけるならどういう方法があるか、示してもららうほうがいい。それから具体案を出してもらえば。
- ・黄色部分を活かして公園化しようとした。その中心部を切り離されるのはつらい。地形をあまり變えるなということだな。
- ・とにかく具体的な案を出してもらひ、県と相談させて欲しい。（事務局）
- ・すぐに黄色部分をどうこうしようとは思っていない。つけられるものなら土を持って入りたい。南大窓跡は伊部地区の宝だから魅力はする。大切なのは理解している。
- ・西側の方、全部指定してほしい。
- ・黄色部分は手を抜ってきては範囲であり、あまりにも範囲の距離があると意味付ける必要がある。（事務局）
- ・青色部分の方は窓が監視しているので、それなりの対応ができる。跡跡について早く追加してほしいと文化庁に言えないか。
- ・協議等を行って努力したことが必要になる。（事務局）
- ・一回具体的な計画を出します。右切り堀を壊したりしません。景観をなるべく大切にします。

(2) 平成18年度事業計画について

- ・今回はこだけ指定、次はここ、という追加指定申請はできない。（事務局）
- ・西・北・南の接壤地を指定申請するのか。
- ・南大窓跡で整備して整備を進める。西・北・南は四面上での指定になる。これは土地所有者には話をしていない。これから並める。（事務局）
- ・緑色部分が指定になると京刈等の範囲はどうなるのか。
- ・現在の契約の部分は青色の所。（事務局）

(3) その他

特になし

資料16

平成17年度第2回史跡伊東南大窓跡整備委員会について

日 時 平成18年2月24日(金) 13:30～15:30

会 場 静岡市役所2階窓跡会議室

出席者 河木清委員長 長尾清一・副委員長 篠原忠彦委員

岡山県教育文化財課 半井泰男幹別副参事
成木治祐准主幹
伊藤前市 市政局 伊藤尚光課長 樋口實佐人都市農林課長
徳前市教育委員会 木長彦彦子学習課長代理
石川啓文化係長 神本浩次文化係主任

1 開会

あいさつ 河本清委員長

2 協議及び報告

- (1) 伊部南人黨跡発掘調査の概要について
 - ・中央高跡の上部、床で一番焼けているのは? (閑室委員)
 - ・どの面もかなり焼けている。他の間も下までよく焼けている。窓を小さくして何回も焼いたのではないか? (事務局)
 - ・そうではないとそもそも焼けないかな? (河本委員長)
 - ・上の上の焚口はわりにいかにも焼けない。 (閑室委員)
 - ・窓跡のろ紋出しの部分に土管を使っている。 (事務局)
 - ・土管は貫通している? (河本委員長)
 - ・抜けています。 (事務局)
 - ・窓口はどうなってある? (河本委員長)
 - ・土管は後わず真直角に抜けています。 (事務局)
 - ・幅は? (河本委員長)
 - ・3~40cm (事務局)
 - ・測定をするといろんな事がわかるね。 (閑室委員)

(2) 北大窓跡・南大窓跡について

- ・昨年12月、文化財部調査官が現地調査。どこを追加指定するか意見を聞いた。(事務局)
- ・西大窓跡の字はどう認める? (閑室委員)
- ・ヒガマです。 (事務局)
- ・西・北の問題点は? (河本委員長)
- ・北大窓跡の範囲が広がった。(事務局)
- ・特に問題はない。(河本委員長)
- ・西については②指定地にどうして③を入れたのか? (河本委員長)
- ・どうしてかわからない。(事務局)
- ・吾の指定はそういうことがよくある。所有者はどこにいる? (河本委員長)
- ・場主と他2名。(事務局)
- ・将来に問題になるのは、③と争だね。まあ、それはまた別の話ですね。(閑室委員)
- ・西大窓跡の京帯はいいから? (閑室委員)
- ・数万円で委託をしている。
- ・きれいになっている。昔は草が茂っていた。
- ・西大窓跡について、座標指定と分事がある。最近は車でいくのが多いが、大きい街はやりやすい方、座標指定でもいい。(半井副参事)
- ・現地に入れば、間隔点もあるが、指定はこういう格好でいけばいいのでは。西についても昔は壁があるが、外してもいいのでは。(河本委員長)
- ・指定地除外はある。。。 (半井副参事)
- ・指定はいつ? (閑室委員)
- ・刈田合併の時。(事務局)
- ・その時、書類(印影)はもらっているのか? (閑室委員)
- ・もらっていない。(事務局)
- ・所有者も指定地のことを知らないのでは? (河本委員長・閑室委員)
- ・昔は証拠がないものとが多い。こういう機會に整理するのいい。(河本委員長)
- ・指定からはす、外さないは、文化財保護審議会で。 (河本委員長・閑室委員)

(3) 平成17年度第2回史跡伊部南人黨跡等整備協議会について

- ・今までとは、黄色部分と③(緑色部分)は、はすして指定とする計画だったが、伊部人が壇場未定地を買収し、協力も計画によっては

である。ということだったので、文化財版升調査官に話をした。板井調査官は、景観を守るために、黄色部分についても指定をします。という話をした。(半井副参事)

・地元伊部区の事は、専々から聞いている。まちおこし・区おこしに一生懸命だが、これはどう扱えばいい? (河本委員長)

・そのことについて、市で進めている整備について郡山整備課長より説明をお願いします。(末長津洋代)

・H11年度にある事業がストップしてから、進元と協議をしていきながらまちづくりを進めようということになった。予元にある「伊部まちづくり」は土に踏路の整備。「H11ZENかえる」は備前町を中心としたまちづくり。H11、15、16で整備。今までの反省会で住民と一緒に考えることを目的に、ワーキンググループなどを4回開催した。住民の意見を聞いて、伊部駅の電柱を地中へ移動させたり、人馬踏跡を公園化したり、壇場内が少ないということで、大池ヶ・伊部久忍古に案内板を、岡道374号にモニュメントを設置した。

今年度から年度で、2号線は事故が多いので、旧道を歩行者がゆっくり歩ける通路整備を行う。(柳家謙長)

・いんべのまちづくりの方針については、資料の5-2に載せてあります。そこに、山川源も含まれている。(末長津洋代)

・いろいろ連絡ややりとりを開いていると、今南人黨の東で進んでいるものも南人黨跡の拠点整備のひとつなのか? (閑室委員)

・別件のものです。南人黨は、新しい案内板などを事務局とタイアップして造った。(柳家謙長)

・今後、南人黨跡の写真を撮らうと思って寄ったら、東側に2台並機が入っていた。これは、誰をぶった切るのか? (河本委員長)

・地元も蓋の位置は決めていてるので、ぎりぎりの所だと思われる。溝内で話し合ったが、西から約60%は残らても、20%は山の負担になる。財政に大きな負担をしていないので、どうなるかはさりと poate ない。窓跡の所は飢餓が必要だが、それ以外の所は協力を求めるという形か気がしない。(事務局)

・文部省は住民の方の把握と協力を求めないといかない。だが、③と⑤の部分はこの際も追加指定したほうがいい。(河本委員長)

・道を造るとして、南大窓跡南側の山側の瀬部分は、道を守るために排水の構造、重要な部分であるので、ここは最低限保護が必要。黄色部分全部が指定管理なら、その部分だけでは保護をかけたらどうか。市としても出世的見通しを立てておかないと。(閑室委員)

・仄山・不老山・柳屋は、考古をやっている者にとって伊部を象徴する山である。被災は大切。(河本委員長)

・別の遺跡はどこですか? (平井副参事)

・赤色部分。(事務局)

・県のG I S ではどうなっているか? 知道の遺跡なら事前の届出は必ず提出。建ても、もし工事をするとて、中間に調査しないと。遺跡の事を知らないと、史跡のすぐ側に道を造るのは難しい。指定地外ならなるべく費用を払ってもいいかという事ではない。夢備で質問(人が通る道)はいるから、それは考え方られるが、

(平井副参事)

・聞いてるのは、防火林通みたいなの。(柳家謙長)

・それと遺跡との関係を考えてほしい。(河本委員長)

・これは、かなり大きな問題をもっている。指定地のすぐ側に道を造るのは、どうか。(半井副参事)

・伊部の方は貧乏な方が多い。昨日区長さんには開拓の関係などがあるのでストップしてくれと言っている。今日も来ていた、担当と話をしている。話の結果を事務局に通す。(柳家謙長)

・教育委員会としては、協議をしながら、県を通して文化庁に話をしていく。この問題は、これからも密接・連携として残していく。(河本委員長)

(4) その他

・内・北大窓跡の調査概要報告書の案の提示

3 閉会

あいさつ 長尾清 副委員長

第3章 東6号窯跡の調査概要

第1節 位置と調査の概要

東6号窯跡は、全長46mは超えようかという長大な東3号窯跡の煙出し部から約100mの南、標高約70mの北向きの急斜面に立地する。この地点は伊部南大窯跡の南東方向に位置し、北側に谷が開けた地形をしている。この谷が、やや緩くなる標高55m付近には、東5号窯が平成12年度の調査で確認されている。

この窯については遺跡としては全くの未周知で、研究者等の踏査も全く及んでいなかった。里づくりの会が作業道を造成した際、削平された断面に炭層が観察され、その間からごく少量の杯片が発見されたことから、付近に窯跡があることが想定された。しかし、その断面から南上方は勾配が30度もあるろうかという急斜面のうえ、流紋岩の露頭が散見されるため、作業の安全確保や予算的な問題などで調査地点を絞り込む必要があることから、詳細な予備調査を実施した。

予備調査は表面観察による踏査と奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺跡調査技術研究室室長西村康氏に依頼した磁器探査による。事前踏査では遺物はまったく採取ができず、窯跡の位置すら絞り込むことができなかった。平成13年4月、東西18m、南北23mの測定区を設定し磁器探査を実施した結果によると、その区内で積極的に窯体の存在を推定することはできなかった。しかし、測定区の中央と南西隅の2箇所小さな磁気異常があり、窯体の存在を否定できない箇所が指摘された。(註1)

これらの結果を受け、平成13年10月から確認調査を実施した。この調査は他の窯跡、KP-1地点、KP-2地点窯跡と同時に実施したもので、窯跡の所在確認が目的であった。このため、磁気探査で異常値を示した地点を中心に等高線に並行するかたちでトレンチを設定し、位置を確定した。

平成14年4月からは、東6号窯跡の二次調査を実施した。これは急勾配に位置する窯体が崩落する危険が考えられたため実施したもので、窯構造などが確認できた。

第2節 遺構の概要

1. 灰原

調査は、炭層を確認された崖面(削平された断面)のすぐ南側において、等高線に平行する形でトレンチ601を設定することから始めた。炭層の性格を追求するためである。炭層は主にトレンチの東半分で、多量な杯片とともに確認された。ただトレンチの中央部がちょうど谷地形の最低部で絶えず湧水があり、作業に支障をきたしていただけ、北側の削平された断面に向かって切り離し、トレンチ内に湧水がたまらないようにした。また、炭の面も東側へ広がっていると推定できたため、東へ50cm程度調査区を拡張した。その結果、3m×3m程度の炭層の面的な広がりをとらえることができ、それは窯の灰原であることが想定された。このレベルでは20cm×30cm～50cm程度の扁平な石の上に杯片が散見、その周辺に幅10cm×50cm～70cm程度の粘土塊、最大径10cm程度の焼土塊が確認できた。また、径20cm前後の柱穴状のプランラしきものも観察されたため、墨層の中央部に幅0.3cm×長さ3.3mのサ

ブトレンチをいた。観察の結果、この炭層は1~2cmの大いな小礫を含む灰白色土層上(地山?)に形成されたもので、検出面からの最大の厚さ25cmのレンズ状の堆積であることが判明した。

念のためある程度杯片等が検出されたレベルにおいて炭層の実測図化をおこなった。その際、この炭層はトレンチ南側断面の一部において南に広がると想定された。

平成14年度の調査では、南側部分の炭層の面的の広がりの追及をおこない、墨層が南側へほとんど広がらないことも確認した。あわせて墨層の堆積を順次掘り下げ、杯片が多量に確認されたレベルで、写真測量による図化および検出状況に合わせた区画を設け、その区画単位で遺物を取り上げた。

2. 窯 奢

トレンチ601の調査では、前述のように窯体を確認できなかったため、南西方向に5mの地点にトレンチ602をトレンチ601とほぼ並行に設定した。幅約0.5m、拡張部も含めると延長11mのトレンチになる。ここは、磁気探査によりごく小さな異常値を示した地点もある。

掘削を始めた直後、東側地表下で杯片が少量確認され、明緑灰色の粘土ブロックが検出された。土層断面にもその粘土ブロックがあり内面が赤褐色に被熱していた。その箇所以外は明黄褐色土の礫を含まない均質な土層で、西側へ向かうほどその上層は薄くなる。この層の下には30~50cmぐらいの角礫を含むが粘性をもち焼物の粘土としては最適であろうと推測できる、にぶい黄褐色土層がある。

トレンチ602でも窯体が確認できないため、磁気探査で小さな磁気異常値を示した中央部にトレンチ603を設定した。また極端な異常値を示し、鉄製品でも埋蔵されているのではないかと憶測された地点にもトレンチ604を設けた。トレンチ603、トレンチ604の調査成果については後述する。

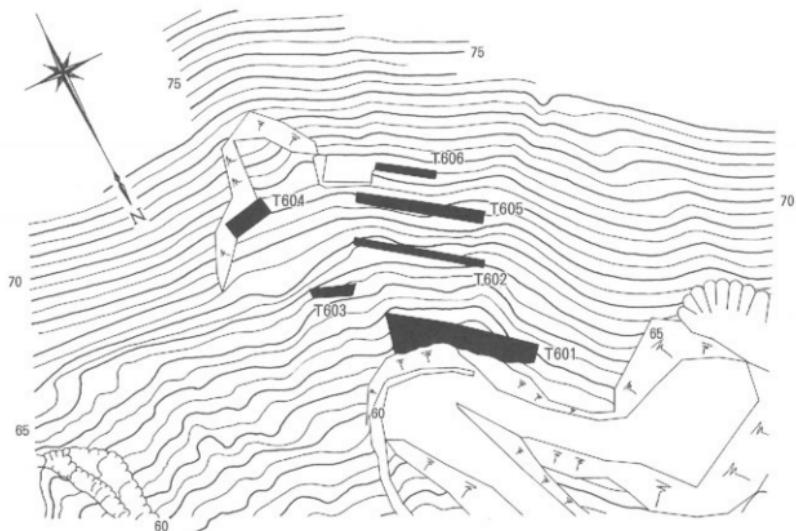
灰原から南西方向へ5m上方のトレンチ602でも窯体が確認できないため、さらに南西方向に3mのところにトレンチ605を設定した。先行して調査が進んでいた灰原の状況からすれば、必ず灰原より高い地点に窯があると考えたからである。

掘削を進めたところ、トレンチ605の東端部で杯片とともに焼上面が地表下10cm程度の深さで検出され、仔細に観察した結果、窯の床面ではないかと考えられた。ただ焼土面は南側ではなく、北側下方へ広がっていることが推定できたため、再度トレンチ602の断面と対応させたところ、東側で確認された被熱面と粘土ブロックがこれに対応するのではないかと推定された。これらの状況からトレンチ602とトレンチ605の間に、全長が4mを超える程度の小規模な窯が想定された。

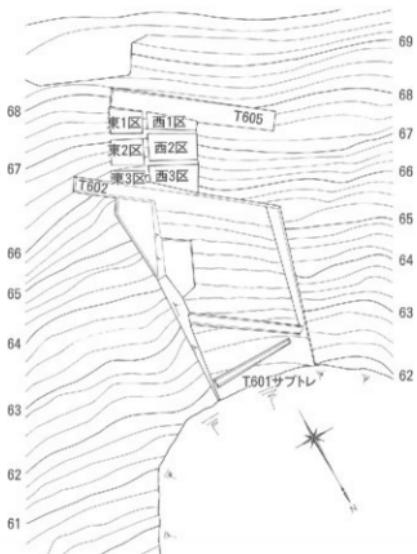
平成13年度の調査は、窯の所在確認が目的であったため、窯本体の調査は行なわずこのトレンチ調査のみで終了した。

平成14年度の調査では、窯の主軸のおおよそのラインを定め、602と605のトレンチ間を西区と東区にわけ、横軸断面を2箇所設定することによって三分割される部分を南側から1区、2区、3区とした。したがって全部で6区になる。幅20cmの土手を残し、慎重に表土をはがしたところ、どの区においても表土下10cm~20cmで窯の立上りが検出でき、その時点では窯内ののみの掘下げに移行した。

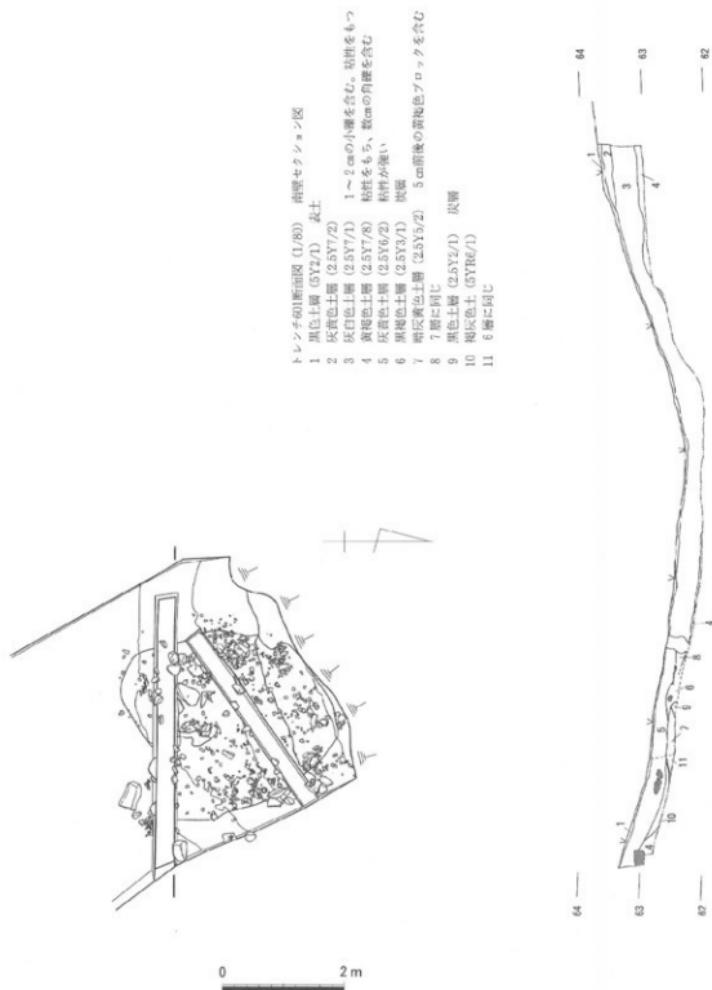
窯内の表土下には、流土層と思われる均質なにぶい黄色土が堆積しており、その下層に窯壁の粘土ブロック片が多く含む上層よりやや明るめの黄色土がたまっていた。遺物は焚口に近い3区を中心にして杯片が多く見られた。また煙出しに近い部分では土錐も検出されている。東3区の窯床面には幅3cm~5cm、長さ20cm~30cmのひび割れが観察でき、30度の急斜面であることから、地すべり的な現象が起こった可能性も推定された。



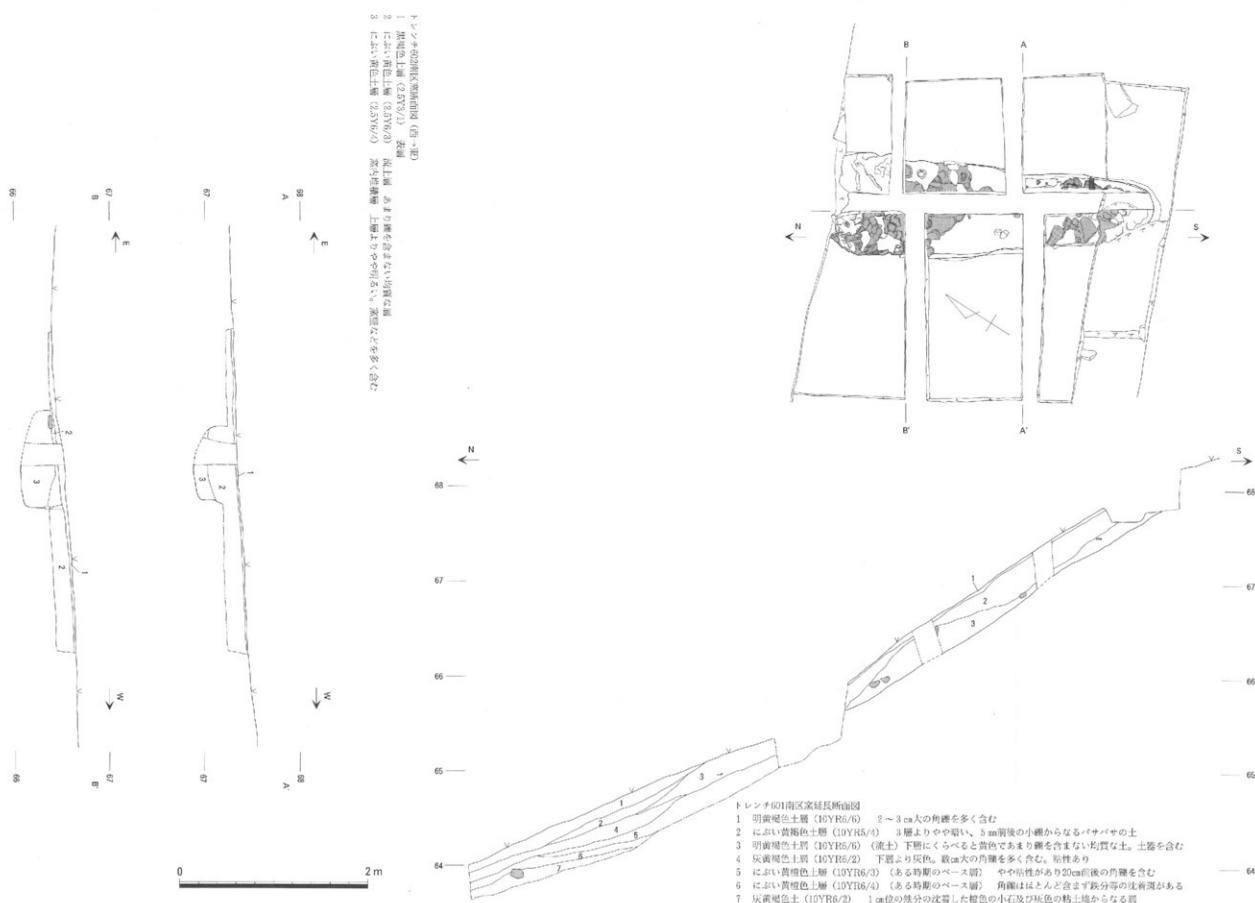
第6図 平成13年度調査トレチ配置図（1/400）



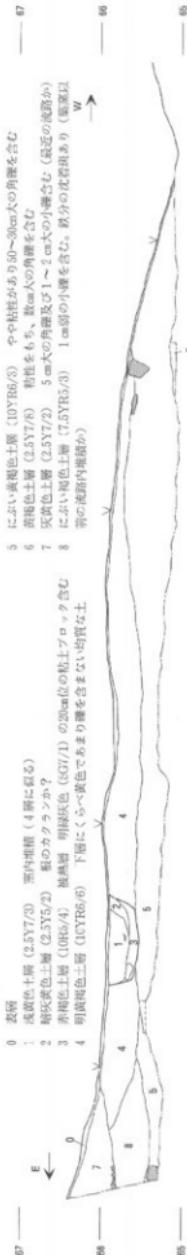
第7図 平成14年度調査トレチ配置図（1/200）



第8図 東6号窯灰原平面図 (トレンチ601) (1/80)



第9図 東6号塗跡平面図 (1/40)



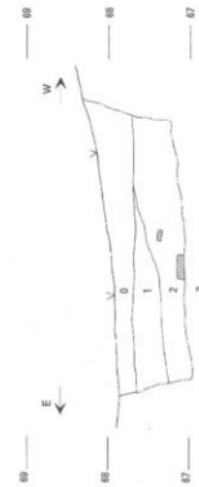
第10図 レンチ602断面図 (1/80)



第11図 レンチ605断面図 (1/80)



第12図 レンチ603断面図 (1/80)



第14図 レンチ606断面図 (1/80)

窯の断面は設定した横軸上では断割らなかったため、構造について不明確な部分があるが、前年度のトレンチ602の焚口付近の断面観察の結果、窯内面には明緑灰色の粘土が貼り付けられていて、床面の厚い所では10cmにもなる。

以上から、この窯について総括をすると次のようになる。東6号窯跡は標高66～68mの北向きに開けた谷急斜面に構築されている。窯体付近には流紋岩系の露頭が散見されるが、窯体自体はその上に形成された明黄褐色土層を掘り込んでつくられている。窯体の残存長は、トレンチで一部破壊してしまった部分も含めると、全長4.3m（水平3.8m）、窯の最大幅は1.0mで、奥に行くほど幅が狭まる平面形をもつ。床面は粘土で被覆しており、ほぼ30度で直線的に立上る。煙道部分から2mほど焚口に下った床面がやや傾斜が急になっているが、土手が残存しているため、軸線の設定の問題だけで、構築時に意図されたものかは不明である。主軸は焚口側からいうと、北西から南東方向である。

3. 土 壤?

平成14年度の調査において、トレンチ602（窯の焚口）とトレンチ601（灰原）間が5mあるため、その間に作業面などの遺構の有無を確認するため4×5mの範囲を全面下げた。あわせて窯の軸線をこの部分に延伸し、土壠の観察をおこなった。

この区の南端、トレンチ602の北側、表土直下5cmのところで径40～50cm、黒色土のたまたま凹面を検出。黒色土内で少量の杯片を検出。黒色土の堆積は10cm程度と浅く平面形も不明瞭なため、作業などに伴う土壤と考えるより、旧地表面の凹凸と考えたほうがいいかもしれない。

4. その他

i) トレンチ603

磁気探査で小さな異常値を示し、窯体の可能性がある地点にトレンチ603を設定した。上層で灯明皿など近世の遺物をごく少量確認したのみである。掘りさげてもほとんどが30～40cm大の礫で、遺構は検出されなかった。

ii) トレンチ604

磁気探査によって極端な異常値を示し、鉄製品でも埋蔵された中世墓もあるではないかと憶測された地点にトレンチ604を設けた。上層は30cmの礫層で、その直下には浅黄色土が堆積していた。その面から黒色の凹面などが観察できたが、遺物も伴わず自然のたわみと判断された。最終的に1m近くまで掘りさげたが、明緑灰色の岩盤層にあたり、磁気探査の異常値は遺構にともなう反応ではないと考えられた。

iii) トレンチ606

東6号窯跡の煙道部を検出したトレンチ605の南上方2mの地点に設定したトレンチで、東6号窯以外に窯などの遺構がないか確認するために設けた。遺物・遺構なし。

第3節 遺 物

図化した遺物は全部で192点、その9割が杯類である。1～60までが平成13年度調査分、61～192が平成14年度調査分である。両者の間で接合関係があるものは、基本的に14年度分としている。

1. レンチ601 (第20図・第21図) 13年度分調査

1~42までの遺物が該当する。おおよその層序では灰原層の上層に該当する。杯A類、杯B類が多い数をしめる。基本的に底部の外周をヘラカリした後、押圧して成形されている。

杯A類では、12にヘラカリの痕跡が底部に段状に残り、22・29では粗雑な調整がなされている。また7・23のように極端に底部を押圧したものなどが見られる。13・15・22・25・27では、重ね焼をする際、織維状のものを個体間にはさみこんだため、備前焼という「縫襷（ひだすき）」の窯変状のものが内外面に現れている。31のように外面に自然釉が付着し一部光沢をもったものもある。

1・10・34は白色の胎土である。

杯B類の高台は成形後付着したものであるが、9のように付着する際粘土がはみ出したもの、17のように付着のすきまができるものなど成形が雑なものがある。14では外面に自然釉がかかり一部光沢があり、36では口縁端部と内面の一部に緑色の自然釉がかかり、重ね焼きの痕跡が観察される。5は杯B類の蓋である。

2・39・40は近世の遺物で、灰原上層が江戸後期には露出していた可能性も推定できる。

4は平瓶の把手、20は盤の底部かもしれない。33は外面自然釉の光沢のある鉢、37は壺の底部、38・42は長頸壺の底部の可能性がある。

2. レンチ602 (第22図) 13年度分調査

43~58が該当する。そのほとんどがこの窯の焚口部分からと考えられる。58の鉢以外はすべて杯A類、B類である。54~57は外面黒色で焼成不良品である。

3. レンチ605 (第23図) 13年度分調査

遺物は59・60の2点で、煙道部からの検出である。59は杯Aで、焼成が非常に悪い。60は全長5.5cmの有溝土鍤である。

4. レンチ601 (第24図~第26図) 平成14年度

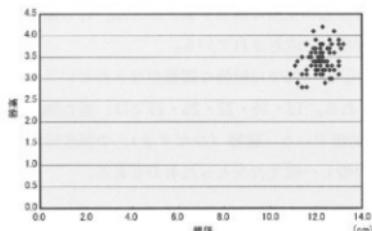
61~160が該当するが、主な検出地点は、61~64が南区の表層、65~73は土壌状遺構、74~98は南区を中心とした検出で、99~160は灰原の下層に相当する。

南区の表層では、61・63・64の杯B類とともに、近世の壺62が検出されている。

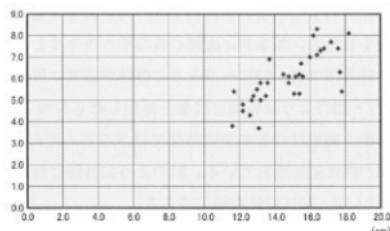
土壌状遺構というか黒色のたまりに伴う遺物は、基本的に杯類であるが、鉢?70も確認されている。65・66・68・69のようにやや色調の淡いものが目立つ。また杯類73のように凹凸の著しい個体もみられる。

南区を中心とした範囲では、79・82・83・87・88・89・91・94・95・96が杯B類の蓋で比較的多く見られる。83のように内外面に8~9cm前後の焼成痕（ヌケ）が見られ、高台間に蓋を挟みこむ窯詰め技法も推定される。また89には端部のみに自然釉が付着していることから、口縁部と高台で蓋を挟み込む技法も推定できる。反対に91・94のように全く自然釉が付着していない個体もある。97は鉢で端部が非常に丁寧に調整されている。85は近世の窯道具で匣鉢。

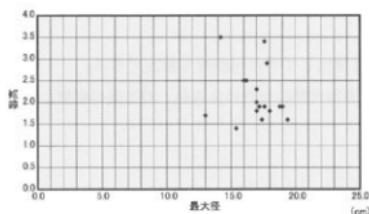
99~160は灰原下層に相当するもので、比較的完形品に近い個体の割合が高い。器種構成としては基本的に杯A類・B類で圧倒的で、それ以外として104・121・154・155の鉢類が確認されたのみである。



第15図 杯A類法量分布図



第16図 杯B類法量分布図



第17図 蓋法量分布図

る。鉢類の中でも154は内面を窓でなでたような丁寧な調整が施されている。

杯類では101の外周には、かせ胡麻風の自然釉がかかり、122では緑色鮮やかな釉が観察できる。また、106・109・117・125・142・147のように複数枚重なって溶着した遺物もあり、窯詰め技法が推定できる。

5. トレンチ602南区（第27図）平成14年度分

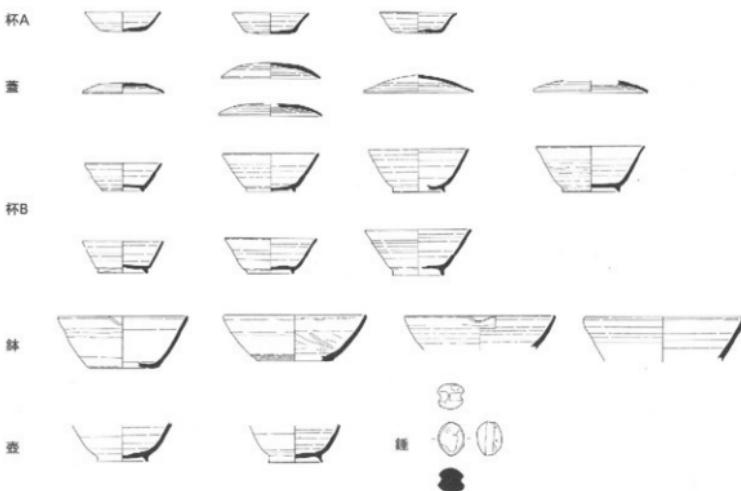
161～192の遺物が該当する。基本的にそのほとんどが窓内からの検出で、小片が多い。167の甕の底部と183の鉢を除けば、そのすべてが杯類である。外周が黒色で、非常に脆い個体が目立つ。

第4節 器種と法量分布について

東6号窯で確認された器種（第18図）について、法量分布図を参考にしながら若干の記述を行ないたい。

1. 杯A類（第18図）

この窯跡でもっとも点数の多いものである。前述のとおり外周を窓で切り離した後、底部を指先等で押圧したものである。押圧が施されず、窓きり未調整の個体も確認できる。窓で切り離す際の回転台は反時計回りである。胎土については、1～2割程度白色のものが認められる。



第18図 器種構成図 (1/8)

法量の分布図をみると、口径については11~13cm、器高については3cm弱~4cmの範囲にきれいにおさまる。底部の調整に若干のばらつきはあるが、おおむね一型式の範囲内と考えられる。

2. 杯B類 (第18図)

杯A類に続いて点数が多いものである。高台は底部を成形後、圧着したものである。法量の分布図をみると大きく3つのグループにわけられる。①口径が12cm強~14cm弱、器高が4.5cm~6cm弱のグループ。②口径が14.5cm~15.5cm、器高が6cm弱~6cm強のグループ。③口径が16cm~17.5cm、器高が7cm~8cm弱のグループ。③のグループでは、口縁端部を外反させる個体が比較的多い。型式的には三型式と考えたいところであるが、分析分母が余多くないため、仮の設定としたい。

3. 杯B蓋類 (第18図)

口径については13cm~19cmの範囲である。杯B類の蓋とすると当然の結論だが、分析分母が少ないためグループを読み取ることは難しい。器高については、大きくひずんだ個体を除けば、おおむね1.5cm~2.5cmの範囲に収まるため、多くの個体が扁平な蓋になる。つまみについては、図化されていないものも含めて、1点も確認されていない。

4. 鉢 類

鉢類と確認できる個体は9点あまりで、うち2点のみで口径・器高・底径が復元できた。口径は20

～26cm弱、器高は4～8cmとばらつきがある。9点のうち3点では注口が確認できた。58・97・155・183は口縁端部を丁寧に調整し内傾させるが、他はそのままである。何型式があるかもしれないが、分析分母が少ない。

5. 壺類

一見すると38、42は杯B類と見間違うが、高台の成形や胴部の器壁の厚さなどから壺と推定される。

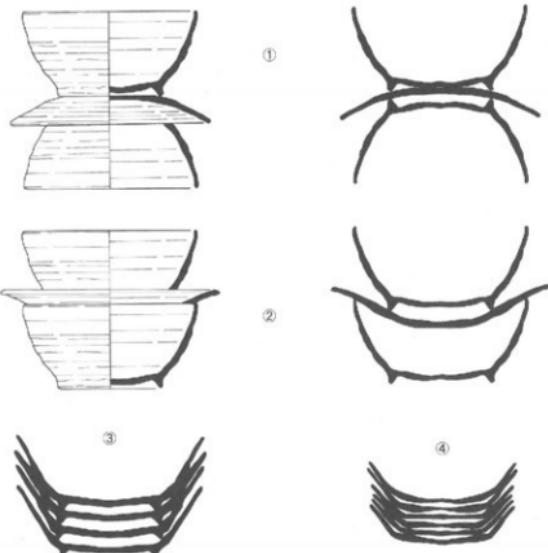
6. その他

そのほか、4の平瓶、20の盤底部？、60の有溝土錘、167の壺底部が1点のみの確認である。

第5節 窯詰めについて

多量に出土した杯A類、B類の内外面の観察や、溶着片からおぼろげながら窯詰めについて知見を得ることができたので、以下に記述する。

106、117、125、142などの複数個体の溶着片から、基本的に同一法量の個体を重ね焼きすることが観察できる。何個体重ねたかは不明であるが、灰原出土の106では6枚重ねていることから、廃棄後



第19図 窯詰め復元模式図（1/4）

の剥離を考慮すると10個体程度は重ね焼をしていたのではないかと考えられる。その際、個体間どうしの溶着を防ぐため、植物質の繊維状のものを挟み込み、焼成後の分離をたやすくしたと考えられる。それは杯の内外面に、備前焼という「緋襷（ひだすき）」状の痕跡が残ることでもわかる。

杯蓋83の観察では、内面、外面とも中央部に8.5cm程度の個体が置かれていた変化（ヌケ）がみられるため、蓋の上には高台をもつ杯B類が置かれ、蓋の下側にも、反転させて高台を上側に向けた杯B類が置かれたと推定される（第19図-①）。

杯蓋89は帯が著しい個体である。内面の外周を中心に自然釉が付着するが、中心部は8cm前後の径で付着が見られない。外面は端部のみにわずかに釉が付着することから、杯B類の上に、蓋を反転させておき、その上にさらに杯B類を置いたと考えられる（第19図-②）。

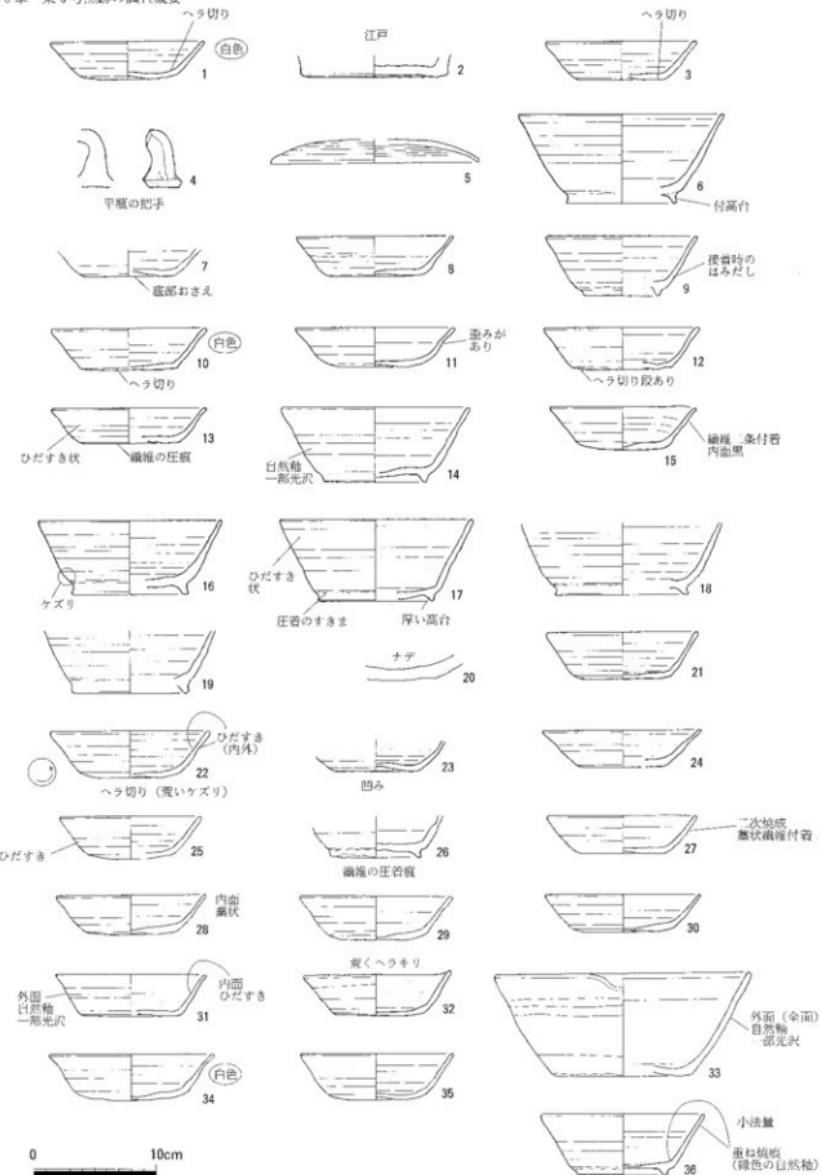
また杯B類101では高台の中までかけ胡麻風の焼成が見られることから、反転して窯詰めされたと推定できる。

窯詰めについては、基本的に同一法量をもつ個体を10枚程度重ねるが（第19図-③・④）、個体間には植物繊維を挟み込み焼成後の剥離がたやすくなるよう工夫がなされていた。また、蓋類を利用し、規則的な窯詰めに変化をもたらせる工夫も看取できる。ただ、窯内の詰める場所や甕類などその他の器種との関係はさだかではない。

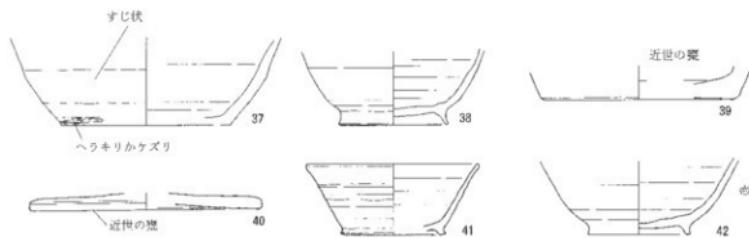
【註】

- (1) 西村康「伊部南大窯の探査」『伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ』備前市教育委員会
2003

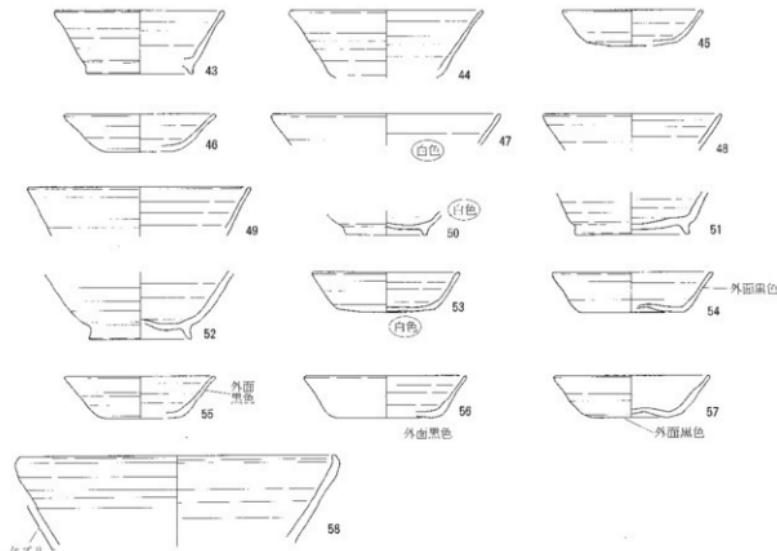
第3章 東6号窓跡の調査概要



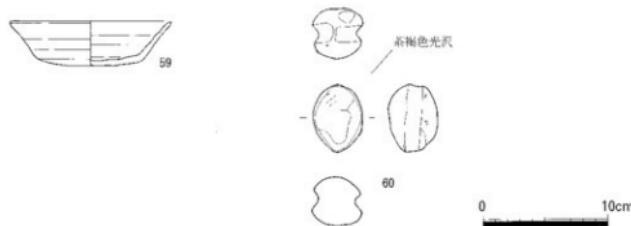
第20図 トレンチ601出土遺物 (13年度分) (1/4)



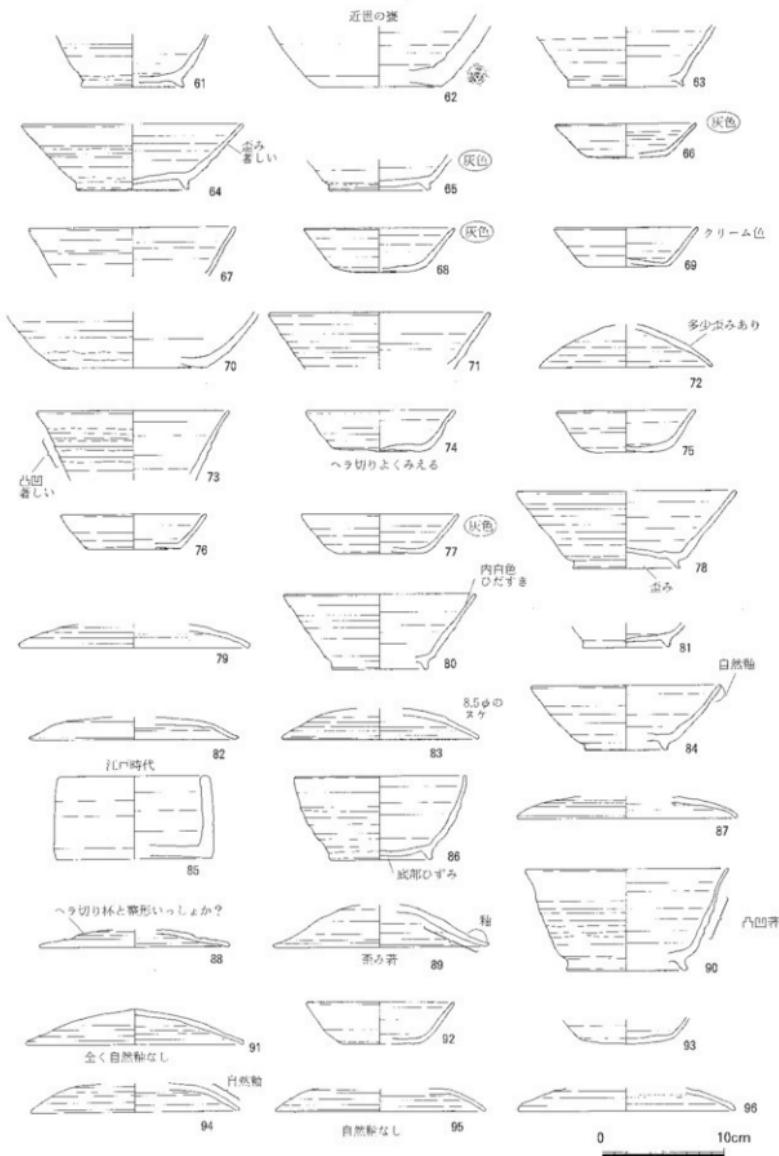
第21図 トレンチ601出土遺物（13年度分）（1/4）



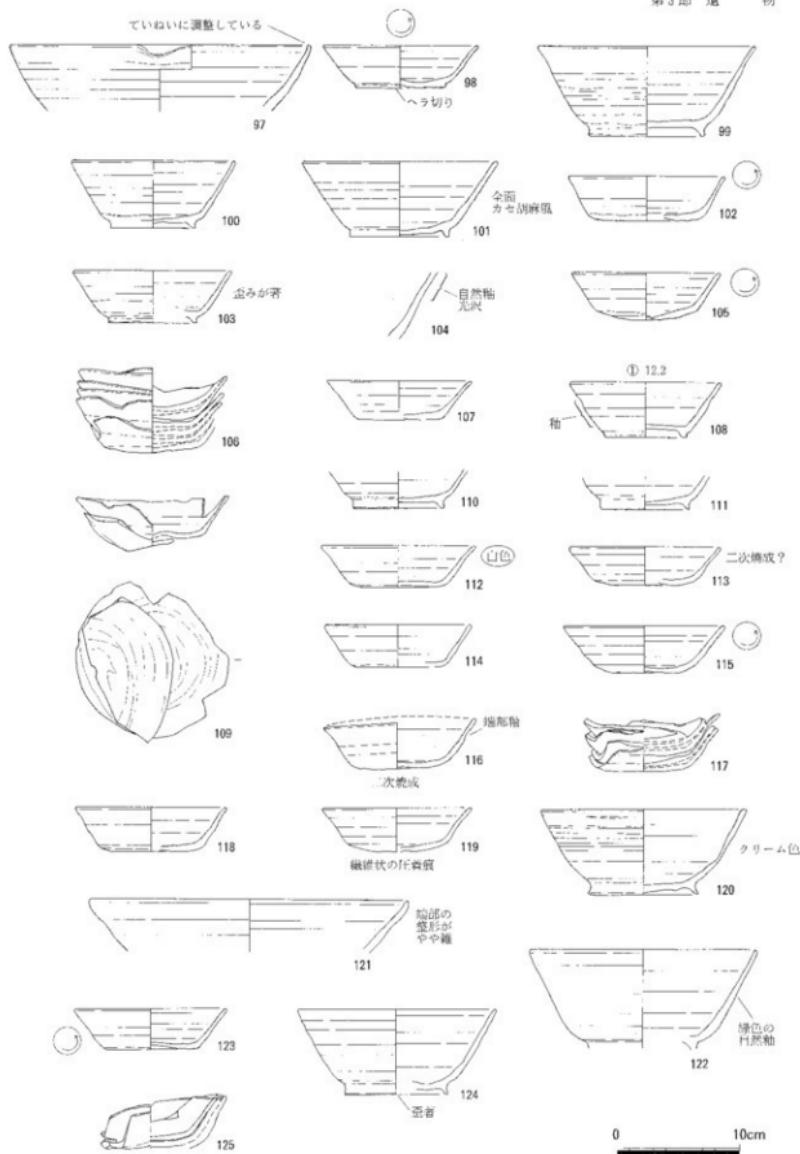
第22図 トレンチ602出土遺物（13年度分）（1/4）



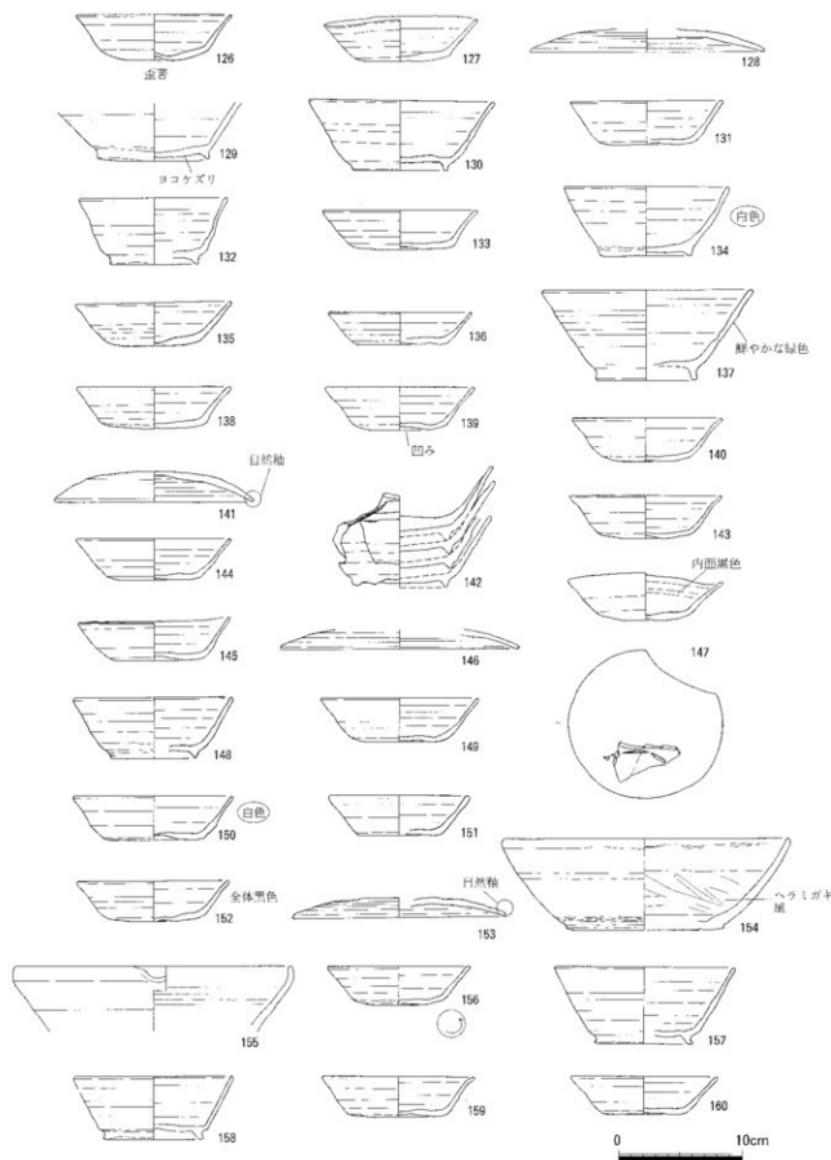
第23図 トレンチ605出土遺物（13年度分）（1/4）



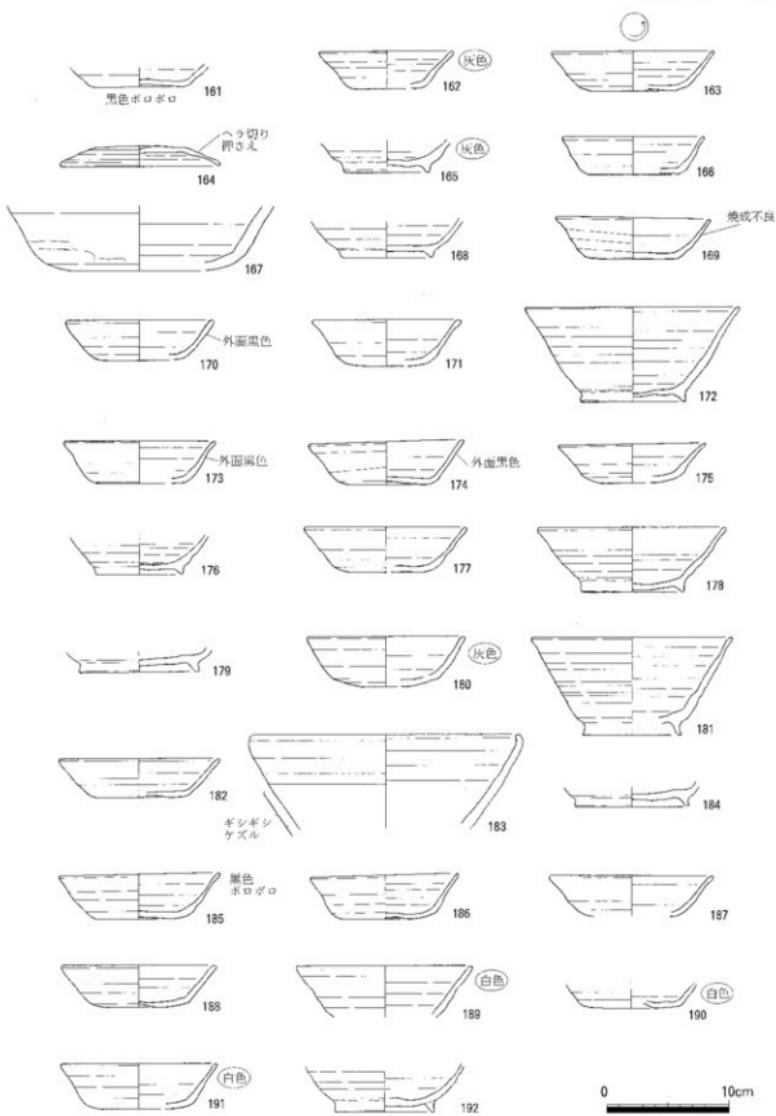
第24図 トレンチ601出土遺物 1 (1/4)



第25図 トレンチ601出土遺物 2 (1/4)



第26図 トレンチ601出土遺物3 (1/4)



第27図 トレンチ602出土遺物 (1/4)

トレント601(第20回)

番号	性	目立地名	標高(m)	ETZ (km)	緯度 (deg)	経度 (deg)	断面長 (m)	断面深 (m)	地質	形	底面・側面	特徴	既往・新規	既往・新規	備考
1	男	M06-0-300	C101.0	12.3	8.1	12.7	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: C101.0/12.0 侧面: C101.0/11.0/12.0/13.0				
2	男	M06-0-300	C102.1	-	8.0	12.3	40.2	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: C102.1/12.0 侧面: C102.1/13.0				
3	男	M06-0-300	C102.2	-	8.2	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: C102.2/12.0 侧面: C102.2/13.0				
4	男	10.06.4.-301	W106.4	-	8.7	12.5	35.0	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W106.4/12.7 侧面: W106.4/13.0/13.3				
5	男	M06-0-300	W106.5	-	12.3	12.0	31.0	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W106.5/12.0 侧面: W106.5/12.3/12.6/13.0/13.3				
6	男	M06-0-300-L	W106.6	-	11.8	12.1	31.8	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W106.6/11.8 侧面: W106.6/12.1/12.4/12.7/13.0/13.3				
7	男	M06-0-300-L	W106.7	-	11.8	12.1	31.8	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W106.7/11.8 侧面: W106.7/12.1/12.4/12.7/13.0/13.3				
8	男	10.06.4.-301-L	W106.8	-	12.3	12.2	31.8	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W106.8/12.3 侧面: W106.8/12.2/12.5/12.8/13.0/13.3				
9	男	W106.9	-	12.3	12.3	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W106.9/12.3 侧面: W106.9/12.3/12.6/12.9/13.0/13.3					
10	男	M06-0-300-L	W107.0	-	12.2	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W107.0/12.2 侧面: W107.0/12.4/12.7/13.0/13.3				
11	男	M06-0-300-L	W107.1	-	12.2	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W107.1/12.2 侧面: W107.1/12.4/12.7/13.0/13.3				
12	男	M06-0-300-L	W107.2	-	12.2	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W107.2/12.2 侧面: W107.2/12.4/12.7/13.0/13.3				
13	男	M06-0-300-L	W107.3	-	12.2	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W107.3/12.2 侧面: W107.3/12.4/12.7/13.0/13.3				
14	男	M06-0-300-L	W107.4	-	12.2	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W107.4/12.2 侧面: W107.4/12.4/12.7/13.0/13.3				
15	男	M06-0-300-L	W107.5	-	12.2	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W107.5/12.2 侧面: W107.5/12.4/12.7/13.0/13.3				
16	男	M06-0-300-L	W107.6	-	12.2	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W107.6/12.2 侧面: W107.6/12.4/12.7/13.0/13.3				
17	男	M06-0-300-L	W107.7	-	12.2	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W107.7/12.2 侧面: W107.7/12.4/12.7/13.0/13.3				
18	男	M06-0-300-L	W107.8	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W107.8/12.1 侧面: W107.8/12.4/12.7/13.0/13.3				
19	男	M06-0-300-L	W107.9	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W107.9/12.1 侧面: W107.9/12.4/12.7/13.0/13.3				
20	男	M06-0-300-L	W108.0	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W108.0/12.1 侧面: W108.0/12.4/12.7/13.0/13.3				
21	男	M06-0-300-L	W108.1	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W108.1/12.1 侧面: W108.1/12.4/12.7/13.0/13.3				
22	男	M06-0-300-L	W108.2	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W108.2/12.1 侧面: W108.2/12.4/12.7/13.0/13.3				
23	男	M06-0-300-L	W108.3	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W108.3/12.1 侧面: W108.3/12.4/12.7/13.0/13.3				
24	男	M06-0-300-L	W108.4	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W108.4/12.1 侧面: W108.4/12.4/12.7/13.0/13.3				
25	男	M06-0-300-L	W108.5	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W108.5/12.1 侧面: W108.5/12.4/12.7/13.0/13.3				
26	男	M06-0-300-L	W108.6	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W108.6/12.1 侧面: W108.6/12.4/12.7/13.0/13.3				
27	男	M06-0-300-L	W108.7	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W108.7/12.1 侧面: W108.7/12.4/12.7/13.0/13.3				
28	男	M06-0-300-L	W108.8	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W108.8/12.1 侧面: W108.8/12.4/12.7/13.0/13.3				
29	男	M06-0-300-L	W108.9	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W108.9/12.1 侧面: W108.9/12.4/12.7/13.0/13.3				
30	男	M06-0-300-L	W109.0	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W109.0/12.1 侧面: W109.0/12.4/12.7/13.0/13.3				
31	男	M06-0-300-L	W109.1	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W109.1/12.1 侧面: W109.1/12.4/12.7/13.0/13.3				
32	男	M06-0-300-L	W109.2	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W109.2/12.1 侧面: W109.2/12.4/12.7/13.0/13.3				
33	男	M06-0-300-L	W109.3	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W109.3/12.1 侧面: W109.3/12.4/12.7/13.0/13.3				
34	男	M06-0-300-L	W109.4	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W109.4/12.1 侧面: W109.4/12.4/12.7/13.0/13.3				
35	男	M06-0-300-L	W109.5	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W109.5/12.1 侧面: W109.5/12.4/12.7/13.0/13.3				
36	男	M06-0-300-L	W109.6	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W109.6/12.1 侧面: W109.6/12.4/12.7/13.0/13.3				
37	男	M06-0-300-L	W109.7	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W109.7/12.1 侧面: W109.7/12.4/12.7/13.0/13.3				
38	男	M06-0-300-L	W109.8	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W109.8/12.1 侧面: W109.8/12.4/12.7/13.0/13.3				
39	男	M06-0-300-L	W109.9	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W109.9/12.1 侧面: W109.9/12.4/12.7/13.0/13.3				
40	男	M06-0-300-L	W110.0	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W110.0/12.1 侧面: W110.0/12.4/12.7/13.0/13.3				
41	男	M06-0-300-L	W110.1	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W110.1/12.1 侧面: W110.1/12.4/12.7/13.0/13.3				
42	男	M06-0-300-L	W110.2	-	12.1	12.4	32.4	3.0M	2.-→Aquadの岩がくわく	TR	底面: W110.2/12.1 侧面: W110.2/12.4/12.7/13.0/13.3				

表1 東6号窓跡出土遺物観察表（1）

第4章 KP-1 地点窯跡の調査概要

第1節 位置と調査の概要

遺跡は、国指定史跡「伊部南大窯跡」から西側100m、標高30m前後の北向きの緩斜面に立地する。北は、伊部駅南側に広がる住宅地の北端に接する。遺跡の立地する場所は「牛神下」という小字名で、周辺には「西郷」「竈ノ下」という場所もあるが、遺跡としては周知されていない。遺跡概況としては、全長20m前後、幅数mの高まりが2ヶ所並列するが、東側の高まりがやや緩い。平成12年度に実施した備前市内遺跡分布調査において、江戸時代後期の陶片の散布状況から、連房式窯跡があるのでないかと推定された。この知見を受け、平成13年4月に磁気探査（註1）を奈良文化財研究所西村康先生に依頼して実施した結果、東側の高まりが窯体の可能性が非常に高く、西側は物原と推定された。窯体の東側は狭長な谷地形になっている。

調査にあたってこの窯跡に関する所伝等を調べた。関連する文献等が2～3あるので、第6章にまとめた。

窯と想定される地点は、金重有邦氏宅の敷地内にあり、一段高くなった南側に先生の居宅、工房がある。調査は、最小面積の発掘で窯構造をおさえることを主眼に、推定される窯の主軸から東半分を部分的に調査し、西半分は未掘とした。窯西側にある物原については、表面観察のみにとどめた。作業については、埋め戻しでクローラーダンプを使用した以外はすべて手作業でおこなった。

第2節 遺構の概要

1. 連房式登り窯

調査は表面観察によって推定された窯の主軸を設定し、それを任意の基準線として、断面観察を行なながら、東半分の一部について、窯内の堆積物の除去を行った。その結果、ゆるやかな南斜面の標高28～32mの間に構築された連房式の登り窯を検出した。なお、以下に記載する窯各部の数値は、東半分の一部と西半分が未掘であるため推定復元した値もあるが、表面観察により残存部等の実測をして正確を期した。

規模は全長が水平距離で約18.6m、斜距離で約19.1m、房の幅は最大で約4.5mある。煙出し部を除く燃焼室、焼成室の内寸は18.1m、斜距離で18.5mである。勾配は燃焼部が12°、焼成部が16°、煙出部が4°～11°、平均13°あり、主軸は北北西から南南東に向いている。窯本体で残存しているのは、窯の基底部に近い窯壁と隔壁の一部、各焼成室の床面で、天井は崩壊していて残存していない。最下段は平面形で逆三角形の燃焼室（初戸）があり、これに6つの焼成室（房・部屋）が続き、第6番目の焼成室の後ろは「煙道」と呼ばれる房がつく。その後面は簡易な構造の煙出しになっている。

燃焼室（初戸）は奥行1.9m、焚口はやや東によっていて某底部で幅0.7mを測る。床面及び窯壁の内面は堅固に焼き締まっていた。残存高は0.3mから0.5mで窯壁は、ほぼ直立していた。窯外は未掘であるため焚口付近の様子は不明である。燃焼室と焼成室を隔てる隔壁の下部には素穴と呼ばれる火



第28図 KP-1・KP-2地点窯跡トレント位置図 (1/400)

格子穴が取りつく。第1房にとりつく隔壁は、残存最大高1.0mの平断面隅丸の五角形の土柱で支えられている。上柱は縦目状の圧痕が螺旋状に観察される。主軸部ではほぼ全体検出できた平断面が三角形気味なものが中央で、西側木掘部分の地表面にもう1木露出していることから燃焼室と第1房の隔壁は3本で支えられていたと考えられる。この火格子穴部分のみ床面角度が20°と急傾斜になっている。

燃焼室に続く第1房から第6房は基本的に同じ構造となっている。各房を隔てる隔壁の下部は素穴と呼ばれる火格子穴がある。素穴は、平均して直径約0.4m、高さ0.5mの円柱状の上柱で隔壁を支える構造である。土柱の表面には薙の縦目が螺旋状に施されていて、製作方法が推測できる。土柱間は0.2から0.3m弱である。検出された土柱は各隔壁1から2本であるが、木掘部分を含めると円柱状の土柱で各6本と推定される。ただし、第5房と第6房の間の上柱は円柱ではなく、幅0.2m、奥行0.3mの角柱が3本確認でき、角柱の抜き取り痕跡も含めて考えると、約0.2mの間隔で、計9本で隔壁をささえていたと推定される。この角柱が抜き取られた痕跡は、6房から煙出しの隔壁を除くすべての隔壁の中央部で確認できることから、当初は円柱で隔壁を支えていたものが、後に角柱に改修されたと推定できる。また、各房の隔壁の前後には溝及び段構造のものは検出できなかったので、1～6房の床面は平面が連続している無段の構造と考えられる。

以上のように当初のKP-1窯は、素直径0.4mの円柱状の上柱6本で隔壁を支えるが、第1房にとりつくそれは、残存高1.0mの平断面隅丸の五角形の土柱3本で支えられている。これは平成11年に発掘調査で確認された西1号窯跡同様、燃焼室から焼成室へ効率良く熱を伝えるため素穴部の開口を広くとる必要があること、焼成室が三角形に絞り込まれているためこの部分を構造的に堅固する必要があること、この隔壁部分で勾配が12°から20°と急変しているためさらに構造的に力がかかること、以上から、通常よりも規格の大きな土柱を使用し、本数を少なくする必要があったと考えられる。

窯の主要な構造材は、30cm前後の「らんま」と呼ばれる未焼成の粘土ブロックと粘土上と推定されるが、全ての部分でその単位を区別できるわけではない。また燃焼部（初戸）内に幅0.7m、長さ1.0m、厚さ0.6mの崩落した天井片が検出され、内面には繊維状の圧痕が観察できることから、築窯時窯壁の内側への崩落を防ぐために用いられた材と推定される。

各房の幅は内法で、第1房の推定幅3.6m、奥行2.0m、ほぼ中央部第4房の推定幅4.5m、奥行2.0m、第6房の推定幅4.0m、奥行2.2m、煙戸と呼ばれる最後尾の房は推定幅3.6m、奥行1.7mで、窯中央部がやや膨らむ平面形が推定できる。

6房から煙戸にかけての床面は序々に勾配がゆるくなっている、6房付近で11°、煙道で4°と傾斜をもたなくなっている。また煙戸の床面は5cm程度床を上げる貼り替えが行なわれている。

煙出しが、煙道の後方の壁下の素穴に取り付けられている。この部分の隔壁は円柱ではなく、土管と幅0.3m×残存高さ0.4mの空間で構成される簡易な排煙設備で、推定5ヶ所ある。煙戸側壁を延伸する形で幅0.3mの空間があり、そこから0.5mの箇所に、床面には半分埋没する形で幅0.2m土管が隔壁に埋め込まれている。隔壁はほぼ中央部には、不定形な台形様の高さ約0.4mの煙出しが推定されるが、西側部分は未掘である。

各房の入り口は、第2房、第4房、第6房で東側、第1房、第3房、第5房、煙道で西側につくことが推定される。入り口幅は基底部で0.6m前後である。各房の焚口穴については、窯壁の残存部が高いものでも床面から0.6m程度であるため、確認できなかった。

作業場や覆屋の柱穴の痕跡はトレッジの設定が窯を中心としたため確認できなかった。

また、今回の調査では主軸断面の断ち割りはできなかったが、全体の地形などから窯は基本的に旧地形の傾斜を利用して、部分的に地山を削り出した基盤上に構築されているようである。

窯内の堆積は基本的に2層に分かれる。上層は黒褐色の腐植土層の堆積で、下層は窯壁崩壊による堆積である。窯壁が崩落して堆積した層は、各房により、破片の大きさや色調が多少異なるが、基本的には形成過程は同じである。焼成室床面には、さやや陶板片が、不良な製品とともに堆積していた。

2房床面においては、 $0.3m \times 0.3m$ 前後の陶板を数枚重ねて、段上に組んだ構造物が検出された。陶板と床面の間に陶片を挟みこみ、陶板面を水平に保つ工夫をしていることから、焼成時の窯道具と推定できる。こうした状況から、窯は最後まで機能していたと考えられ、突発的な事故等で終焉を迎えたのではないかと推定される。

2. 溝

煙出しの後方には幅2m前後の溝が東西方向に走るが、この溝が窯にともなうものか確認するため、窯の主軸を延長し溝を直交する形でトレーナーを設定した。断面観察や溝内に堆積している遺物の状況から、溝は地山を削り込んで構築したもので、この窯を保護するために排水施設を構築した可能性が高いことが判明した。この溝内には16世紀代の遺物も混入していることから、居宅造成時に南側部分は埋没したと考えられた。

3. 物 原

窯の主軸から西側10mのところには、長さ20m、幅約10m、最大高さ4mにわたって、不良品やさやなどの窯道具をまとめて投棄した物原が形成されている。今回の調査は物原部分では実施していないので、堆積状況については不明であるが、窯道具や大型品が多いのではないかと思われる。

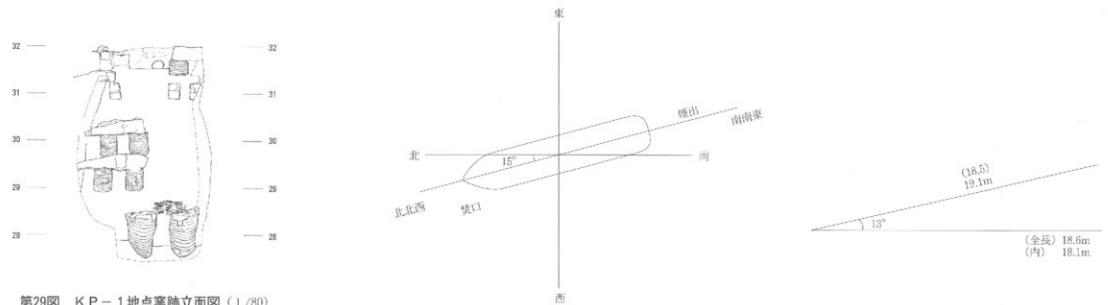
窯の東側については窯に隣接する形で幅3mのコンクリート舗装道があり、そこから東側は狭長な谷になって急激に落ち込んでいる。この部分に物原が形成されていたか不明ではあるが、現況の観察からその可能性は低いと推定される。

第3節 遺 物

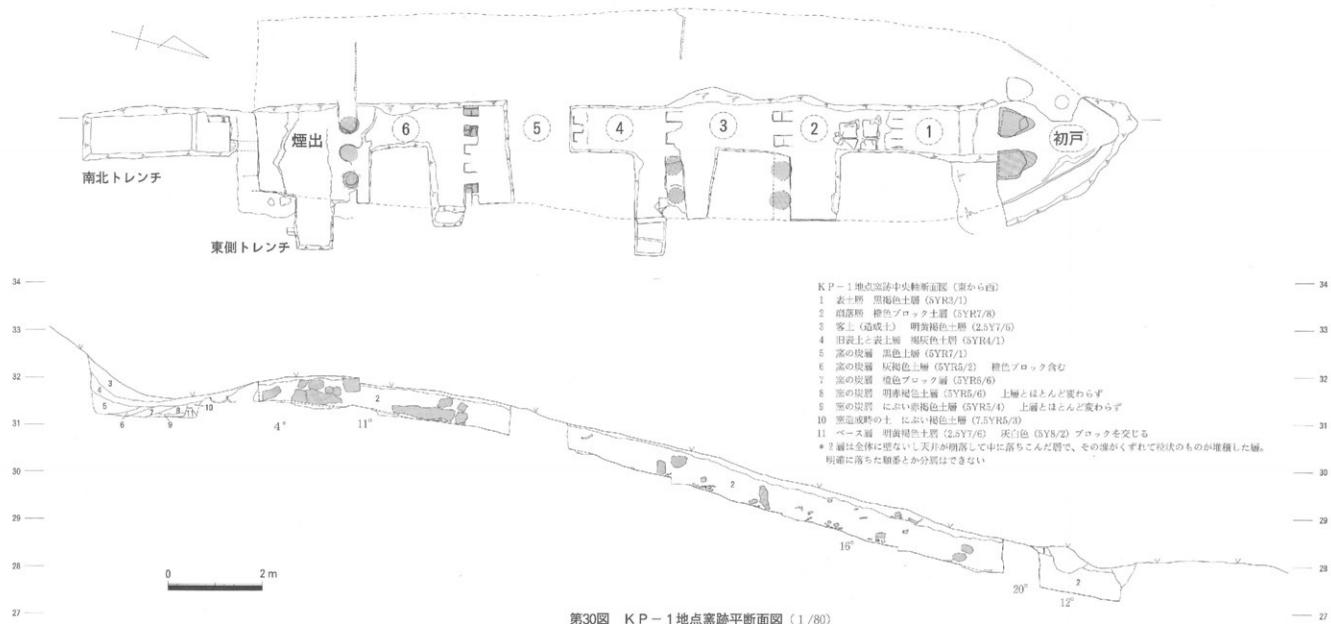
出土した遺物はそのほとんどが備前焼である。窯の西側には長さ20m、幅約10m、最大高さ4mの巨大な物原があるが、今回記述する遺物は主に窯内から出土したものが中心になる。窯内の遺物の半数以上は陶板状の窯道具や匣鉢の破片である。それらは膨大な量になるため発掘調査時に陶印のあるものや完形に近いものなど資料的価値がより高いものを選別し、遺物として持ち帰った。それ以外のものについては、現地にて上のう袋につめ出土したそれぞれの地点に戻した。

主な遺物は、人形徳利、角徳利、小形徳利、播鉢、甕、花入、盃、灯明皿、平鉢、急須、細工物など相当な種類にのぼる。量的には甕類が多く、それに徳利類、播鉢、皿類が続く。

以下窯内については各房ごと、それ以外については出土地点、層序ごとに記述する。また各房の間で接合関係がある遺物については、基本的に出土地点が高いもの、つまり煙出しに近い地点を原位置と考え、数字が大きい房の遺物として記載した。



第29図 K P - 1地点窯跡立面図 (1/80)



第30図 K P - 1地点窯跡平面図 (1/80)

1. 初戸出土（第31図・第32図）

1～36が初戸出土遺物で、31～36が下層からの検出である。1・2は甕の蓋で、内面に轆轤左回転のケズリが施してある。3は甕で、2がその蓋の可能性がある。4は菊紋を貼り付けた甕で胴部に雷文を施した中型の甕である。5・9は型抜きの布袋を貼り付けた人形徳利。6は耳付瓢形水指。7・8・21は甕で、8はやや法量が小さい。10・13は蓋で、10はこの窯の中では最も人形の製品である。11は徳利で底部に陶印がある。12は六角徳利。14～16は直径10cm前後の灯明皿。17～19は煎茶器で、17・19は蓮？をモチーフにしたもの。18は後手形。20は備前の名勝地「臥龍松」の絵皿。22は手びねりの皿で、表面に自然釉が厚く付着している。

23～29は窯道具で、23・27は穴あきの丸形の板状のもので、24・25・26・29は匣鉢で、26は胴部が穴あきになっている。28は製品の可能性もあり、用途は不明。30・33は徳利、32は甕、34は擂鉢であるが、KP-2地点の窯からの流入と考えられる。31・35・36は窯道具。

2. 1房出土（第33図）

37～45までが1房で出土した備前焼。37・40・41は小形の徳利で、40・41は松などをモチーフにした線刻が施されている。38は花立、43・44は徳利、43は人形徳利の可能性がある。42は鉢で内面の轆轤目が顕著である。

3. 2房出土（第34図・第35図）

調査面積が房の約4分の1になる2房で確認された遺物は46～56までで、中形から大形の甕の割合が多い。

46～47は徳利で、46は扁壺形、48は粗雑化した布袋の型が貼り付けられている。49～51は普遍的に見られる甕。52・53は窯道具の匣鉢。54～56は大形の甕で、頸部から胴部にかけて条線を施した上に菊紋などを貼り付けている。胴部には雷文と○○文（名称不明）が交互にスタンプで押されている。これらの甕は、明治初年で廃窯されたという西1号窯跡では確認されていないことから、明治の新し意匠かもしれない。

4. 3房出土（第36図）

房全体の6分の1程度が調査面積となる3房の遺物は57～64である。

57・62は徳利、58は胴部に桜紋のスタンプが施された鉢で、火入れの可能性がある。61・63は甕で、63は普遍的に見られるタイプ。59・60・64は擂鉢で、59は底面外縁のわずかに外に高台をつけている。64は高台を削りだしている。

5. 3房から4房の隔壁付近出土（第37図）

遺物では角徳利の割合が多い。65～78の遺物が該当する。

65は灯明皿、66は甕。67～73は角徳利。69・70は小形で、73は歪みが著しい。74は大形の擂鉢で、75～78はすべて窯道具。75・76ともに上面に径20cm～30cmの葉状の繊維の付着が見られる。77は底部に陶印があり、78は胴部に円形や不定形の穴がある匣鉢。

6. 4房出土（第38図）

調査面積は房全体の3分の2程度である。遺物は79～95で比較的の擂鉢の比率が高い。
80・81は甕の蓋、83は掛花生で取手が付くタイプ。82・84は角徳利、85～87は窯道具の陶板である。
88は瓢付杯と呼ばれる洒落た工芸が施された甕。91から95までは擂鉢で、91はKP-2地点の窯からの流入。
93・94の高台は削りだしている。

7. 5房および6房との隔壁付近出土（第39図・第40図）

遺物は房の南半分と6房との隔壁付近からの検出の96～113で窯道具が比較的多い。96・97は甕だが、97は一般的な甕とは異なり、底部が粗雑な上、側面に径数cm大の不定形な凹みが数箇所観察される。98・103・104・105は窯道具丸形匣鉢、108～110・113は窯道具の陶板で、108はドーナツ形。99～101は徳利で、すべて底部に陶印が施されている。102は極めて小形の甕。106・107は擂鉢で、106は付け高台。112は浅めの大形の鉢である。

8. 6房出土（第41図・第42図）

この房の調査面積は全体の3分の1程度である。遺物は大形の鉢、大形の擂鉢、甕などである。114～128までが該当する。114・115は大形の鉢で、115は胴部に貼り型があり、一部剥離している。116～121は窯道具で、117・118はいわゆる「トチン」であるが、数量はごくわずかである。122は極小の甕か。123～125は普遍的に見られる甕、126は徳利。127・128は擂鉢で高台部はケズリ出し。

9. 6房東側トレンチ出土（第42図）

6房の東側に、窯の外側の様子を探るためにトレンチを設定したが、遺物のほとんどは窯道具である。129～133はすべて窯道具であるが、131・132の紐状の粘土塊は現代陶の可能性がある。

10. 煙道出土（第42図・第43図）

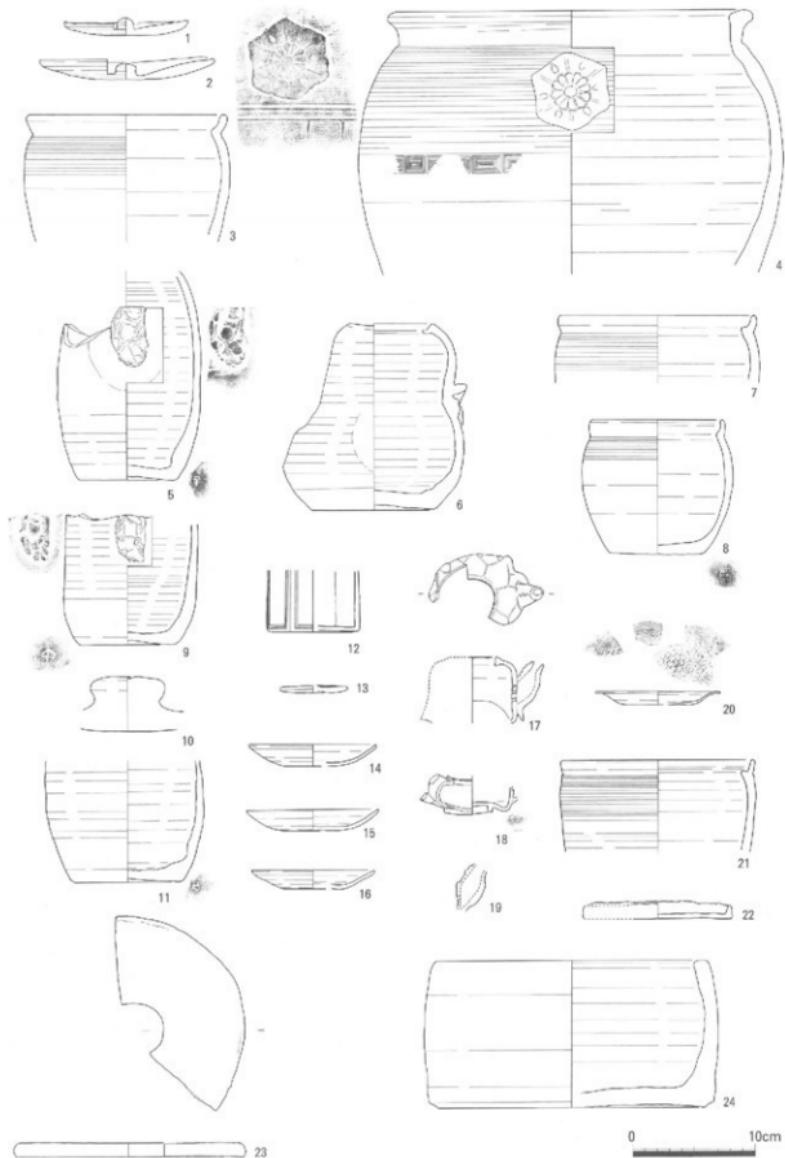
房全体の約半分が調査面積である。灯明皿や甕、徳利などがある。134～145までが遺物である。134～136・145は窯道具。137はつまみ部が欠損している蓋、138は小皿、139は3個体分が溶着した灯明皿。140・141・144は徳利。142は小皿であるが、KP-2地点の窯からの流入の可能性がある。143は普遍的に見られる甕。

11. 南北トレンチ出土（第44図・第45図）

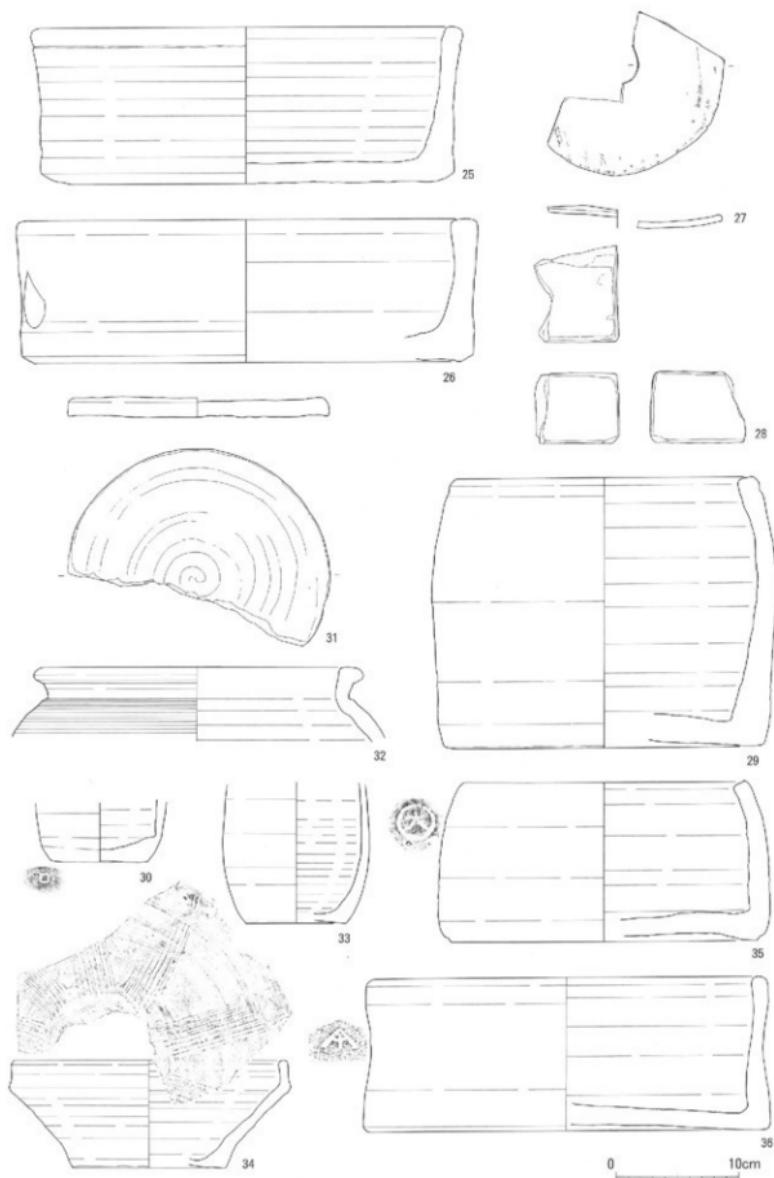
煙道の南側の溝から出土した遺物が主体となる。擂鉢片が半分以上を占めるが、そのほとんどがKP-2地点の窯からの流入である。146～164が該当する。146・147は小形の角徳利、148は大形の土管、149・152は徳利。150～153は窯道具であるが、150は底部が無く、糸引きで切り離された胴部に穴がある特殊な匣鉢。154～164はすべて擂鉢片であるが、158の底部を除いてすべてKP-2からの流入である。

12. 初戸上層（客土）出土（第46図）

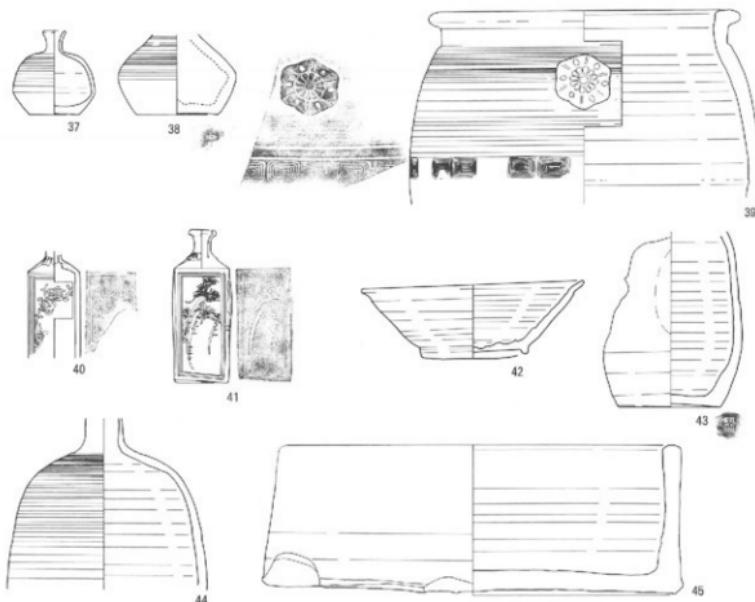
初戸の上層からの出土したもので、そのほとんどが客土からの検出である。原位置を保っていないため資料的にはその価値を減じるが、特徴的な器種もあるのでまとめて報告する。



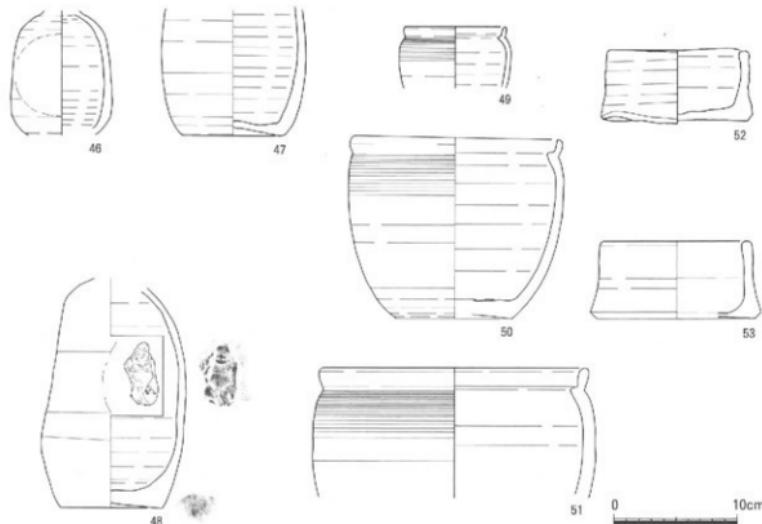
第31図 初戸出土遺物 1 (1/4)



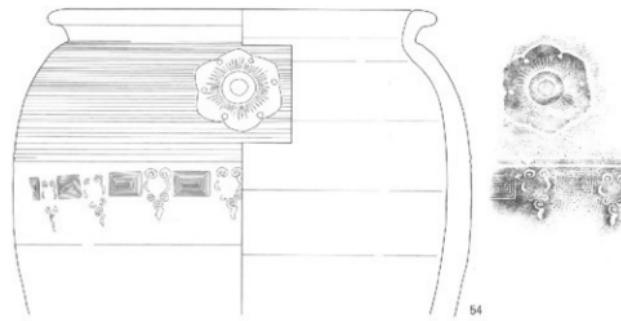
第32図 初戸出土遺物 2 (1/4)



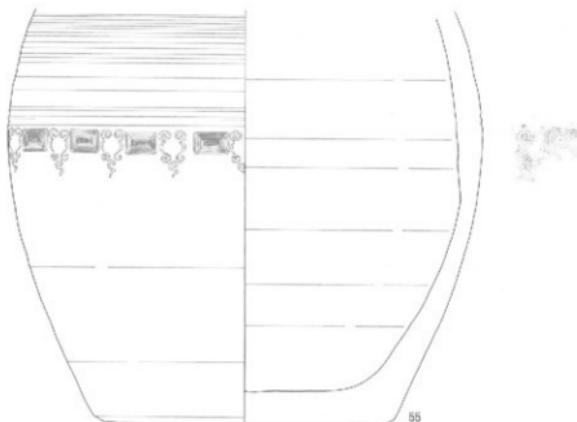
第33図 1房出土遺物 (1/4)



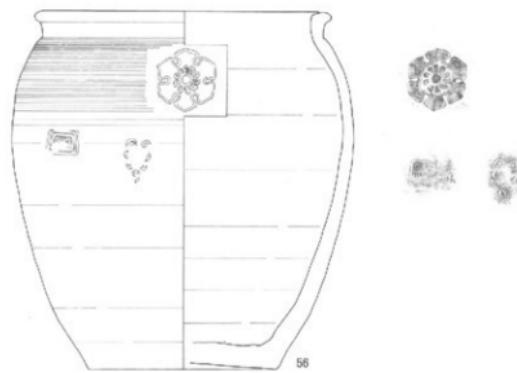
第34図 2房出土遺物 1 (1/4)



54



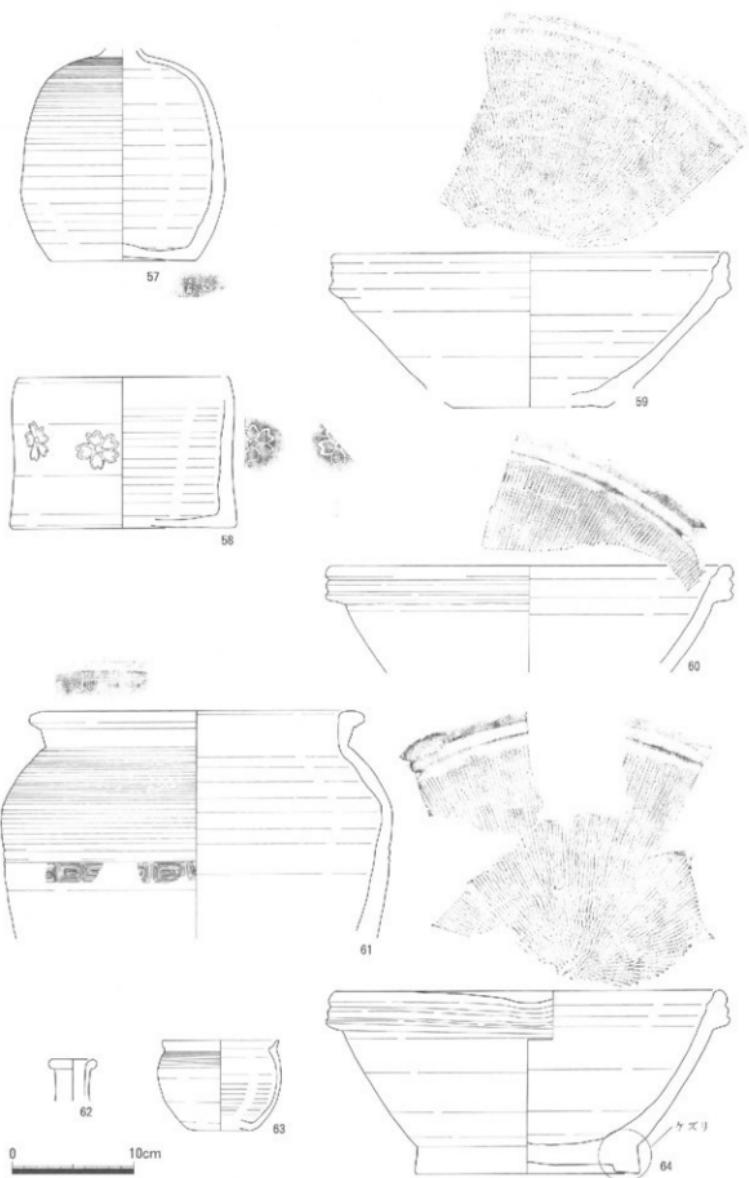
55



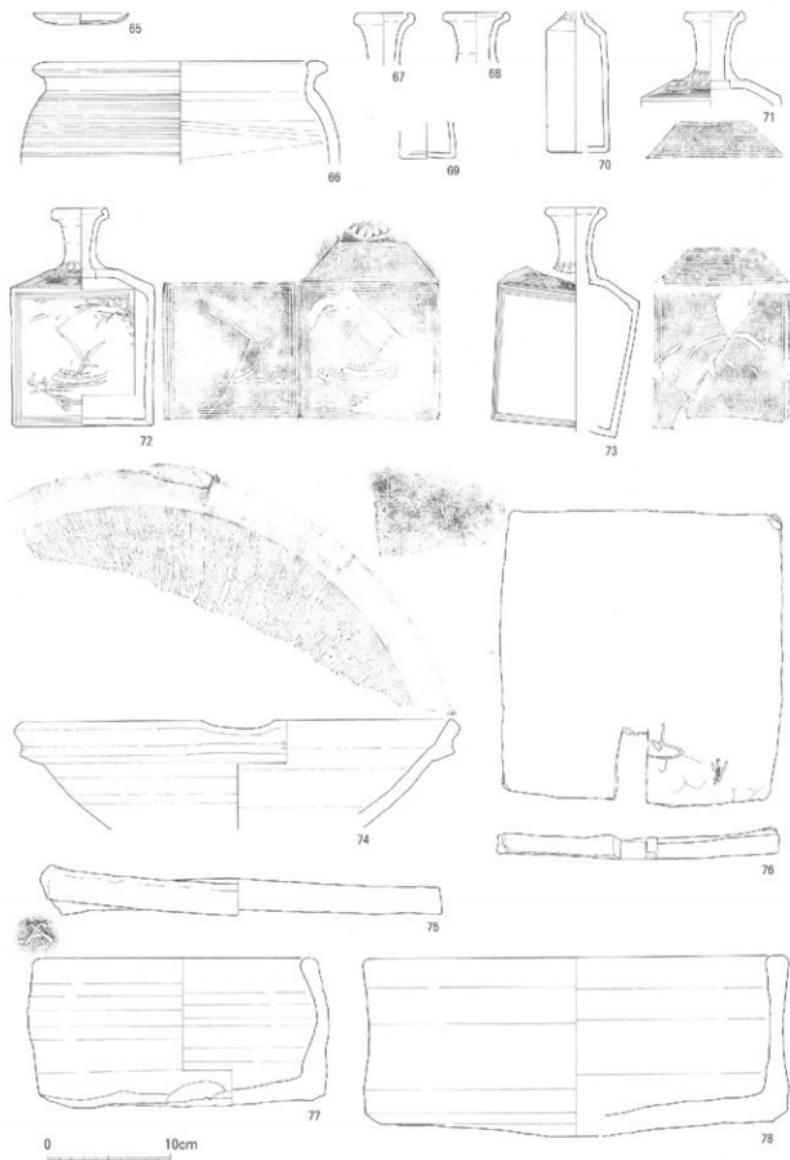
56

0 10cm

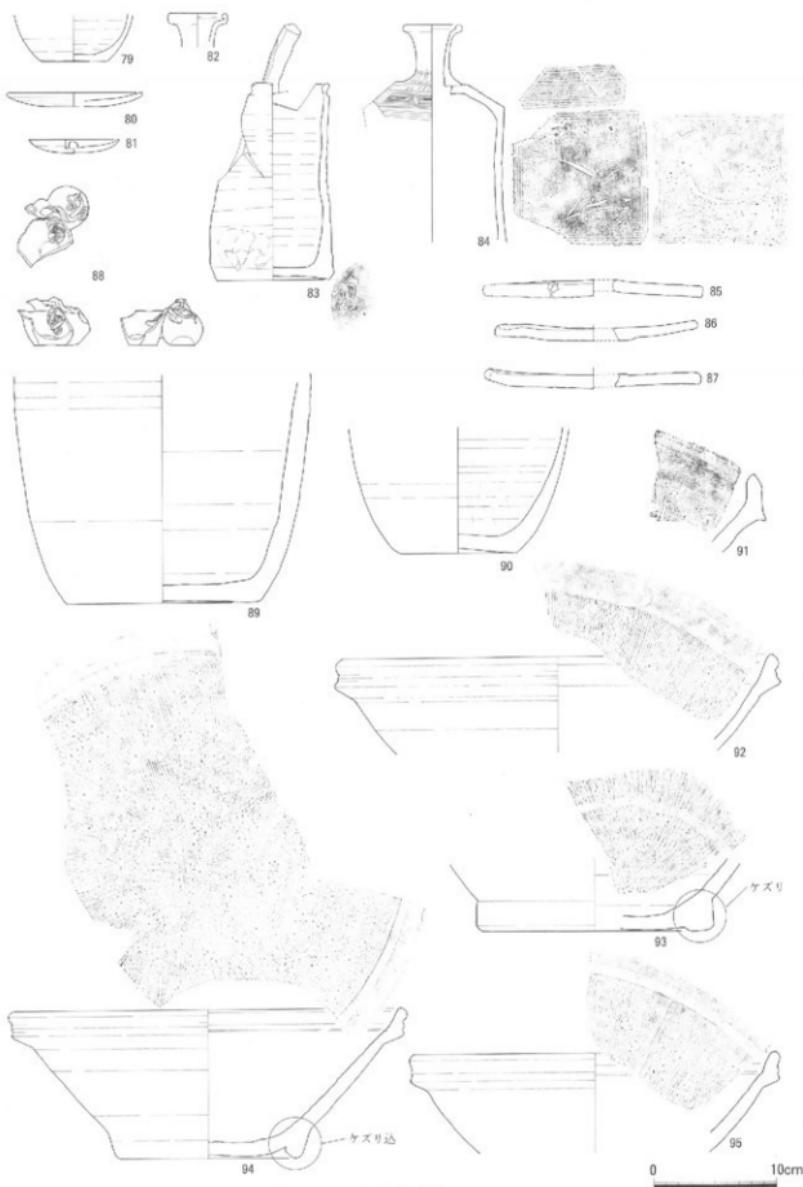
第35図 2房出土遺物2 (1/4)



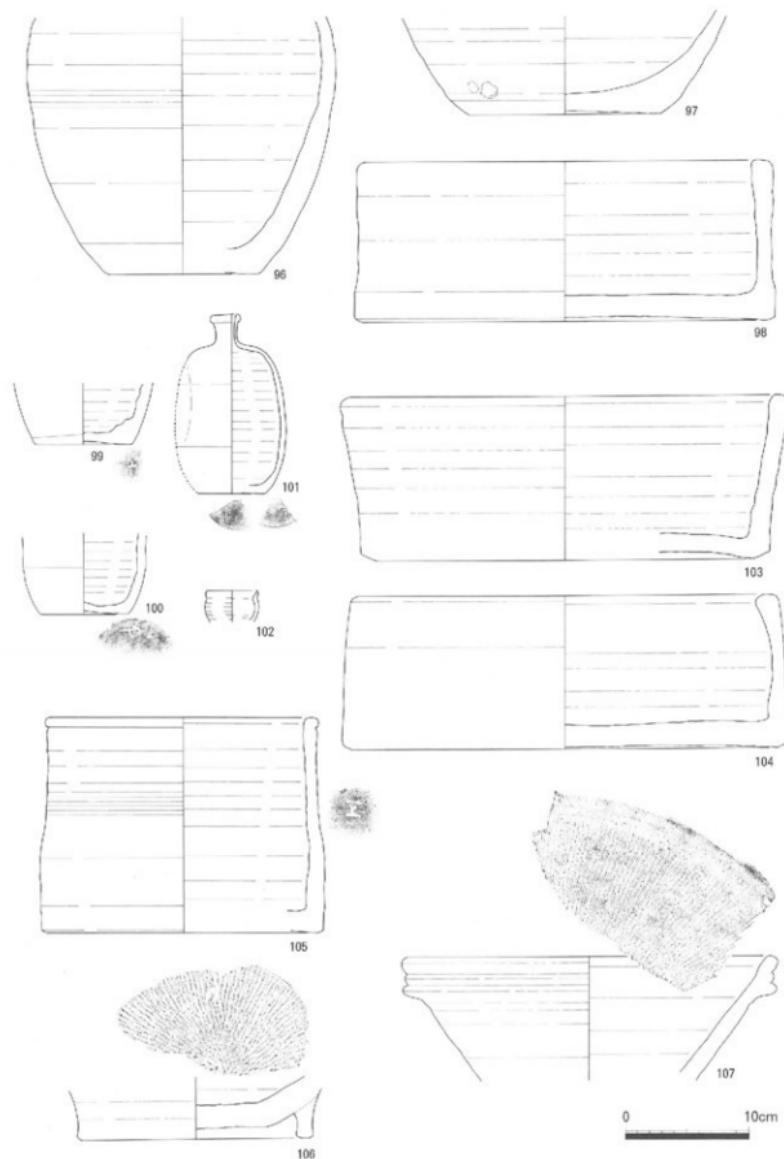
第36図 3房出土遺物 (1/4)



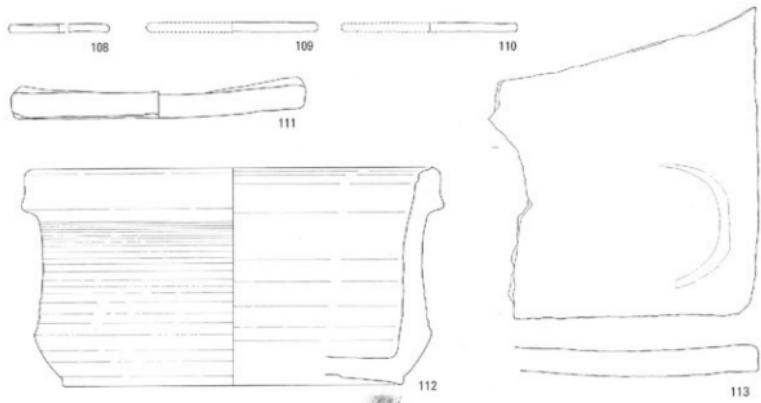
第37図 3房から4房の隔壁付近出土遺物（1/4）



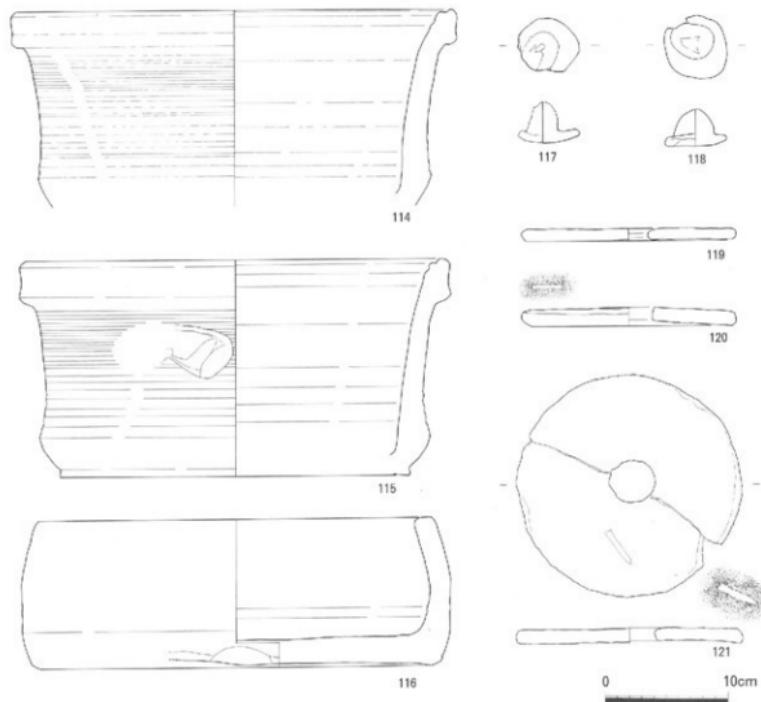
第38図 4房出土遺物 (1/4)



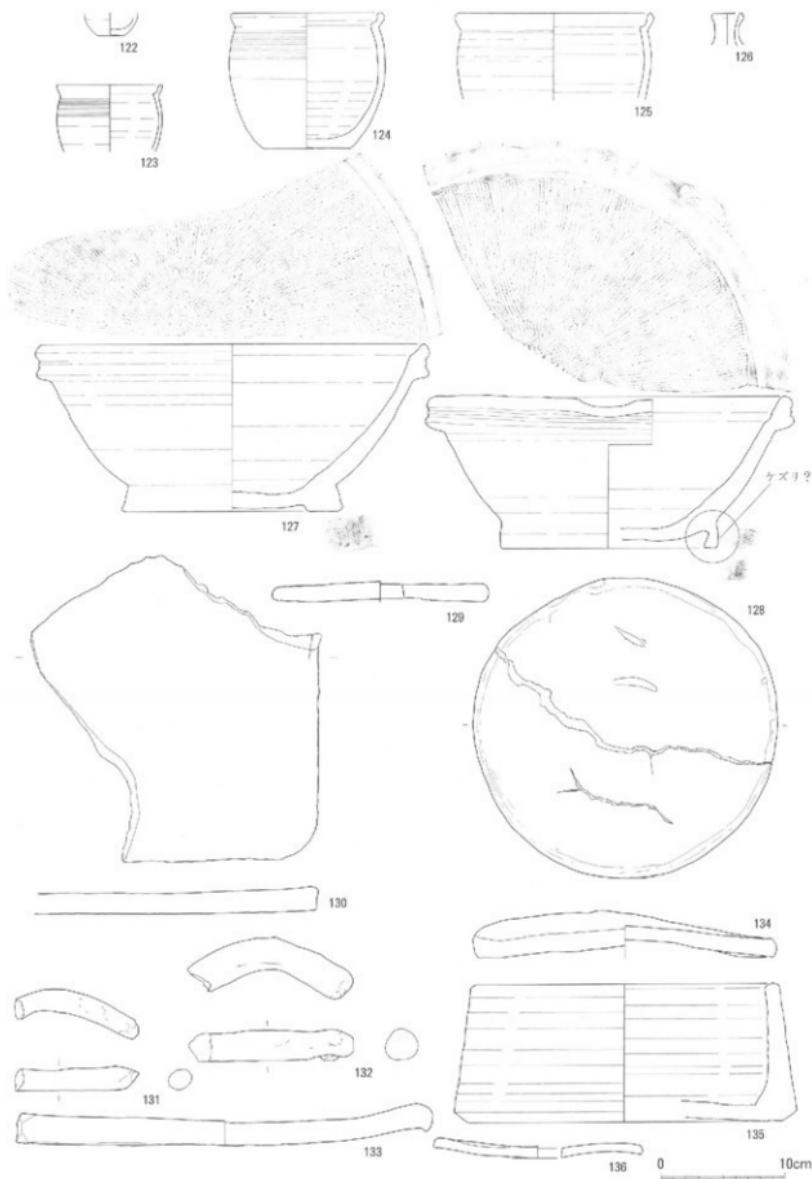
第39図 5房および6房との隔壁付近出土遺物 1 (1/4)



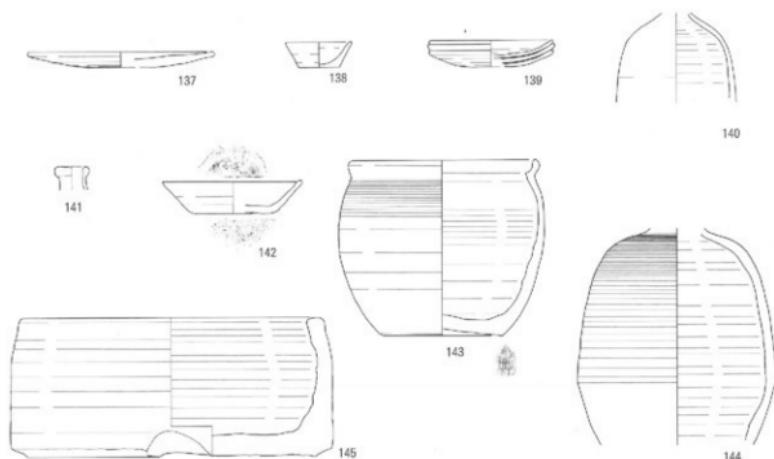
第40図 5房および6房との隔壁付近出土遺物2 (1/4)



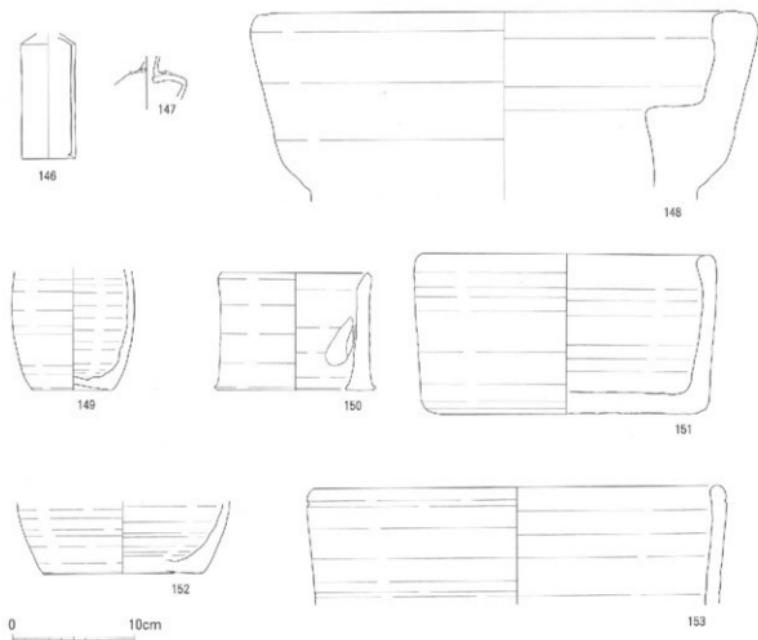
第41図 6房出土遺物1 (1/4)



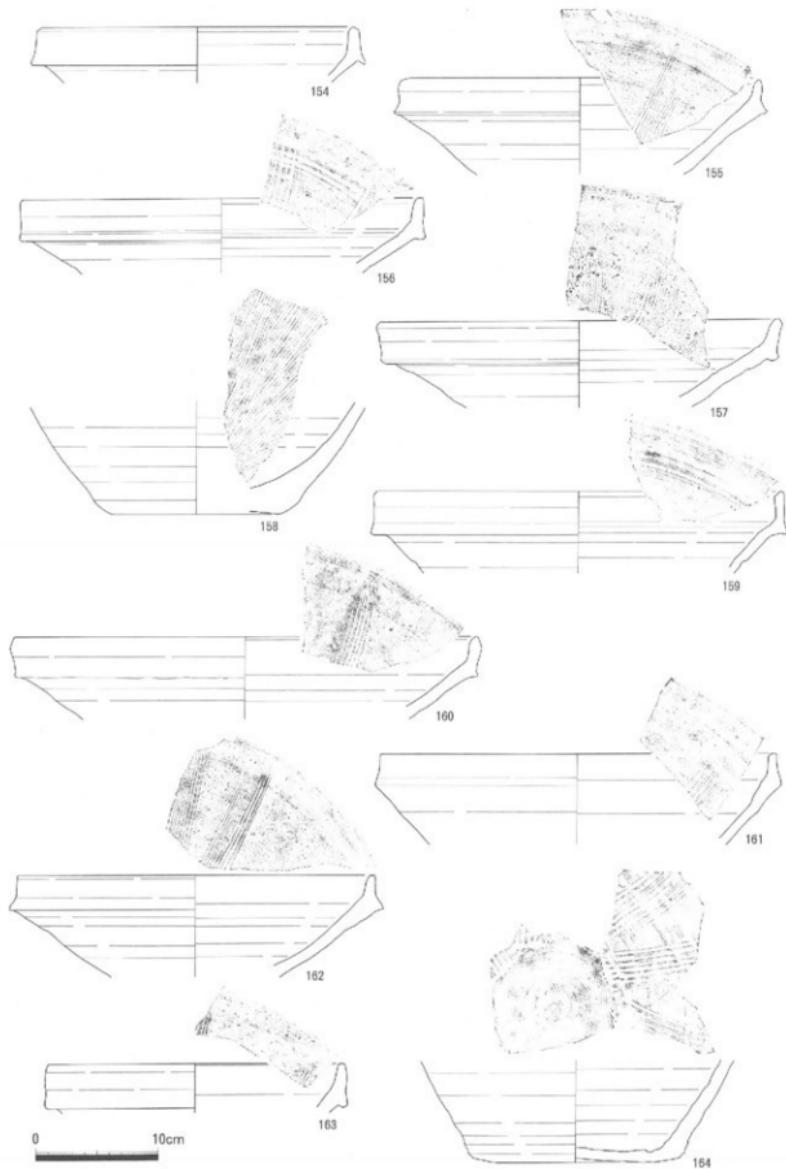
第42図 6房出土遺物2・6房東側トレンチ出土遺物・煙道出土遺物1(1/4)



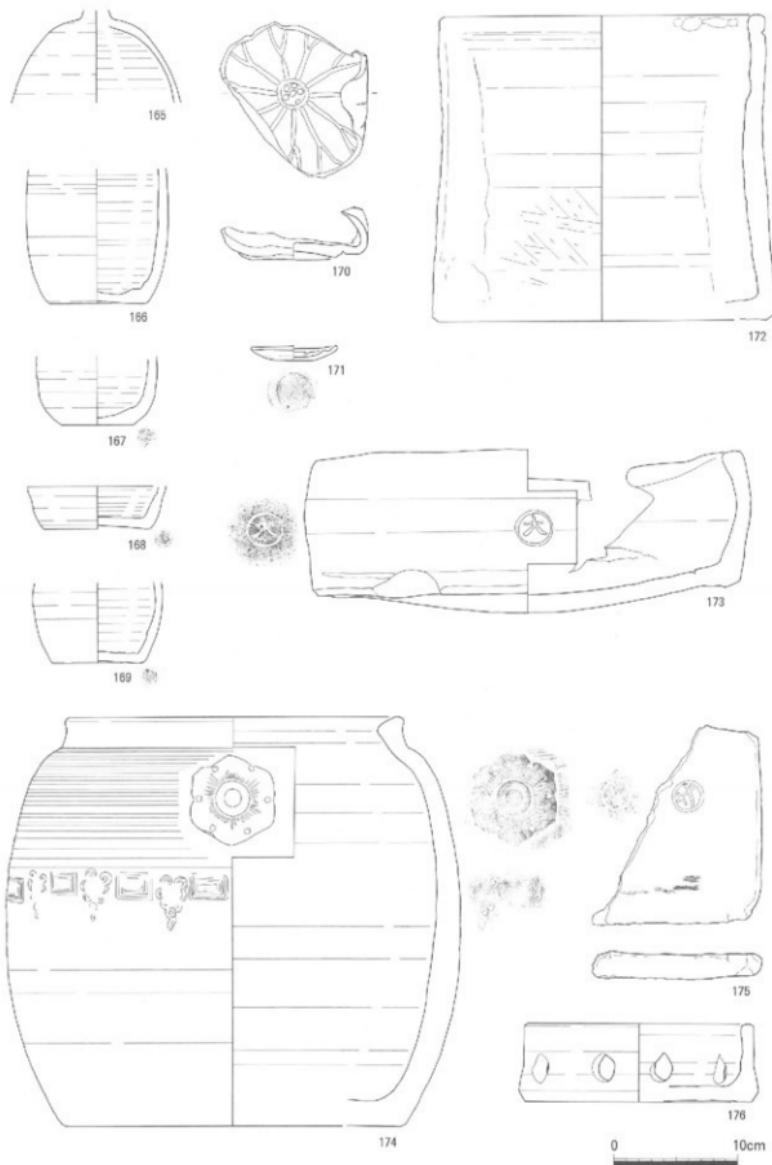
第43図 煙道出土遺物 2 (1/4)



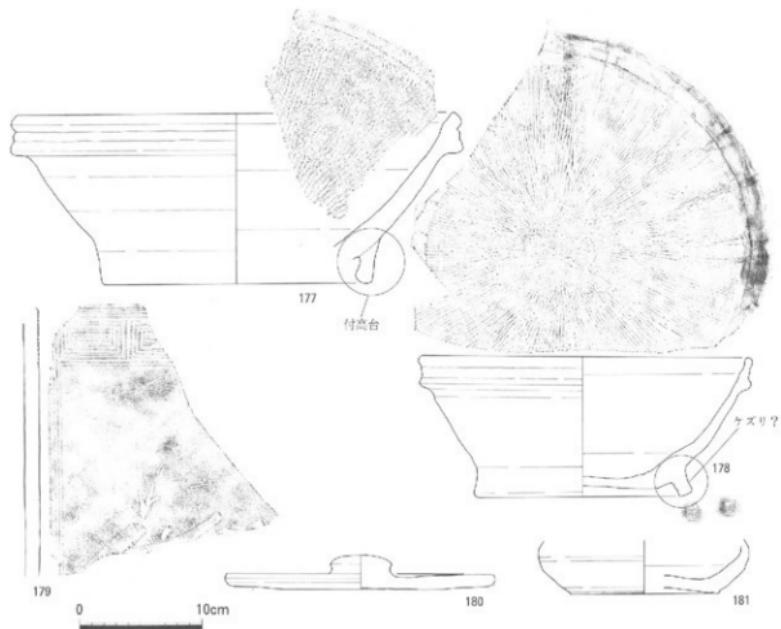
第44図 南北トレンチ出土遺物 1 (1/4)



第45図 南北トレンチ出土遺物 2 (1/4)



第46図 初戸上層出土遺物 (1/4)



第47図 表探資料遺物（1/4）

該当は165～176である。165～169は徳利で、底部に㊀や圓などの陶印が施されている。170は芙蓉をモチーフにした鉢。171は径が約7cmの灯明便面。172は丁寧に作られた大形の角形匣鉢、173は㊀の陶印のある大形の丸形匣鉢。174は大形の甕で、頭部から胴部にかけて条線を施した上に菊文を貼り付けている。胴部には雷文と○○文（名称不明）が交互にスタンプで押されている。175は㊀の陶印がある陶板、176は小形の穴あき丸形匣鉢。

13. 表探資料（第47図）

177から181はKP-1地点付近で採取した遺物である。177・178は播鉢で、177は付け高台、178はケズリ出し高台である。179は巨大な角徳利の胴部片である。180は蓋、181は浅めの鉢である。

(1) 西村康「伊部南大窯の探査」『伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ』備前市教育委員会
2003

初戸出土（第31~32回）

番号	地名	出土場所	測定値 mm	測定 部	測定 値 mm	測定 部								
1-16	初戸	22-18	00.030	1.4	+ 0.01	4.0	+ 0.01	2.0	+ 0.01	0.00	+ 0.00	2.0	+ 0.01	2.0
2-17	初戸	22-18	00.030	1.9	+ 0.01	1.0	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00
3-18	初戸	22-18	00.030	10.9	+ 0.01	4.6	+ 0.01	2.0	+ 0.01	0.00	+ 0.00	2.0	+ 0.01	2.0
4-19	初戸	22-18	00.030	29.3	+ 0.01	2.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.01	0.00
5-20	A-12	22-18	00.010	12.0	+ 0.01	1.0	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
6-21	初戸	22-18	00.030	2.9	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
7-22	初戸	22-18	00.010	2.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
8-23	初戸	22-18	00.030	10.9	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
9-24	初戸	22-18	00.030	2.9	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
10-25	初戸	22-18	00.030	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
11-26	初戸	22-18	00.010	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
12-27	初戸	22-18	00.030	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
13-28	初戸	22-18	00.030	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
14-29	初戸	22-18	00.030	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
15-30	初戸	22-18	00.030	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
16-31	初戸	22-18	00.030	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
17-32	初戸	22-18	00.030	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
18-33	初戸	22-18	00.030	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
19-34	初戸	22-18	00.030	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
20-35	初戸	22-18	00.030	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
21-36	初戸	22-18	00.030	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
22-37	初戸	22-18	00.030	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
23-38	初戸	22-18	00.030	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
24-39	初戸	22-18	00.030	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
25-40	初戸	22-18	00.030	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
26-41	初戸	22-18	00.030	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
27-42	初戸	22-18	00.030	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
28-43	初戸	22-18	00.030	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
29-44	初戸	22-18	00.030	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00
30-45	初戸	22-18	00.030	0.0	+ 0.01	0.00	+ 0.01	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00	+ 0.00	0.00

表2 K P - 1 地点窓跡出土遺物観察表 (1)

第5章 KP-2 地点窯跡の調査概要

第1節 位置と調査の概要

KP-2 地点窯跡は、国指定史跡「伊部南大窯跡」から西南西方向へ100m、標高40m～45mの北向き緩斜面に位置する。窯跡の立地する場所の小字名は「向山」で付近には「西竈」という場所もあるが、遺跡としては周知されていなかった。調査前の現況としては、幅15～20m、奥行き 5m 前後の横幅の広い段が、2～3段観察でき、その東側の凹部に多量の擂鉢片の堆積が確認できる。平成12年度に実施した備前市内遺跡分布調査において、擂鉢片や火薬片が採取でき、多量の擂鉢片の堆積状況などから、16世紀前後の相当な規模をもつ窯跡があるのではないかと推定された。

この地点は金重有邦氏宅のすぐ南側にあり、庭に隣接しているため、作業期間や作業地点を最小限にとどめることとした。そのため多量に擂鉢片が確認された地点のすぐ東側の段上に、幅1m弱のトレンチを数mにわたって並行して2本設定し、そのうち1本については多量の擂鉢片を断割る位置をとった。これにより窯跡の有無を確認し、確認できた場合は窯の幅およびその軸方向、また窯と物原との関係が明らかになると考えたからである。作業は、伐採でチェンソーを使用したほかは、すべて手作業で実施した。

第2節 遺構の概要

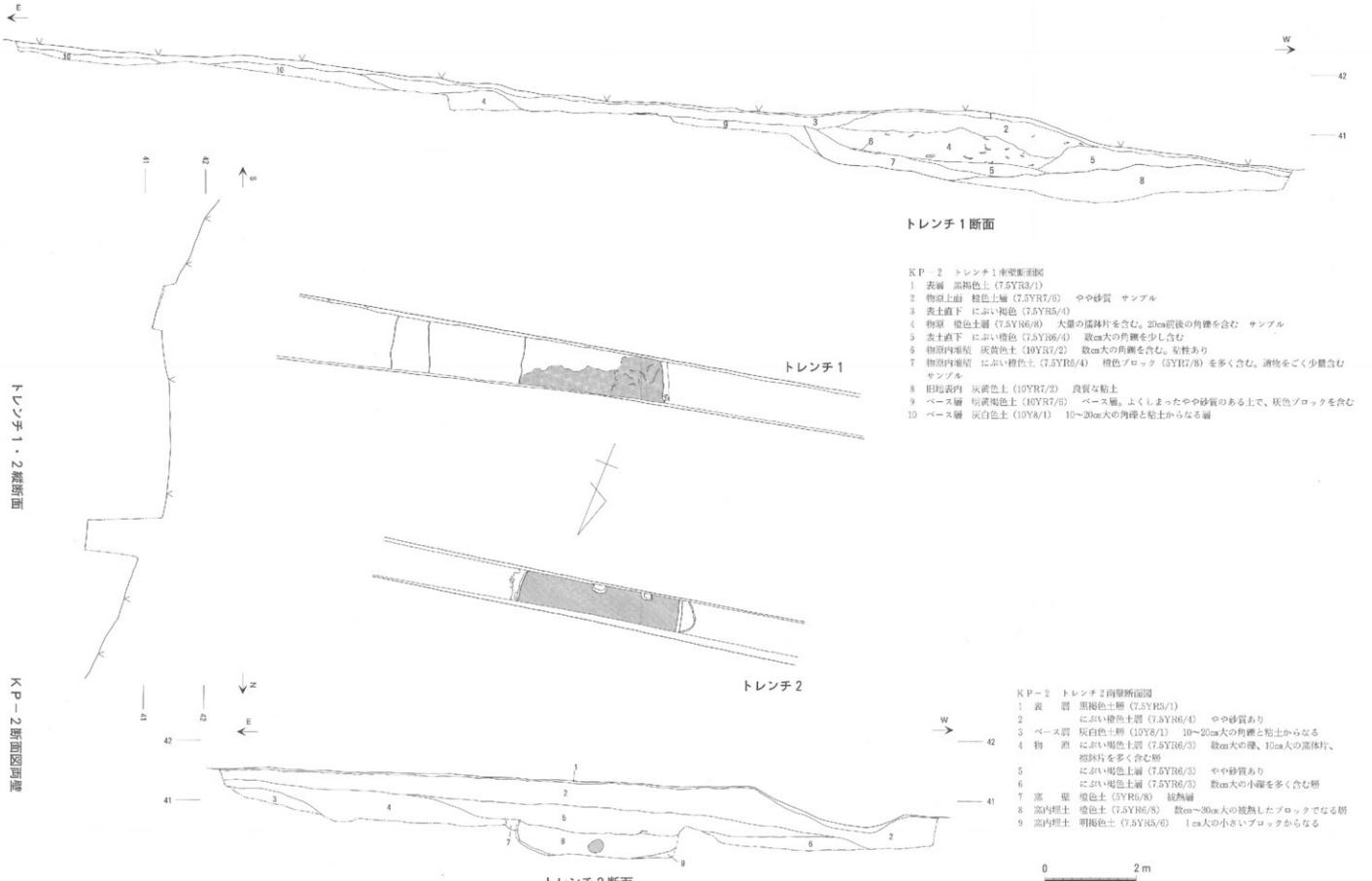
1. 大 窯

調査は前節でも記述したとおり、2本のトレンチのみである。南側をトレンチ1、北側をトレンチ2とした。トレンチは約3mの間隔で、ほぼ並行に設定した。

トレンチ1は幅1m弱、長さは東西方向に約21mで、トレンチ2の南側に位置する。トレンチ1のほぼ中央部、現地表下0.3mの浅い部分で、東西方向に幅約2.5mの赤色の被熱面を確認し、そのうち北側3分の2は窯の床面が現存していた。また被熱面から東へ1.5mの地点で、幅0.6mの別の被熱面も検出された。当初窯を保護するための溝に隣接するものかと考えたが、原位置での被熱の可能性も考えられ、結論は得られていない。

トレンチの西側部分は擂鉢が多量に堆積していた地点で、トレンチがそれを断割るような形になっている。その結果、先ほどの窯床面から東へ2mの地点で、トレンチ内での幅になるが東西方向5m弱、深さ最大1mの擂鉢を主体とする物原が確認された。物原はレンズ状に堆積していて、その直下には灰黄色土の良質な粘土層が走っている。

トレンチ2はトレンチ1の北側に位置する。幅1m弱で、長さは東西方向に約12mで、ちょうど幅広の段の肩の部分にあたる。トレンチ1のほぼ中央部、現地表下0.7mの深さで、粘土ブロックが一定の範囲にわたってひろがっており、その直下にトレンチ内の計測ではあるが、幅約2.7m、残存高さ約0.6mの窯体を確認した。窯体内は数cmから30cm大的の被熱ブロックで層である。窯床面は凹凸がなく断面レンズ状に堅く焼き締まっているが、窯壁についている凹凸があり、やや焼きしまり具合が弱



第50図 KP-2地点墓跡平断面図 (1/80)

いようである。特に西側の壁については、被熱部分が剥落したのか、確認できなかった。東側の壁については、被熱部分が残り、その外側には間接的に熱を受けたと思われる褐色土層が確認できた。この窓体の東側には、数cm大の礫、10数cm大の窓壁片、多量の擂鉢片からなる屑が最大50cmの厚さで堆積している。西側は数cm大の小礫を多く含む層である。

このトレンチ内において、築窓時の旧地表についても検出し窓構造を追及する計画であったが、予想外に窓壁が脆弱なことや、調査終了期限が近づいていたため、やむなく中途で埋め戻さざるをえなかつた。しかし、ここまで土層観察の知見では窓が築かれたときの床面は、限りなく旧地表に近いか、掘り廻されたとしても数10cm程度と推定された。

以上のトレンチ調査から、この窓の規模や構造がある程度判明したので、以下に所見をまとめる。標高40~45mの北向きの斜面に築かれた大窓で、ほぼ地上に構築されていたと推定される。幅は2.6m、推定全長30m以上、傾斜角15度、主軸は北北西から南南東に向いている。天井を支える土柱、出入り口は未確認である。窓の両側には、擂鉢片が9割以上を占める物原が形成されている。

第3節 遺 物

遺物の9割以上が、擂鉢である。調査はこの多量の擂鉢片の堆積からなる物原を断剝することになるので、その取り上げや出土地点の記録についてどのようにするか判断に迷う部分もあった。物原は地表面に露出しているが、窓跡の有無などが判明していない時点なので、その記録については、より困難さを伴うと思われた。そこで機械的に面で区分することとし、トレンチ1は、西(W)、中(M)、極西(FW)、極西(FFW)とし、物原については上層、下層の分類をした。トレンチ2についても同様に極東(FE)、中(M)、西(W)、極西(FW)とした。

加えてトレンチ1の西側部分、物原については分層し断面図作成後、順序に基づきサンプル的に図化可能な遺物を10点程度取り上げた。

前述のとおり、遺物の9割以上が擂鉢であるため、特徴的なもの、溶着片、擂鉢以外の器種などを中心に記述し、一部平成12年度の分布調査時の表面採取遺物も加えた。

1. トレンチ1（第52図～第63図）

301~314が西側、315~347がさらに西側、348~356がトレンチの西端、357~359がトレンチ中央部で確認された遺物で、東側部分では地表がすぐ基盤層になっているため遺物がほとんど検出されていない。305は内面が火表（炎を直接受けている）になっており、胡麻屋の窓変が観察できる。一般的に擂鉢は受け部の上下で自重をささえる重ね焼を行なうため、受け部以外の内外面は直接炎を受けない状態になる。したがってこの305は重ね焼の一層上に置かれていた個体の可能性が高い。311・319は胎土が精良で器壁が非常に薄いが、焼歪が著しい。324・325も同様であるが、324は火ぶくれが著しい。325は底部の成形も丁寧である。

317は最大胴径23.7cm、肩部に波状紋、「△」のへら記号が施された盃で、内面はろくろ目が非常に顕著である。326は内面にすり日のないこね鉢で、口径は24cm前後と通常の擂鉢よりは小振りである。

328は305と同様、内面が火表になる個体で、火ぶくれと胡麻が観察できる。332は焼成不良でやや軟質である。受け部端を横方向に強く引き出す特徴的な調整が施されている。333は23mm軸に6本の

すり目が施されているが、他の個体に比べて施工具の押圧が弱い。

339・341はともに内面が火表の個体で、339は底面が丁寧に調整されている。343は内面に2~3cm人の溶着片が付着している。受け部のみで重ね焼きができない法量上の制約があり、このような破片で、焼成後個体どうしが容易に剥離できる工夫をした可能性もある。

348は物原の最下層で確認された壺で、肩に波状紋が施されている。

352・353は受け部の下端を強くなしてたため、極端な凹面が形成されている。

2. レンチ2（第64図～第69図）

360～380までが東側、381～383が中央、384～389が西側、390～400が西端、401・402が窯内、403～405は記録不詳である。

361は内面が火表の個体。362はすり目が35mm幅に7本と幅広い上、1本1本も太い。365は口径が25.6cmと小さいうえ器壁も厚い。

366・367は小壺で、366は同じ口径ぐらいの壺の溶着片が底部に観察できる。367は胎土が精良で、胴部がやや扁平である。ろくろは時計回り。壺以外器種の可能性もある。368は壺で、底部にすり目の圧痕があることから、擂鉢の中に入れて焼成したと考えられる。

369は底部に土塊片（窯の床片？）が付着していることから、重ね焼きの際、最下部で窯床直上に置かれたものと推定される。374は内面に自然釉が大量に付着していて、一部は流れだしていることから、明らかに火表にあったことがわかる。378は内面が灰色である。

381～400までは小さい破片が多いため、口径復元の数字についてはやや精度が劣る部分がある。387は受け部下端に強いナデ調整が施されている。388は外表面が灰色。393・396・397は受け部の下から4分の1ぐらゐの所を鋭く強く押圧している。394は受け部上端部を強くつまみ出している。

401・402は窯内からの検出で、両個体とも調整がシャープではない。

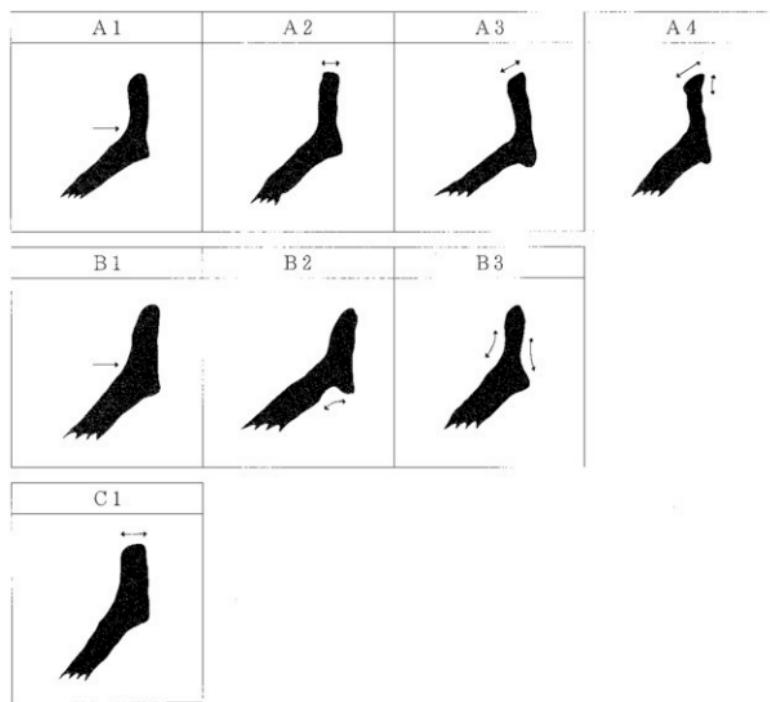
3. その他（第70図～第71図）

406～416は、レンチ1の西側物原部分で、層序に基づきサンプルとして取り上げたものである。406が2層、407～409・414・415が4層上層、410～413が4層下層、416が7層である。このサンプルについても擂鉢の型式分類との関係で後述する。

417・418は壺の表面採取資料。419はKP-1地点の窯の外側で検出した壺であるが、KP-2地点の窯の遺物の可能性が高い。どの個体も灰緑色の自然釉が付着している。417・418は玉縁状の口縁で扁平化が進んだもので、419は扁平化さらに進み、折り返し下端を強く圧着することで、段を有するものである。

第4節 擾鉢の受け部型式分類と物原サンプル

ここでは遺物の9割以上を占める擂鉢の受け部について、若干の型式分類を行い、物原の層序ごとのサンプルと比較することにより、物原の形成過程なり、陶工集団なり、なんらかの知見が得られないかと考え作業したものである。サンプルとして抽出したものは、物原上面の橙色土層（2層）1点、最大50cmの厚さで擂鉢片が堆積している物原層（4層）の上層5点（うち1点は底部のみ）、下層4



第51図 KP-2 地点薫跡擣鉢型式分類図 (1/2)

層序	型式 (型式名で1点ずつ表示)	点数
2層	A 1	1
4層上層	B 2 B 2 B 2 C A 1～B 1	5
4層下層	A 1 A 1 A 1 A 1～B 2	4
7層	B 1	1

表3 物原サンプルと型式

点、物原の最下層で陶片をあまり含まないにぶい褐色土層（7層）1点の計11点である。

前提として図化された擂鉢受け部について、若干の型式分類を試みた。その際、擂鉢は受け部で重ね焼をするため、極端に受け部が内傾したり、歪んだりする事例が多くあるため、受け部の傾きは型式分類の要素とはしなかった。もちろん中間的な型式などあり、主觀を完全に排除することはできないが、ここではあくまで予察という形でまとめてみたい。以下、簡単に各型式を記述する。

A 1 … 口縁部がほぼ均一の厚さで上方へのびるもの。

A 2 … 口縁部がほぼ均一の厚さで上方へのびるもので、上端部に水平方向に面をもつもの。

A 3 … 口縁部がほぼ均一の厚さで上方へのびるもので、上端部に斜め方向に面をもつもの。

A 4 … 口縁部がほぼ均一の厚さで上方へのびるもので、上端部に面をもち、外側へ端部をつまみ出すもの。

B 1 … 口縁部が大きく上方へ拡張し、外側も突出するが、均一の厚さではないもの。

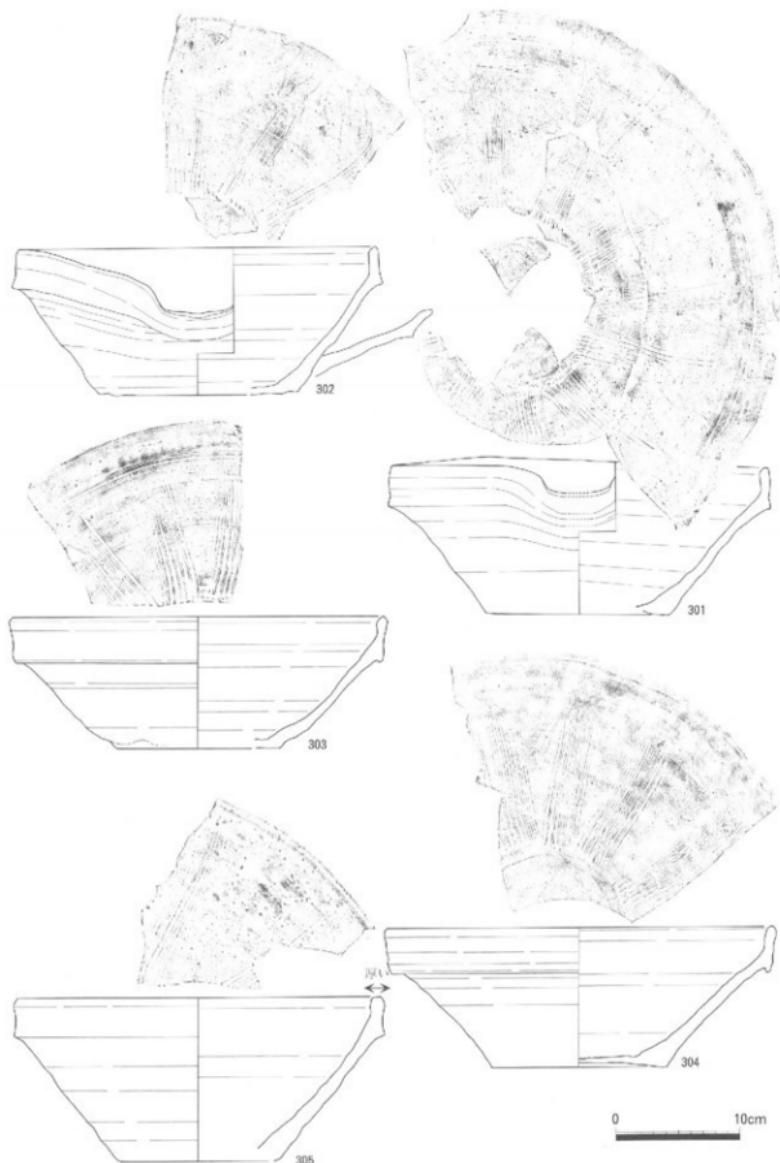
B 2 … B 1 のうち受け部下側を強く押圧することにより、下頬が突出するもの。

B 3 … B 1 のうち、受け部の下から3分1の箇所を内外面から強く押すもの。

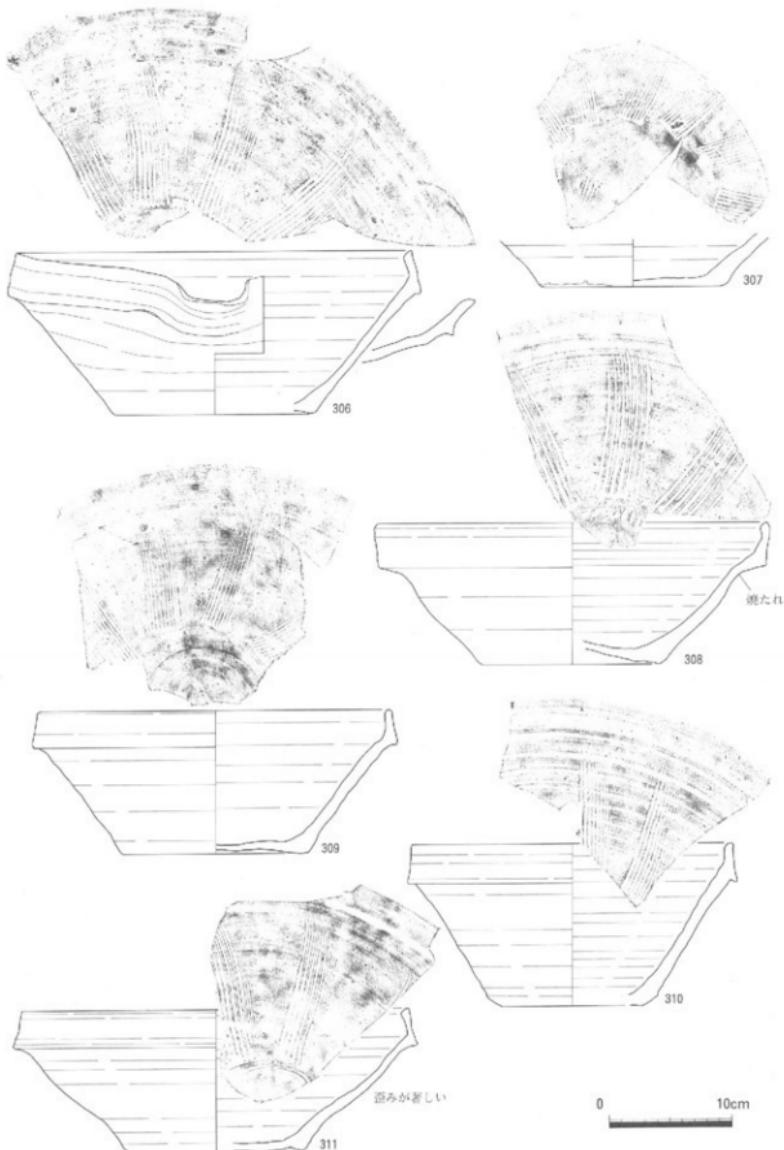
C 1 … 基本的に口縁部を上方へ拡張したものであるが、体部の厚さに比較して極端に肥厚したもの。

その結果、2層の406はA 1、4層上層の407・408はB 2、414がC、415がA 1～B 1、4層下層の410～412はすべてA 1、413はA 1～B 2、7層の416はB 1となった（表3）。4層下層にはA 1がほとんどで、4層の上層にはB 2が比較的多数をしめる。2層、7層についてはサンプル数が少なく言及できない。型式的に考えると、BからAと考えるのが妥当であるが、比較的サンプルがまとまった4層の上・下ではAからBという変化が看取できる。物原は下層のものが古く上層が新しいという前提条件からすると逆転しているわけである。ただこの場合も、片付け行為がなされていないことや、単純な型式の前後関係を必須条件としているわけである。もちろんA型式とB型式の同時並存もあり得るだろうし、最近の改変行為も考慮にいれないといけないだろう。

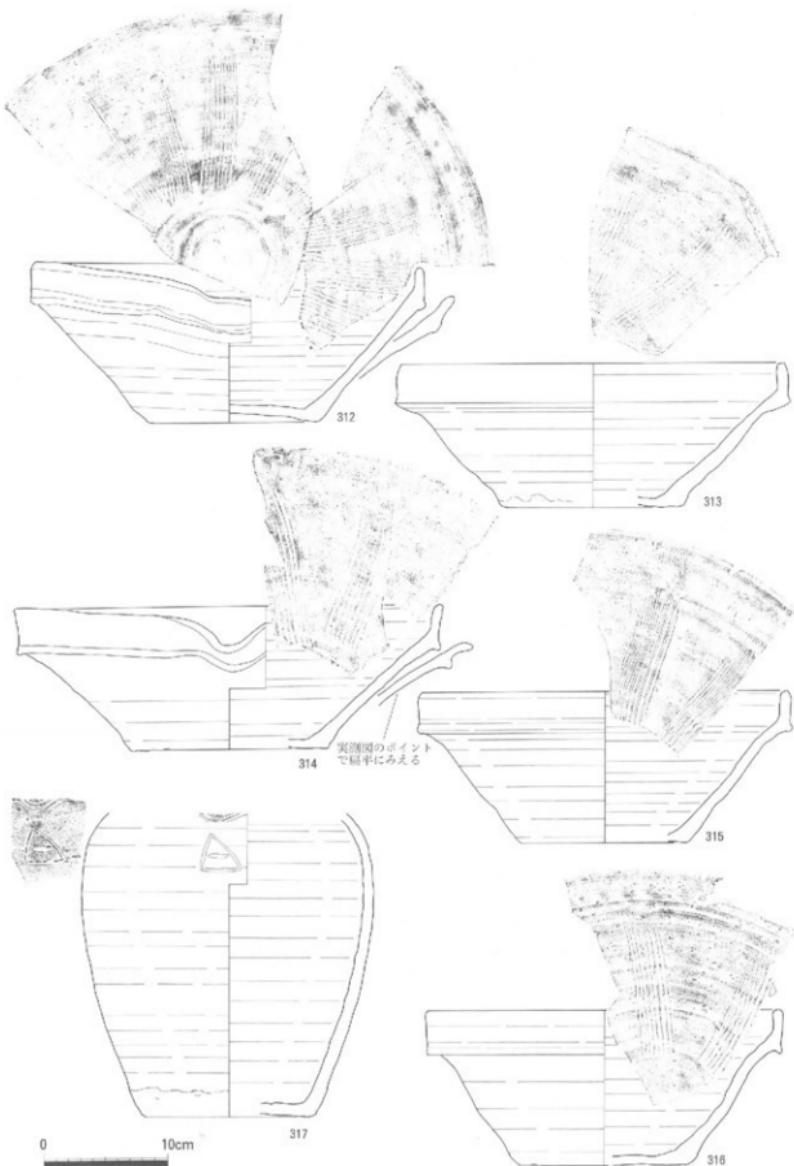
いずれにしてもこの物原層の擂鉢サンプルの分析では、物原の形成過程に知見をえることもできず、また陶工集団などについてなんにも言及できなかった。このようなごく小規模な物原では、サンプル数も少なく限界があり、もう少し規模が大きな物原の、大きな層序のなかで詳細に考える必要があることが結論であろうか。



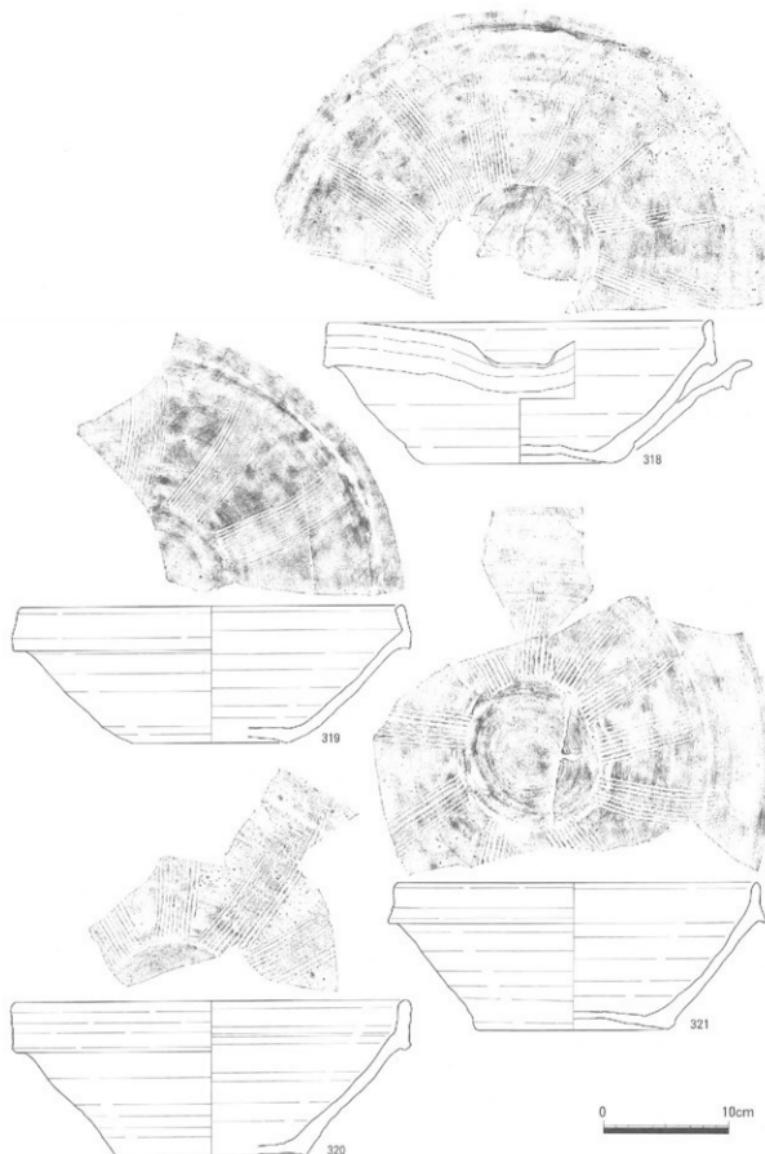
第52図 トレンチ1出土遺物1 (1/4)



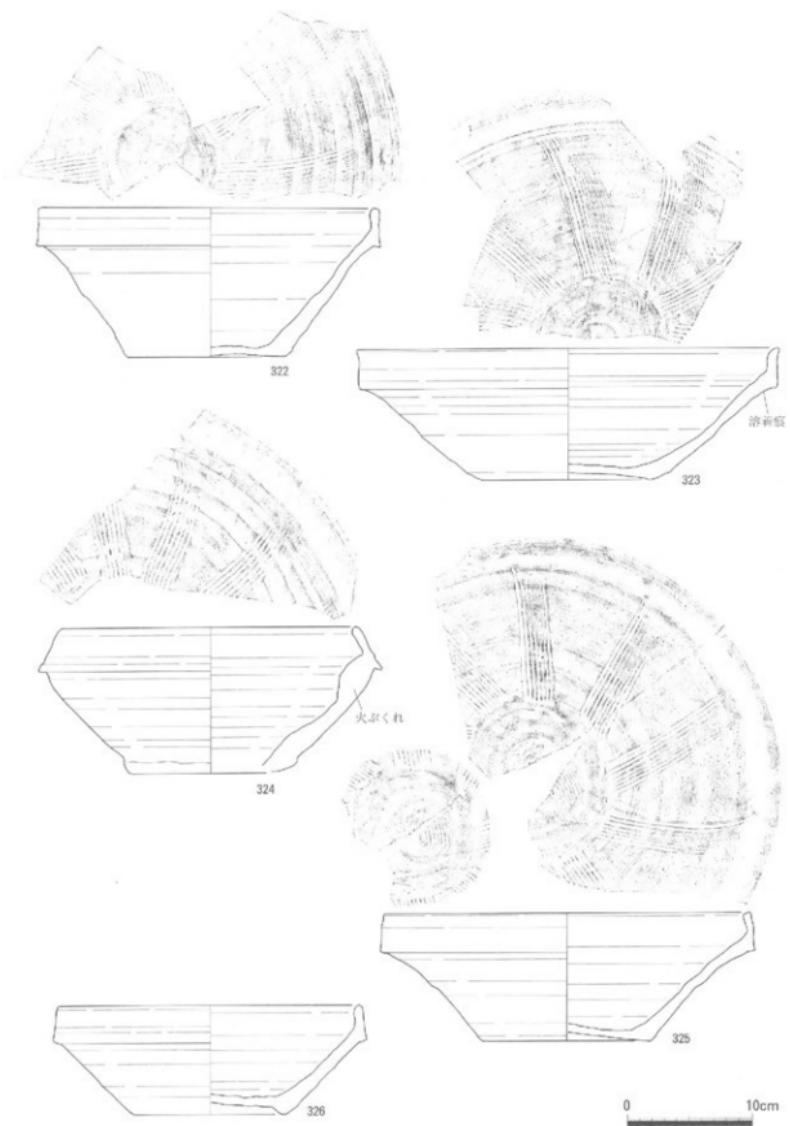
第53図 トレンチ1出土遺物2 (1/4)



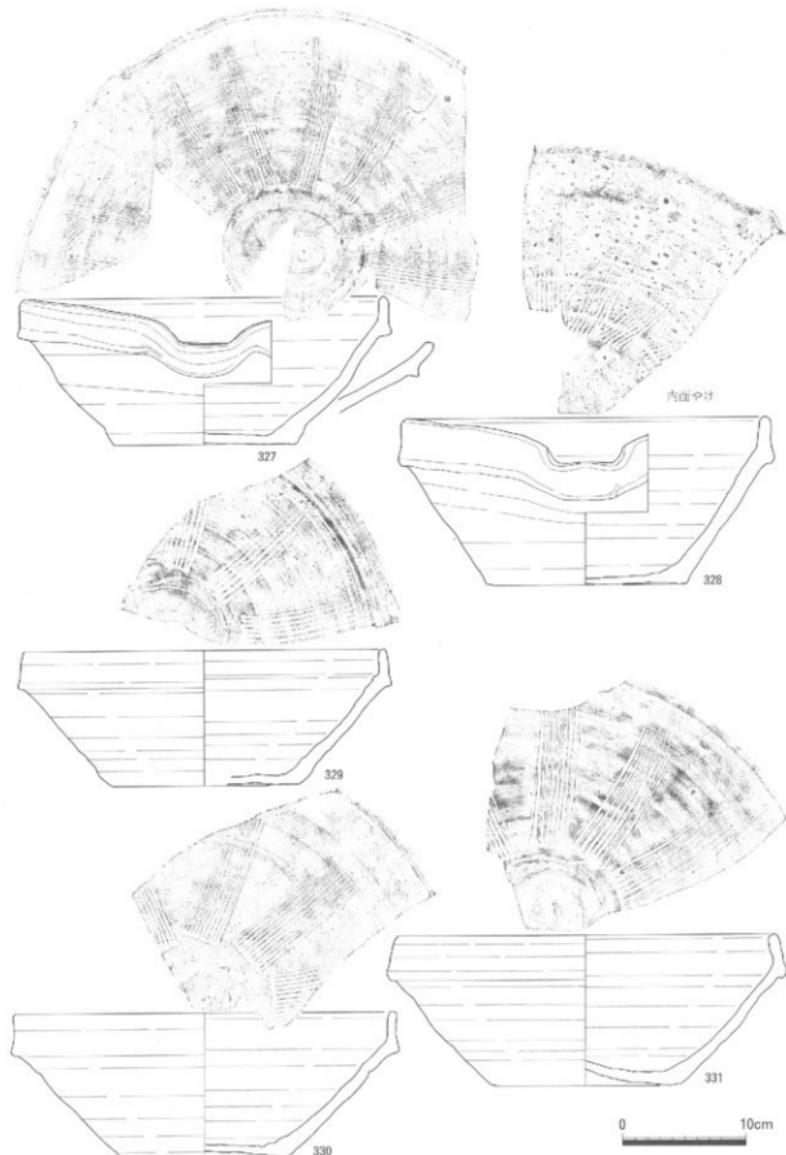
第54図 トレンチ1出土遺物3 (1/4)



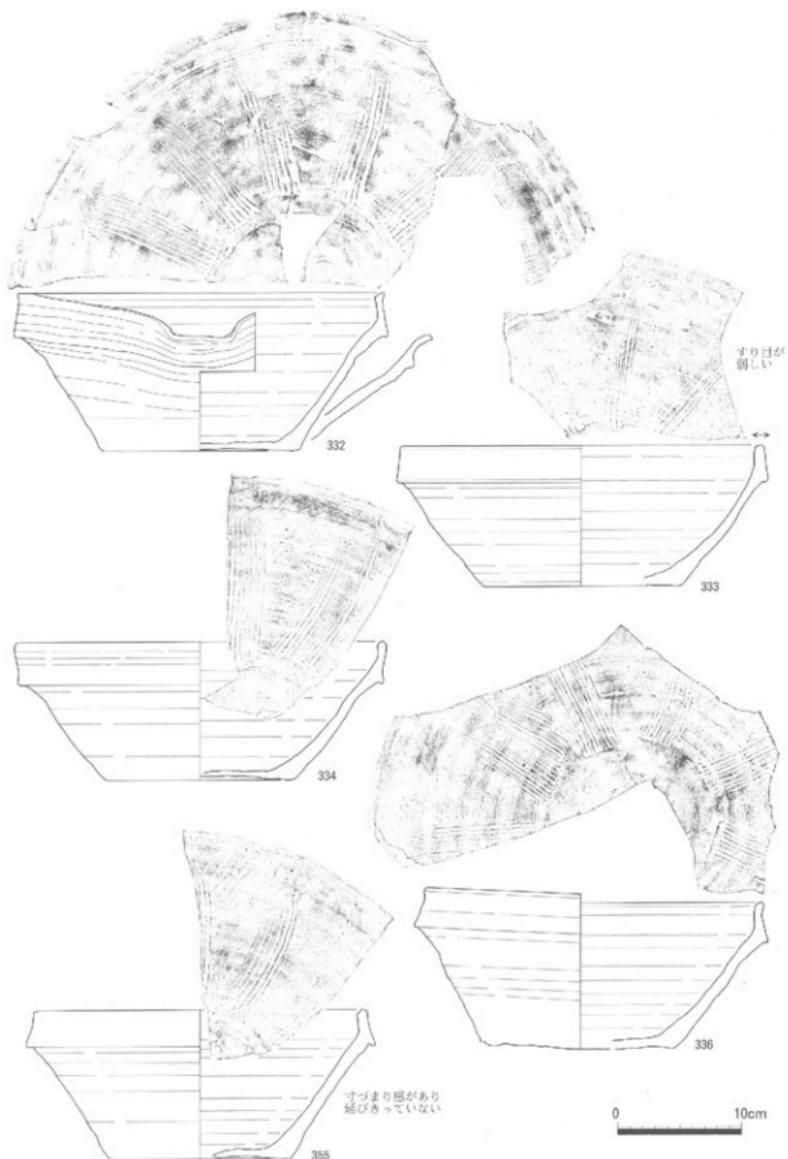
第55図 トレンチ1出土遺物4 (1/4)



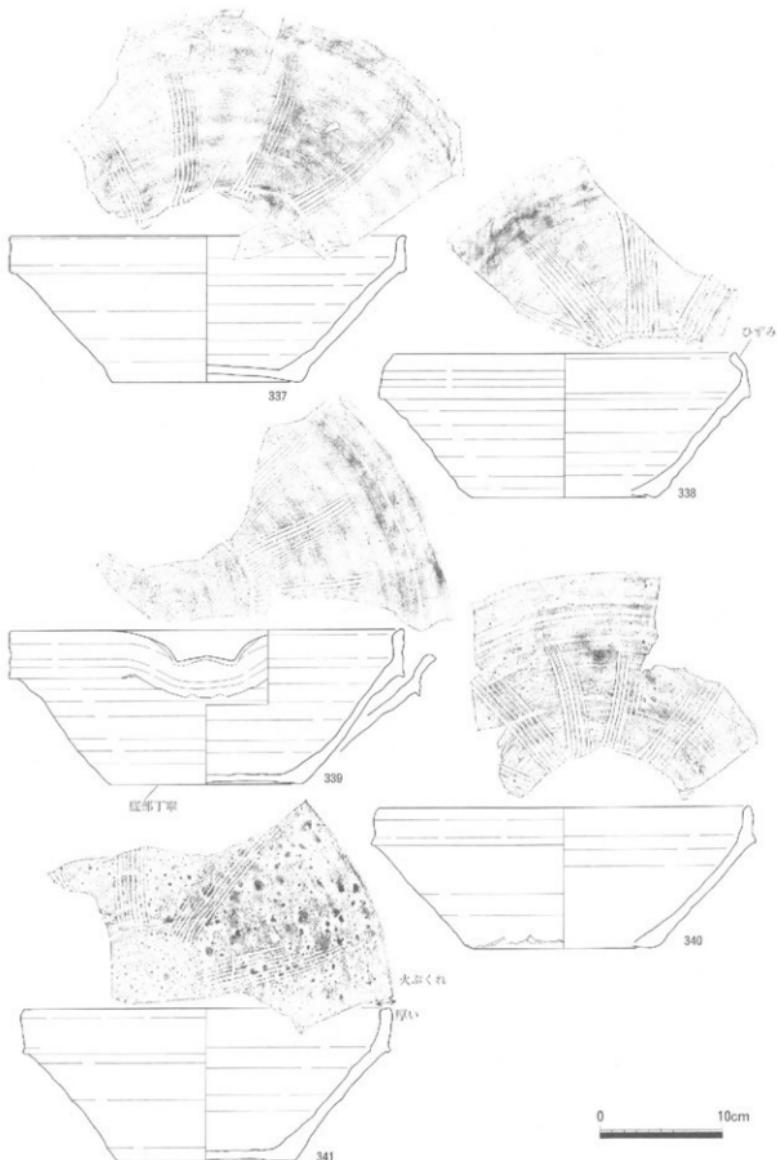
第56図 トレンチ 1出土遺物 5 (1/4)



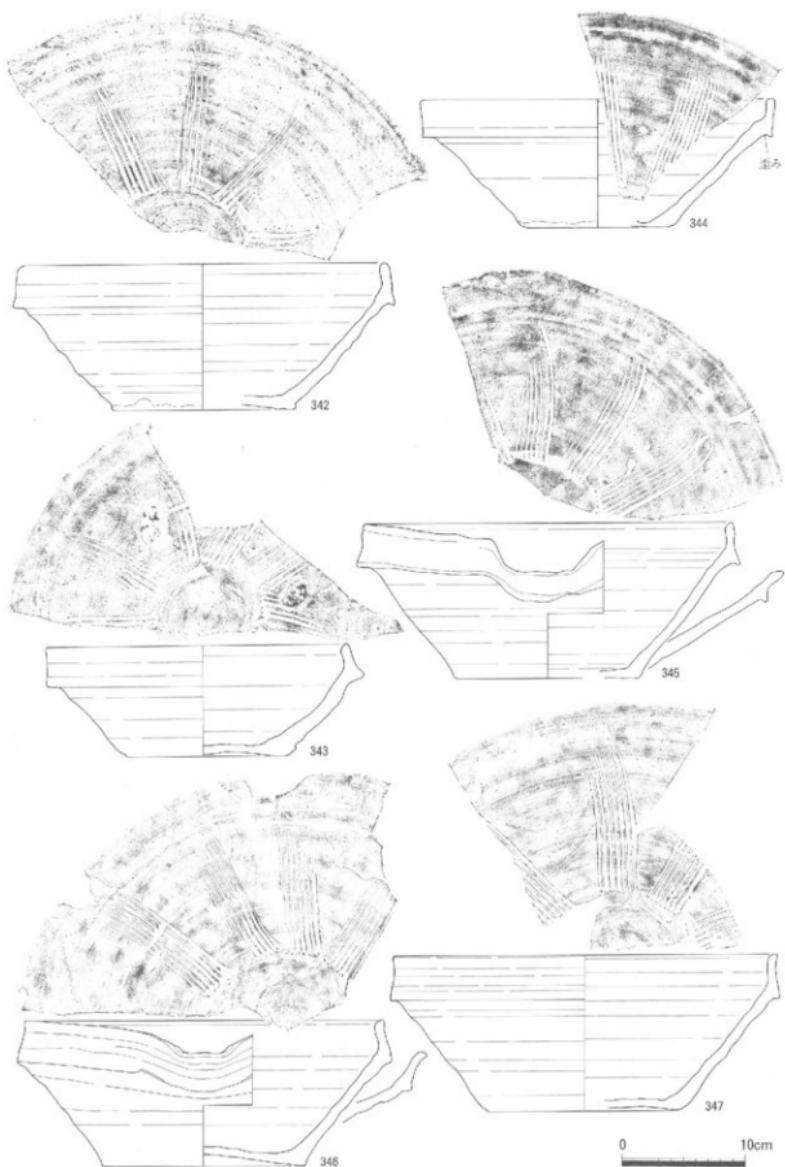
第57図 トレンチ1出土遺物6(1/4)



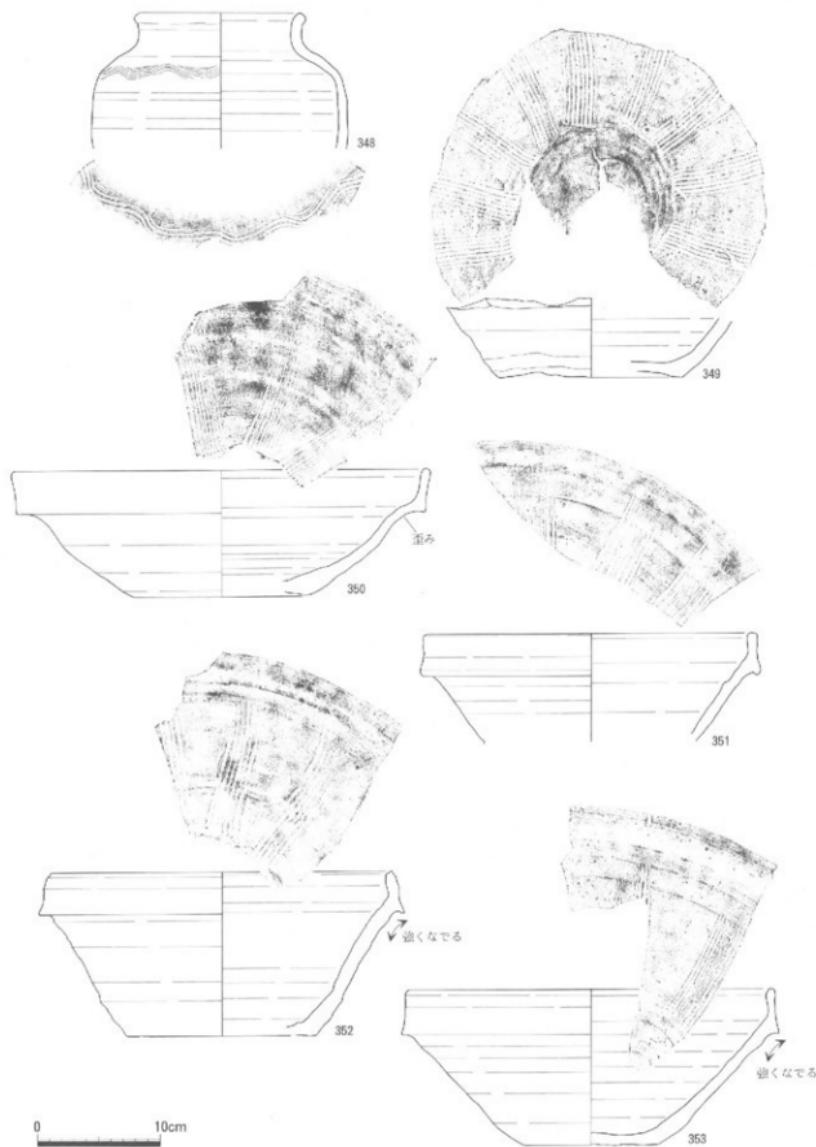
第58図 トレンチ1出土遺物7 (1/4)



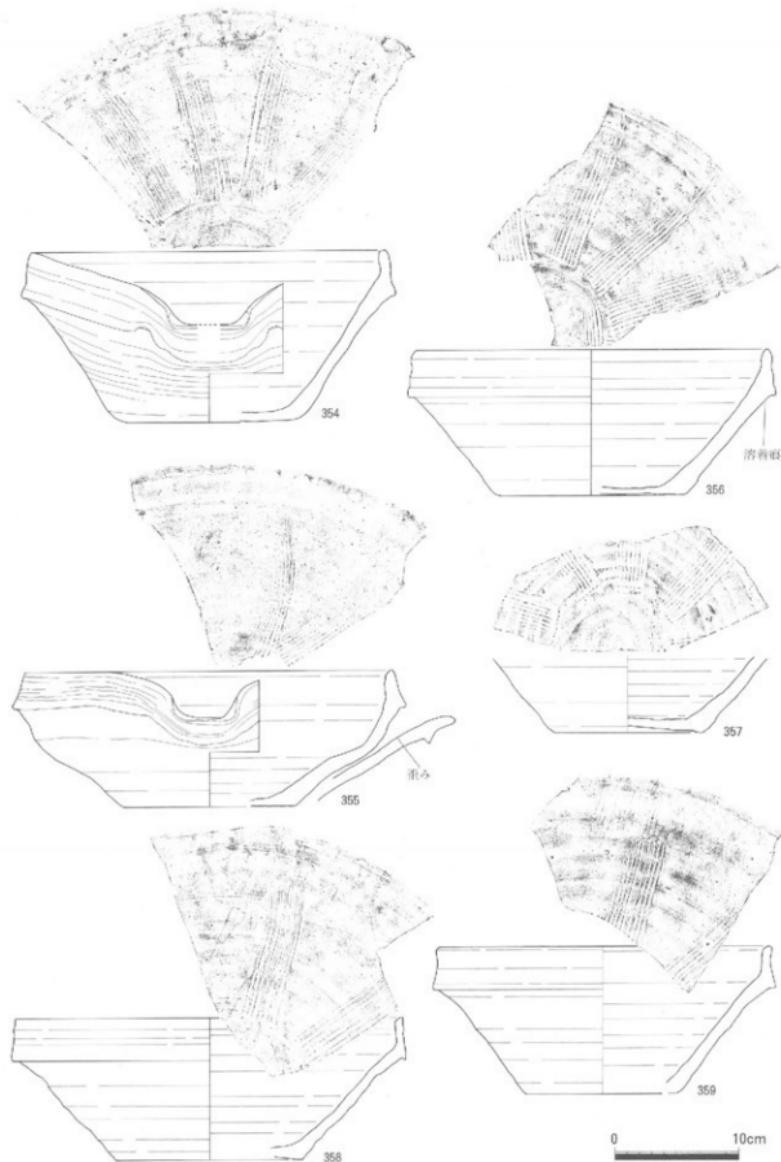
第59図 トレンチ1出土遺物8 (1/4)



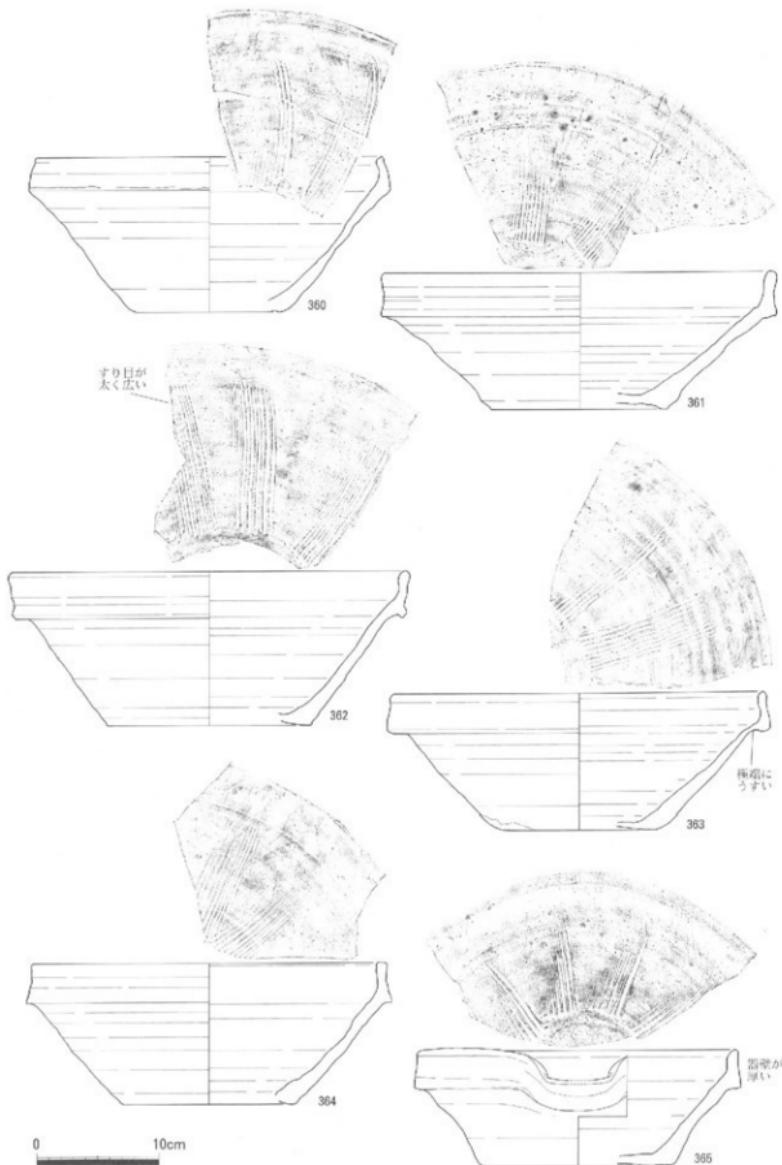
第60図 トレンチ1出土遺物9 (1/4)



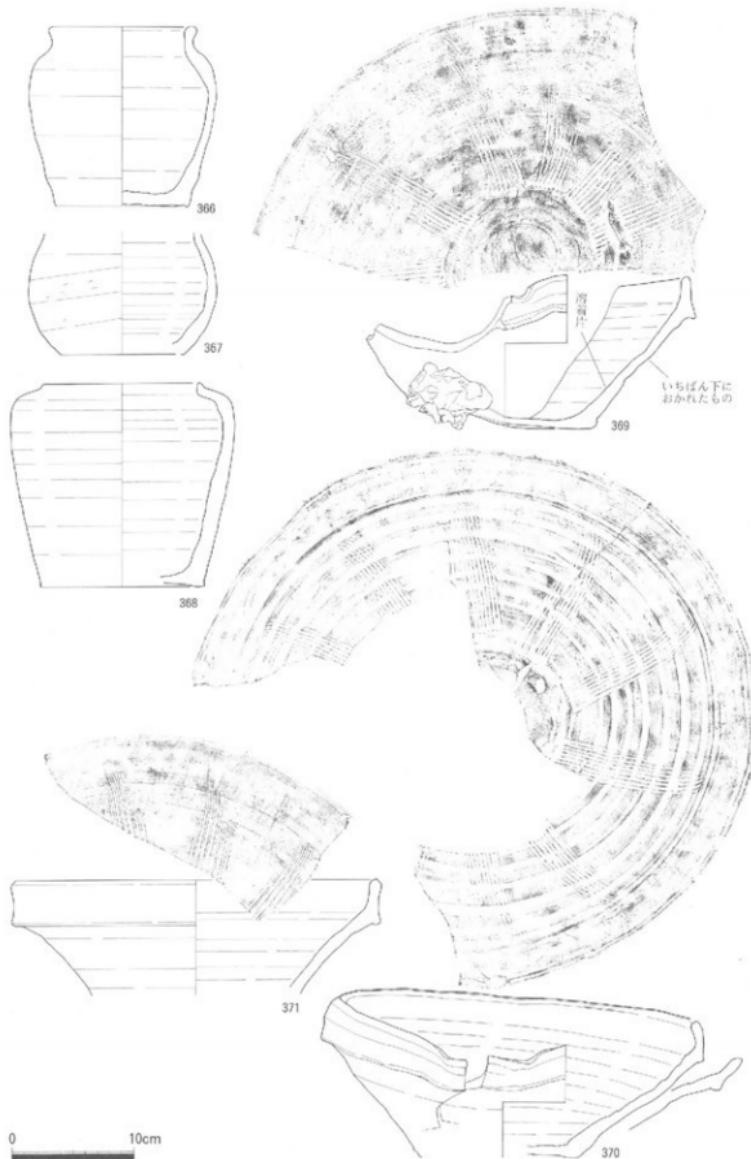
第61図 トレンチ1出土遺物10 (1/4)



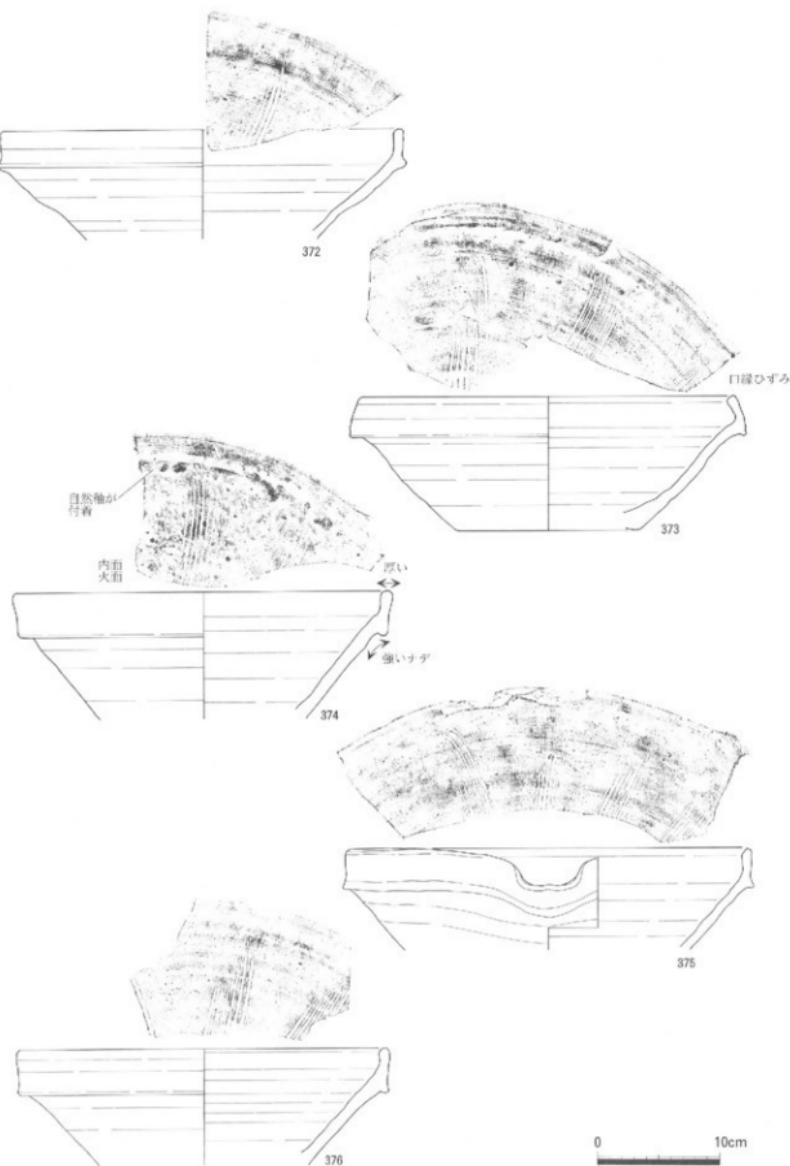
第62図 トレンチ1出土遺物11(1/4)



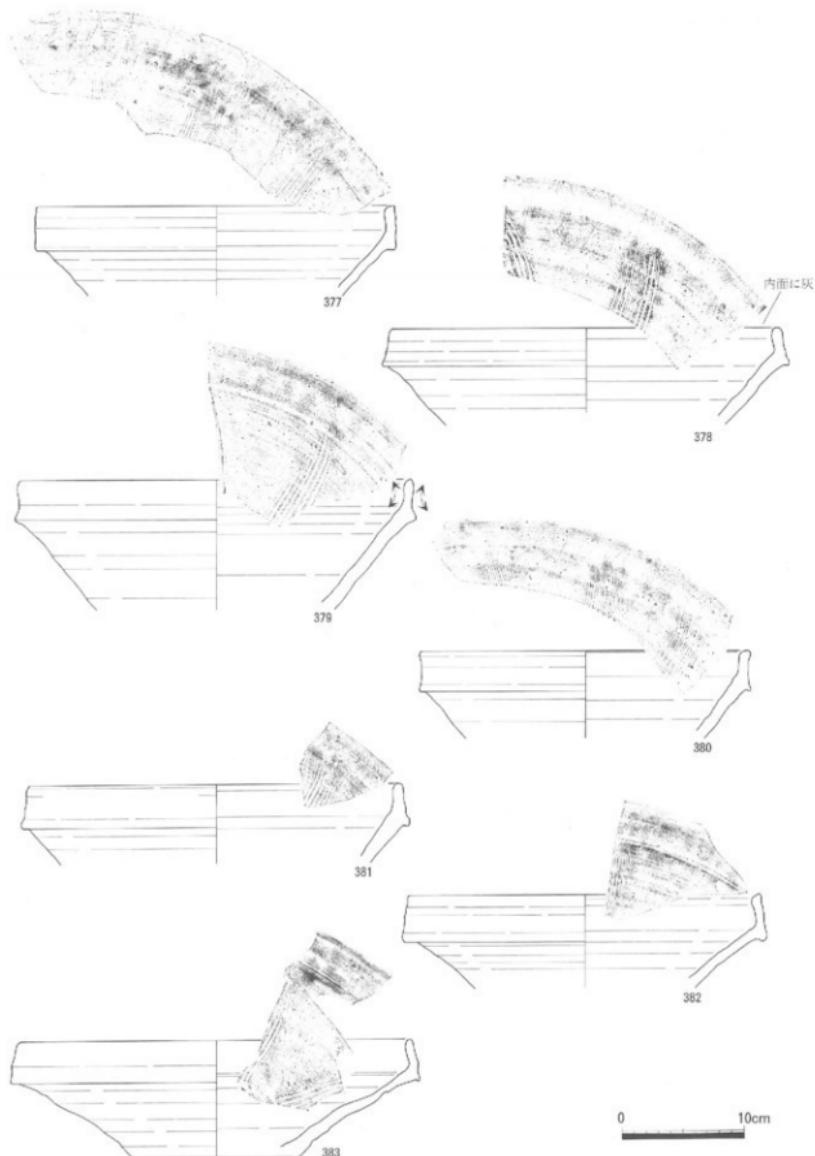
第63図 トレンチ2出土遺物1 (1/4)



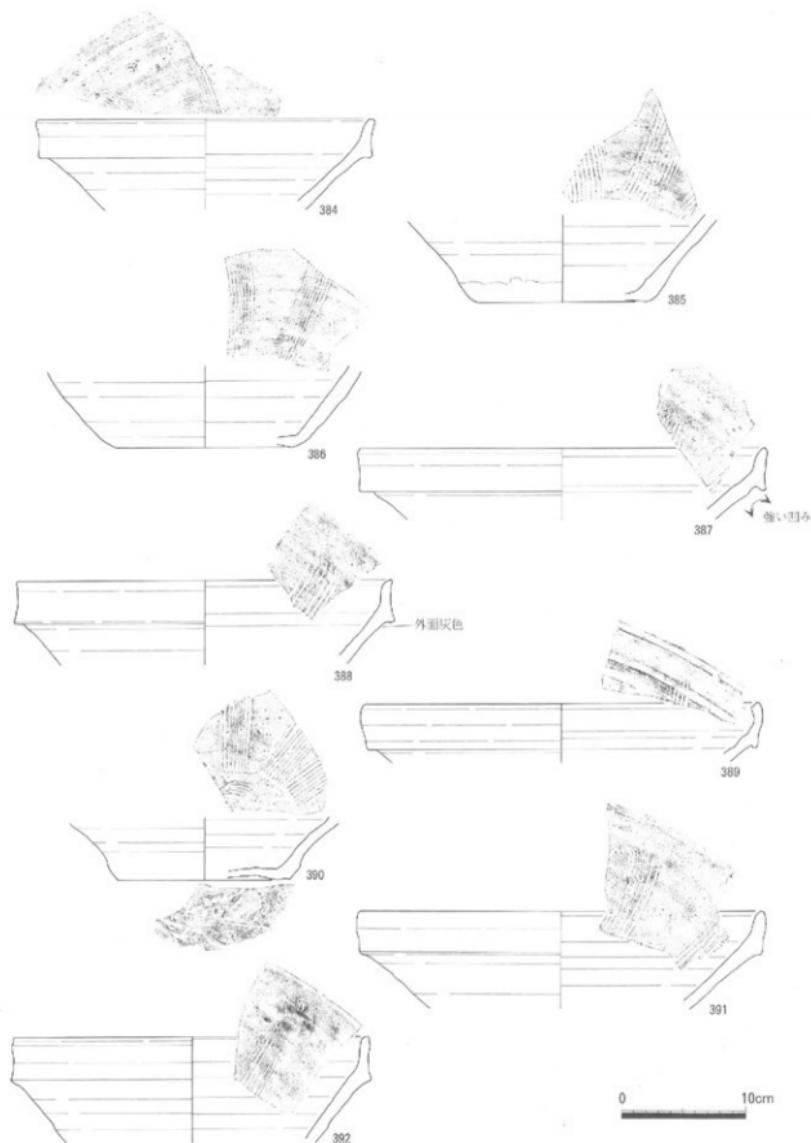
第64図 トレンチ2出土遺物2 (1/4)



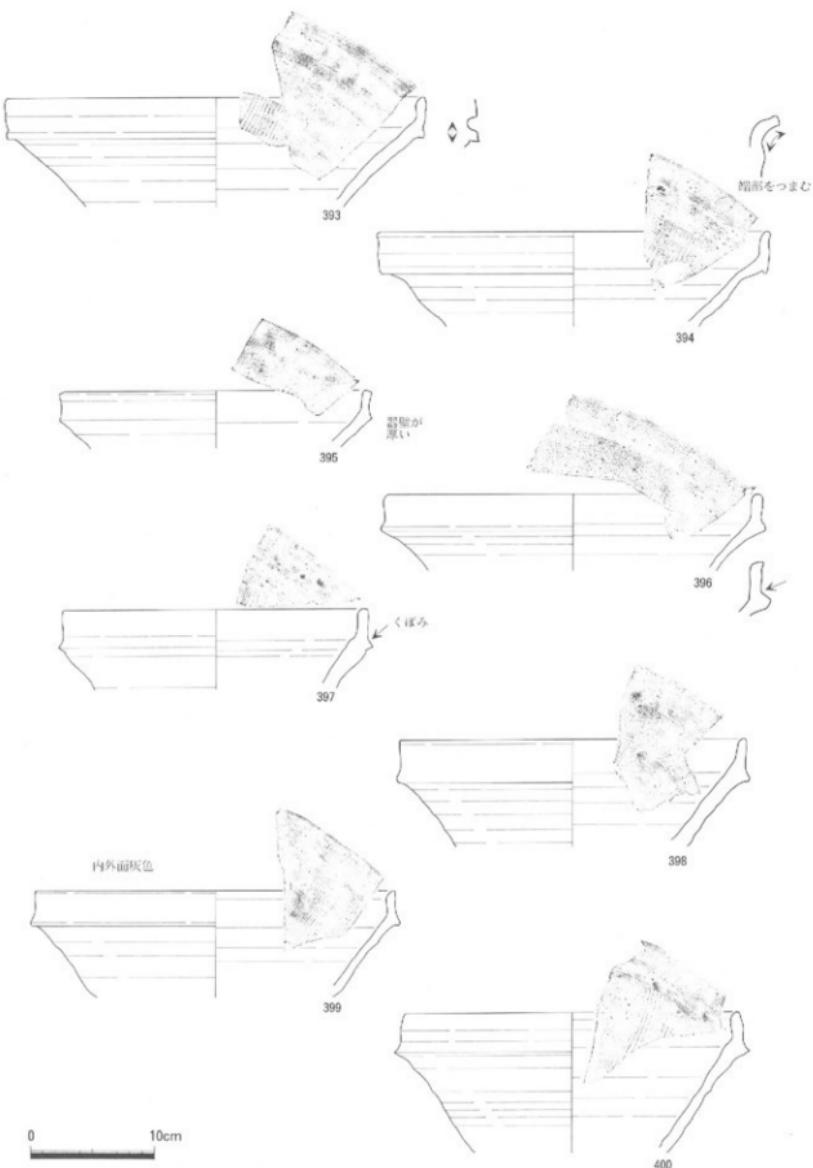
第65図 トレンチ2出土遺物3 (1/4)



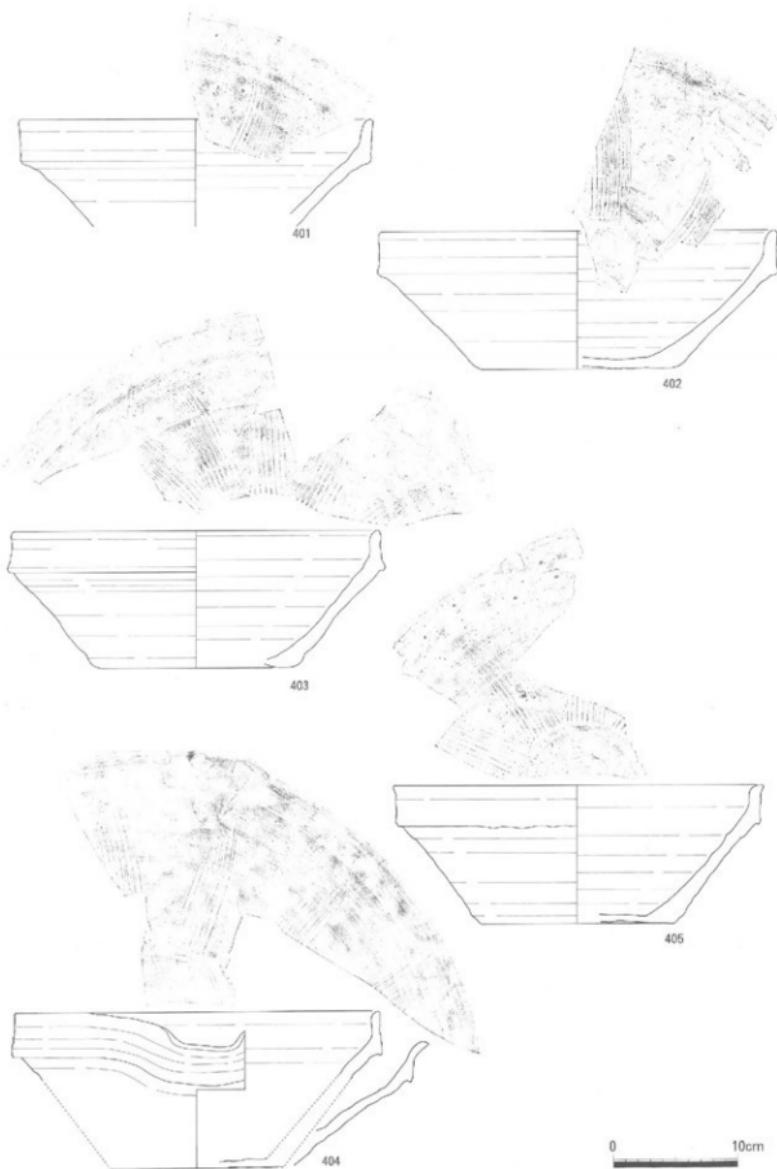
第66図 トレンチ2出土遺物4 (1/4)



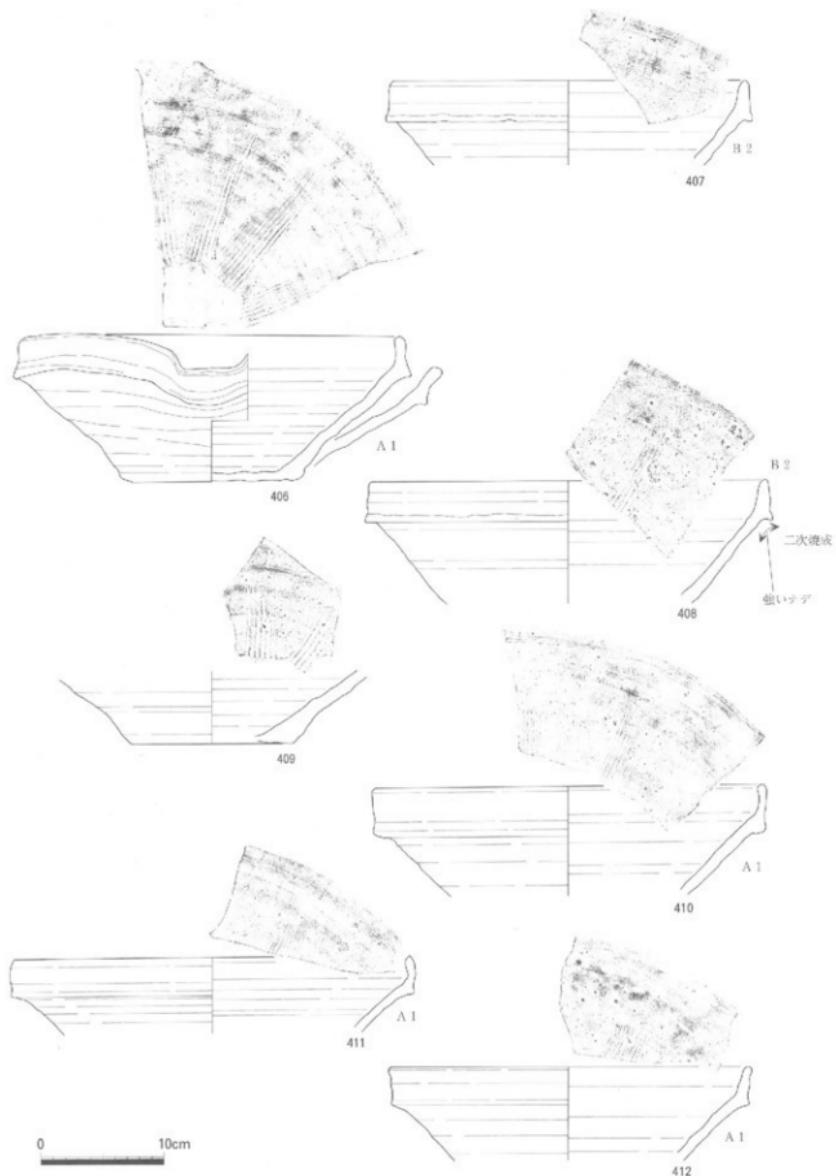
第67図 トレンチ2出土遺物5 (1/4)



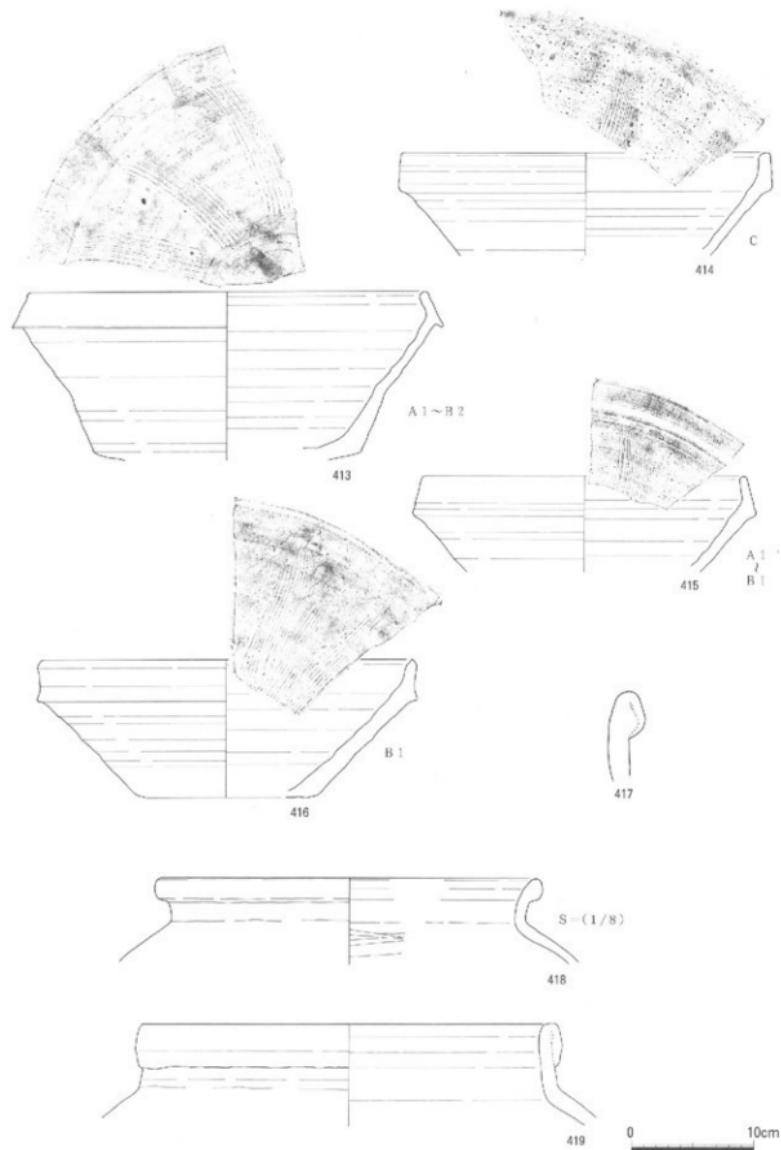
第68図 トレンチ2出土遺物6 (1/4)



第69図 トレンチ2出土遺物7 (1/4)



第70図 物原出土遺物（サンプル）1 (1/4)



第71図 物原出土遺物（サンプル）2・表探資料遺物（1/4）（418のみ1/8）

表様資料（第71回）

番号	品種	生産地	生産年	出荷量 t/a	輸入量 t/a	通商課	販路	特徴	特徴、沿革	成文化	文化、歴史、歴象	特徴	参考
41. A付	「60」PNA-ホウ	C1996	-	6.00	-	通商課	日本	「60」PNA-ホウは、主として、 「60」PNA-ホウの生産地 である、中国の四川省で生産 される。	「60」PNA-ホウは、主として、 「60」PNA-ホウの生産地 である、中国の四川省で生産 される。	成文化	文化、歴史、歴象	特徴	中国の四川省で生産される。
42. A付	「61」PNA-ホウ	C1996	C1996	1.50	-	通商課	日本	「61」PNA-ホウは、主として、 「61」PNA-ホウの生産地 である、中国の四川省で生産 される。	「61」PNA-ホウは、主として、 「61」PNA-ホウの生産地 である、中国の四川省で生産 される。	成文化	文化、歴史、歴象	特徴	中国の四川省で生産される。
43. B付	「62」PNA-ホウ	C1996	C1996	1.50	-	通商課	日本	「62」PNA-ホウは、主として、 「62」PNA-ホウの生産地 である、中国の四川省で生産 される。	「62」PNA-ホウは、主として、 「62」PNA-ホウの生産地 である、中国の四川省で生産 される。	成文化	文化、歴史、歴象	特徴	中国の四川省で生産される。

表4 KP-2地点出土遺物観察表(5)

第6章 まとめ

第1節 はじめに

この章では、今回報告した3基の窯について、その操業期間、窯構造の特徴について記述することを目的とする。また、2003年度に報告した5基の窯とあわせて、備前焼の窯構造の変遷について言及し、その生産についてその状況を明らかにすることである。

発掘された窯の操業期間を明らかにするためには、出土遺物を型式分類する基礎的作業を前提として、実年代がわかる紀年銘資料や文献自然科学的年代測定などから導き出すのが通常の方法である。

東6号窯跡、K P-2地点窯跡の擂鉢については基礎的な型式分類を行なったが、細部や消費地での状況についてさらに検討を加えていく必要があるため、型式分類・編年については、間壁忠彦氏・間壁貞子氏の長年の成果（註1）、伊藤晃氏（註2）、平井泰男氏（註3）、乗岡実氏（註4）、重根弘和氏（註5）の編年案に依拠することとし、型式名を記述する際は併記する形をとった。

第2節 東6号窯跡の操業期間と窯構造について

1. 操業期間

東6号窯の操業期間であるが、備前内での同時期の窯の状況が不明確であることや、本窯で生産された製品がどこに供給されたか追及していない時点での言及には相当の躊躇を覚えるが、福田正継氏、山本悦世氏、武田恭彰氏、中世土器研究会など多くの先駆的研究の成果（註6・7・8）や兵庫県の調査事例（註9・10）など参照しつつ少しまとめてみたい。

杯B類については、3型式ぐらいある。全体的に非常に堅緻に焼き締められた個体が目立ち、中には自然釉がかかり、光沢をもつものまである。杯B類の蓋はつまみを有する個体はない。杯A類は口径が11～13cmの法量の中で収まる。底部は押圧されている。他の器種については、個体数が少ない上、全体の器形を復元できるものは少ない。以上から、東6号窯跡の操業年代は、おおむね9世紀の後半を中心とする時期と考えてはよいのではないだろうか。

これらの所見はあくまで暫定的なものであり、土師器製作技術と須恵器製作技術の問題や、佐山地区に展開する須恵器窯跡群との関係など検討していかなければいけない問題が多々あり、事実報告のみのまとめには躊躇を覚える。今後それらの検討課題とともに、深化させていけたらと考えている。

2. 構造

東6号窯跡は概要のところで記述したとおり、標高66～68mの北向きに開けた谷急斜面に位置し、流紋岩系の岩の上に形成された明黄褐色上層を掘り込んでつくられた地下式の窯である。窯体は復元全長4.3m（水平3.8m）、最大幅は1.0mで、奥に行くほど幅が狭まる平面形をもつ。床面は粘土で被覆しており、ほぼ30度で直線的に立上る。主軸は焚口側からいと、北西から南東方向である。

この期の窯構造については、中国・四国地方の窯を集成された池澤俊幸氏（註11）の研究があり、

ここでは池澤氏の分類にあてはめてみたい。

東6号窯跡は、

- ①「地下式」構造で、上方へ立上る煙道を有する△型
- ②平面プランは焼成部付近から窯尻へ向かってすばまるタイプ
- ③床面の縦段面形は直線的に立上り最大傾斜が30度を越えない2類
- ④窯尻形態は焼成部木尾からそのまま地山につながるb類となる。

以上であるが、池澤氏も、「古代後期以降の山陽中～東部では、(中略) 中国地方東部では資料が十分ではなく中世諸窯の成立に至る仮定が重要な課題」(註12) と言及しているとおり、東6号窯跡の窯構造の系譜については、今後資料的な増加を待つ中で、改めて追求していきたい。

この東6号窯は、伊部の谷において初めて確認された9世紀代の窯であったため備前焼の初源の問題と絡めて話題となつたが、同時期の窯跡が発見されてない現段階においては、12世紀後半以降の連續とした備前焼の生産とは区別すべきものであることは確認しておきたい。

第3節 KP-1 地点窯跡の操業期間と窯構造について

1. 操業期間

KP-1 地点窯跡の操業期間は天保11（1840）年から明治18～19年頃（1885～1886）年ごろの可能性が高い。

その根拠は、確認された遺構が、操業期間が明らかな『天保窯』（備前市指定建造物として現存）や平成12年度の調査で確認された西1号窯跡と酷似していることで、火格子（素穴）の部分の土柱は規格こそ異なるが構造は全く同じである。前回の報告でも記述したが、この天保窯は当時「融通窯」と呼ばれていて、近世末の備前を代表する窯である。当時の備前の窯業は疲弊していて、大量の燃料と長い焼成日数がかかる巨大な「大窯」を維持する力もなくなりつつあり、燃料の節約と焼成日数の短縮が可能なこの形式の窯を導入したらしい。

次の文献も前回報告したとおりであるが再度掲載する。

江戸時代末の著名な知識人として知られる木村平八郎泰武が嘉永2（1849）年著した問答集『五問五頭古伊部神伝録』(註13) に「近くは天保三辰年より小窯三か所築く、北不老山下に一カ所、南樅原山下に二カ所、竈数大小當時六釜是あり」と記述がある。北不老山下の一カ所は先述の市指定建造物の「天保窯」で、南樅原山下に2カ所のうちひとつが、平成12年度調査の西1号窯跡である。もうひとつがこのKP-1 地点窯跡である。

『古伊部神伝録』では築窯が天保3（1832）年とあるが、江戸後期に伊部で窯元、医師、文人、村方を代表する人物として多方面に渡って活躍した佐藤陶崖が、天保11（1840）年付けで記した『融通講規定控』(註14) の中に「藩から銀32貫を借用し、新たに2基の窯を築いた」との記述があり、藩からした借金で計6基の窯を「講」組織で運営したことがわかり、天保11年築窯の蓋然性が高いと判断した。その詳細については附編2の小西通雄氏の報文を参照されたい。

廃窯時期については、大正7（1918）年刊行の小橋漢三衛著「伊部陶史」(註15) に「其の樅原山の下に設けた窯は、明治八年頃に之を毀ち・・・」とあり、また桂又一郎は「其の後樅原山の南人窯

の附近へ二基築窯したが之れは藩の許可が未だ出ない中に焼き問題をおこしてゐるうち、初窯が失敗したため遂に間もなく取り壊した」(註16) という違う見解をしめしている。

しかし、窯内から「大日本伊部陶」という陶印をもつ甕が多数出土していて、それは明治18~19年ごろ事業にゆきずった「陶器改撰所」(註17) とういう会社のものであることが判明した。

以上から KP-1 地点窯跡の操業期間は、天保11(1840) 年から明治18~19年頃(1885~1886) 年ごろと推定される。

2. 構造

KP-1 地点窯跡の構造については遺構の章で詳細に記述したが、再度ここでとりまとめてみたい。

規模は全長が水平距離で約18.6m、斜距離で約19.1m、房の幅は最大で約4.5mある。煙出し部を除く燃焼室、焼成室の内寸は18.1m、斜距離で18.5mである。勾配は燃焼部が12°、焼成部が16°、煙出部が4°~11°、平均13°あり、主軸は南南東から北北西に向いている。最下段は平面形で逆三角形の燃焼室(初戸)があり、これに6つの焼成室(房・部屋)が続き、第6番目の焼成室の後ろは「煙道」と呼ばれる房がつく。その後面は簡易な構造の煙出しになっている。

12年度調査の西1号窯跡と大きく異なる点は、築窯時の構造がよく残る西1号窯跡に対して、本窯は相当改修が加えられている点である。特に5房から6房にかけては、本来の円柱で隔壁を支えていたものを、6本すべて角柱に替えたうえ、床も貼り替えている。この改修により、床面の傾斜角が6房付近で11°、煙道付近で4°とほとんど傾斜をもたなくなっている。

傾斜角の面では、西1号窯跡で初戸と1房の変化が28°から17°から急変しているが、KP-2 地点窯跡ではその部分が12°からと16°と逆に緩くなっている。西1号窯跡の平均勾配は17°、KP-1 地点窯跡は13°で、全体から見てもKP-1 地点窯跡は傾斜が緩く築窯されたうえに、さらに煙道部分も緩く改修している。この設計や改修の意図がどこにあるかは不明であるが、窯の西側に形成された相当量の物原からしても、相当回数焼成されていたと推測できるし、推定された操業期間とも大きく異なるものでもない。

この窯の構造は無段斜狭間と呼ばれるもので、年代地域は若干異なるが大阪市福島区の常島窯跡1号窯など(註18) にその例をみることができる。近年、京焼を中心にして、窯構造などを含む技術の伝播について研究の進展がみられ(註19)、「近世の窯業技術は、肥前系の技術と瀬戸・美濃の技術を基礎とした関西系の技術でほぼ大別できる」(註20) との指摘がなされている。

このような技術伝播の流れの中で、あらためて KP-1 地点窯跡や西1号窯跡の構造などを比較すると、窯道具である屏鉢のみを積上げる窯詰めの仕方や、極論すれば大窯に仕切りをしただけの窯構造は、肥前系・関西系の区分で考えるには違和感があり、逆に備前の独自性、保守性といった側面が強く見える。

しかし、前述の佐藤陶崖が「私シ丁大の小釜」(西1号窯跡やKP-1 地点窯跡) が「大釜」に比較して経済的で、窯方の衰えを救うためにいかに必要か説いた「陶器忌瓶小釜焼惑問」(註21) という文献があり、その記述から陶崖が京阪の各地で見廻した連房の窯を備前に導入した可能性が高いことが指摘されている。

また、伊部から直線で東へ7kmほど離れた閑谷という所では、貞享3(1686) 年ごろから宝永7(1710) 年ごろにかけて、「閑谷焼窯」(註22) と呼ばれる連房式の「御用窯」(註23) が操業していて

いる。「天保窯」(西1号窯跡・KP-1地点窯跡)の創業の約150年も前に既に「連房式の窯」が伊部にはほど近い地域に「藩」の主導とはいいながら導入された事実があるが、京焼の技術者がきて指導したという伝承もある。ただこの「閑谷燒窯」の技術的な系譜は備前の中では途切れることになる。

以上から現時点までの知見ではあるが、西1号窯跡やKP-1地点窯跡などのいわゆる天保窯は、中世から段階的に巨大化した大窯からの発展型ないしは退化型ととらえられ、備前焼の中で自的に発展した側面が強いが、関西系の技術を取り入れられている。それは陶工が直接備前の地で指導したのではなく、窯組の指導者が関西にて見聞した知見を従来からある備前の窯に応用した結果と推定できる。

第4節 KP-2地点窯跡の操業期間と構造について

1. 操業期間

KP-2地点窯跡の操業時期について検討してみたい。出土遺物の中に実年代を直接示す年銘資料はない。ここでは山上遺物の多数をしめる擂鉢について、先学の編年依拠し、相対的年代について記述してみたい。

擂鉢の大部分は、問壁編年IV-B期、乗岡編年中世5期b、重根編年IVB-3期におさまる。口縁部が均一な厚さで上方に立ち上り、端部がまるくおさまる個体が大部分である。中には端部で、内向きに平たい面をもつものがあり、これは重根編年V期に相当する片口団地窯跡(新)に多く見られる型式である。V期は16世紀の前半期が考えられていることから、KP-2地点窯跡は15世紀の第IV四半期を中心とした時期の操業と考えられる。操業期間については、物原の遺物量から相当な期間が想定されるが、窯の床の貼り替え回数などの追求ができるないので、詳述することはできない。

2. 構造など

KP-2地点窯跡は、前述のとおり標高40~45mの北向きの斜面に築かれた大窯で、ほぼ地上に構築されていたと推定される。幅は2.6m、推定全長30m以上、傾斜角15度、主軸は北北西から南南東に向いている。天井を支える土柱、出入り口は未確認である。窯の両側には、擂鉢片が9割以上を占める物原が形成されている。

操業期間の項でも記述したとおり、KP-2地点窯跡に続く窯跡は片口団地窯跡(新)であるが、緊急時の立会い調査で窯体は未確認のため比較はできない。本窯跡に先行し15世紀の中ごろを中心操業していた不老山東口窯跡は、推定全長が40m以上、幅が3.2~3.4m、傾斜角度が15~20度で、標高40m前後の丘陵端部に位置する長大な窯窓である。立地や規模、窯断面など近似していて、一連の変遷の中でとらえられるものである。

不老山東口窯跡の出土遺物は現在備前市教育委員会に保管されているが、その数量はテンバコにして千数百箱にも及ぶ。その大部分が「備前擂鉢投げても割れん」と謡にある擂鉢の破片で、KP-2地点窯跡の様子と似ている。また片口団地窯跡(新)の出土遺物の多くは擂鉢であることから、「15世紀はまさに擂鉢の時代」といえるのではないだろうか。

第5節 総括

以上みてきたように、本報告は伊部南大窯跡周辺で確認された9世紀代の窯、15世紀末の窯、天保年間から明治はじめ頃にかけての窯、合計3基の発掘調査報告である。南大窯跡周辺の確認調査は平成11年度からを行い、本報告の3基を含めて合計8基の窯が確認されている。平成11年度からの調査では、平安時代末ごろ、鎌倉時代前半、安土桃山時代、江戸時代初め、江戸時代末ごろの合計5基の窯が確認され、その調査成果については「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ」として平成15年度に刊行している。

「伊部南大窯跡」は、西大窯跡、北大窯跡とともに近世の備前焼を代表する人窯で、近世の備前焼の生産体制を考えるうえで重要な遺跡であることはいうまでもない。しかし南大窯を含めて3箇所の窯場に集約するまでには、その周辺において備前焼が連続と生産されてきた歴史がある。その流れは、I・IIの報告書の中で詳細に記述したとおりであるが、ここであらためてまとめると以下のとおりになる。

- ①伊部の谷において9世紀代の小規模な窯が確認された。備前焼の初源の問題と絡めて話題となつたが、12世紀後半以降の連綿とした伊部の谷での生産とは区別すべきものであること。ただその意味については本報告書では未消化のままである。
- ②15世紀末の窯が確認され、「15世紀が擂鉢の時代」であったこと。
- ③16世紀後半、17世紀初頭の窯を確認することができ、いわゆる「桃山」とよばれる時代の生産状況があきらかになりつつあること。
- ④天保窯（融通窯）を文献資料どおりあらたに2基確認できたこと。
- ⑤4年間にわたる調査で新たに8基の窯の知見を得ることができ、備前焼の生産年期や窯構造の変化について言及できること。

このようにまとめると多くのことが判明したようであるが、また逆に多くの課題があることが見えてきた。初源の問題は、佐山地区の窯跡群の展開をおさえながら検討していく必要があるし、またこれだけの数量の窯跡を掘りながら、近世以降の壺・甕・擂鉢以外の編年が提示できていないこと、中世段階ではどのような陶工集団によって生産されていたかなど、いくらでもあげることができる。

平成17年10月、文化庁の国庫補助事業として伊部南大窯跡内にある3基の巨大な窯のトレンチ調査を実施した。前述のとおり周辺部の状況は判明したが、史跡地内については未調査であったため、将来的な史跡整備を見据えながら計画したものである。調査は平成18年度にも継続するが、17年度の調査ではさまざまな新知見を得ることができた。膨大な陶片は現在整理中であるが、これらの周辺窯跡群の調査成果を踏まえながら、諸問題を深化させていくことができるかもしれない。

【註】

- (1) 間壁忠彦・間壁俊子「備前焼研究ノート（1）～(4)」『倉敷考古館研究集報』1、2、5、18、1966、1968、1984
- 間壁忠彦「備前焼」『考古学ライブライマー』60 ニューサイエンス社 1991
- 間壁忠彦・西川弘「岡山県備前町今が瀬古窯群」『日本考古学協会年報』19 1971

- 間壁忠彦「備前焼の編年と分布」『鳥取県立博物館調査報告』第3分冊 1982
- 間壁忠彦「備前焼の窯跡」『陶説』569 日本陶磁協会 2000
- (2) 伊藤晃・上西節雄「備前」『日本陶磁全集』10 中央公論社 1977
伊藤晃「15世紀から17世紀の備前焼」『中近世十器の基礎研究』日本中世土器研究会 1985
伊藤晃「窯業」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987
- (3) 平井泰男「中世の遺構・遺物について」「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56 建設省河川工事事務所・岡山県教育委員会 1984
- (4) 乗岡実「備前燒標鉢の編年について」「第3回中近世備前焼研究会資料」 2000
乗岡実「中世の備前燒甕(盃)の編年案・紀年鉢資料にみる大甕(盃)の変遷」「第2回中近世備前焼研究会資料」 2000
乗岡実「近世備前燒標鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会 2002
- (5) 重根弘和「山崎古窯跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』167 岡山県教育委員会 2002
- (6) 福田正蔵・武田恭彰・橋本久和「8. 山陽東部」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編 2001
- (7) 山本悦世「古備考古学ライブラリー7」「寒風古窯址群」古備人出版2002
- (8) 武田恭彰「古代土器生産についての一予察(1)(2)」「古代吉備 第11集 第12集」 1989 1990
- (9) 神戸市教育委員会「今池尻遺跡 新方遺跡 平松地点 発掘調査報告書」 2003
- (10) 森内秀造「白沢・志方窯跡群における遺物の特徴:「志方窯跡群II-猿投支群」「兵庫県文化財調査報告第」217 兵庫県教育委員会 2001
- (11) 池澤俊幸「中国・四国地域の古代後半期須恵器窯跡」「窯跡研究会 第3回シンポジウム 須恵器窯の技術と系譜2-8世紀中頃~12世紀を中心にして発表要旨集」窯跡研究会 2004
- (12) 註(11)同じ
- (13) 木村平八郎泰武「五問五答古伊部神伝録」嘉永2(1849)
金森得水・渡會未祐「木朝陶器攷疏」安政4(1857)
- (14) 佐藤陶崖「融通講規定控」天保11(1840)
- (15) 小橋藻二衛「伊部陶史」大阪鶴舎会事務所出版 1918
- (16) 桂又一郎「古備前大事典」備前館 1975
- (17) 桂又三郎「明治の備前焼」奥山書店 1976
- (18) 大阪市文化財協会「堂島藏屋敷跡」 1999
- (19) 関西陶磁史研究会「窯構造・窯道具からみた窯業」資料集 2005
- (20) 大橋康二「わが国内の窯業における生産技術の展開」「窯構造・窯道具からみた窯業資料集」関西陶磁史研究会 2005
- (21) 佐藤陶崖「陶器总瓶小釜焼感問」天保14(1843)
- (22) 杜又三郎「備前窯谷焼とお庭焼」大雅堂 1969
臼井洋輔「御庭焼と御用窯⑦備前の藩窯」「茶道雑誌」河原書店 1992
- (23) 仲野泰裕「御用窯と御庭焼き」「茶道学大系 第5巻 茶の美術」淡交社 2000

附編1 二基の天保窯に関する文献史料

備前市文化財保護審議会委員

小 西 通 雄

天保窯に関する文献史料を後掲しているが、その前後の伊部村の状況、及び文献史料について少しく述べてみたい。

江戸時代後期、文化・文政期（1804～1830）に農村の経済は、行き詰まり困窮していた。伊部村も同様に文政5年（1822）頃には「・・伊部村散田多井村辻借銀凡六拾貫目、散田凡四拾五町、年々高懸り弥増懸百姓一統及衰微、毎々從御上様莫太之御救被為下候得共、村方行直り不申・・」（1）の状況であった。伊部村内（家数278軒、人数894人）（2）でも農業を経済基盤とする東部と、窯業と農業の混在する西部で村柄が異なり、日々軋轢が生じ、村民の要望により文政11年（1828）伊部村は東分（77軒）、西分（201軒）（3）に分村された。分村によって経済が上向く訳でもなく、諸物価は高騰し、焼き物の値段は下がり、増え村は疲弊して窯方は、焼き上げの仕込み銀にさえ支障を来していた。文政5年には邑久郡虫明村（現瀬戸内市邑久町虫明）で備前焼に似た焼き物を吉蔵なる人物が焼き、伊部の下職人の茂市が関与したことが発覚し、処分を受けている。（4）又分村後には、東分でも平五郎なる人物が、一夜焼きの窯を築き、これを後見する東分と窯組との間で問題が発生している。（5）このような事件も窯組の経済をさらに疲弊させて行ったであろう。

從来3基の大窯（北・西・南組）を運営していた伊部西分の窯組（北窯6人と南窯1人が発起人）（6）は、困窮・逼迫を打開するために藩に小窯の築窯を申請し、天保4年（1833）（7）に不老山麓に1基（天保窯・融通窯とも呼称、現備前市指定文化財）が築かれた。この小窯は順調に運営されていたようであるが、他の大窯組との確執が生じ、新たに小窯築窯の必要に迫られ、「史料1」とび「史料2」に至ったものと考えられる。効率よく窯を運営し、備後鞆浦（現福山市鞆）の保命酒の容器などの生産に活路を開こうとしていた。

天保11年（1840）、新たに藩から借銀し、2基の小窯が南大窯の西に築かれたが、大小6基の運営が、疲弊した窯組の経済再興には、十分な効果をもたらすには至らなかったようである。更に邑久郡虫明村で、再度焼物（虫明焼）が焼かれ、天保13年には藩へ訴訟するなど混乱を来している。（8）弘化3年（1846）頃には資金不足などにより、ある小窯は休窯状態に陥っている。（9）幕藩体制の終末を迎える時代の中で、伊部村だけでなく、農村の経済再生は、いかなる方策も手詰まりになっていたのである。幕末から明治維新（1868）を迎、更なる苦境に陥るのではあるが、窯に携わる人々の努力によって、小窯から更に縮小され、少人数の共同窯、そして個人窯へと続き、大正・昭和の苦難を乗り越え現代の備前焼の隆盛に至っている。

この度の南大窯周辺の発掘調査で、2基の小窯の所在が確認され、規模・焼成器種など多岐にわたる成果を得て、今後の備前焼研究に寄与できる資料を得た。2基の築窯年は定かではなかったが、発掘調査と同じ頃、伊部の佐藤家より「史料2」を保存されていることを教示戴き、それにより2基の小窯は、天保11年（1840）の築窯であったことが判明した。

そして2005年秋、佐藤家から新たな文書の所在の報を得て、拝見させて戴いた中に「史料1」が含まれていた。築窯前年の史料であり、当時の窯方の状況を知ることのできる史料として、公開の諾を戴き、掲載することができた。佐藤家は、17世紀後半には伊部に住し、医家・売薬業・窯業を生業としてきた。元禄の頃には窯業に携わっている。(10) 史料に記述の「名主与惣兵衛」は、佐藤陶崖(1785~1843)のこと、医師であり画家であり優れた陶工でもあった。当時一流の学者・文化人との交流も幅広く、経済にも明るく『御代の潤ひ』・『堕胎訓解』などの著述がある。村方のためには下役人・大庄屋とも論争に及ぶ気概溢れた人物であった。(11)

備前焼窯跡の発掘調査研究は、他の窯業地より遅れていたが、近年の南大窯周辺の発掘調査で各時代の窯が確認され、近世備前焼の研究は進むであろう。文献史料は『池田家文書』・『岡山県史』及び窯元であった木村・金重・森家の文書の一部は、『和氣郡史』や桂又三郎氏などの備前焼研究家の著作物により知ることができる。佐藤家史料のように従来知られていなかった史料が、窯元・名主・大庄屋などにつながる家に未だ多く、藏されているであろう。それらの史料を掘り起こし調査を進めるならば、発掘調査と併せて近世備前焼研究により寄与できるであろう。

【註】

- (1) 佐藤与惣兵衛記述「願い上げ口上」案文 1830頃
- (2) 備前窯文書「攝要錄」1648頁 但し記事に窯業と農業を誤写していると考えられる部分がある。
- (3) 訳2
- (4) 佐藤与惣兵衛記述「願い上げ口上」案文 1830頃「伊部村東分平五郎弓申者ハ西分釜元下職人ニ而、渡世仕居中候處、・・・自身居戸敷内ニ上器釜ト相名附小釜相蒸、本う路く様之物焼出し候處當正月ヨリ御座物御献上之御品等、少々宛作り焼立一焼ニ而、伊部焼ニ相似セ、・・・釜組一統難捨置、・・・色々評定候ハ、平五郎義其伯父茂市弓申者、同下職人ニ而御座候處、此向人之者文政五年ニ邑久郡虫明村ニ而、伊部焼物之似物仕、嚴敷御縫被 仰付、御差留ニ相成候惣兵衛茂有之候者ニ御座候得者、・・・平五郎申候者、私釜ハ大庄屋様へ御頭中聞濟之上ニ而、相始候處、虫明村古蔵弓申者ヨリ注文御座候而、・・・其伯父茂市只今ハ死去致候得共、先年虫明村ニ而似物焼致、嚴敷御縫被 仰附、其節其許ニも虫明村へ手傳ニ罷越、右古載ト申此度之流入も先年似物師之張本ニ而候得者、・・・」
- (5) 訳4。
- (6) 文政8年(1825)頃42軒 嘉永2年(1849)頃には46軒とある。『和氣郡史資料編下巻』1983 森家文書
- (7) 森家文書には天保4年(『備前焼第五卷第一号』桂又三郎 文獻書房 1939)とあるが、『五間五谷古伊部神傳録』木村泰武 1849には大保3年とある。
- (8) 窯方から虫明焼が伊部焼(備前焼)に似ているため廢窯を藩に求めている。「虫明焼の新資料に就いて」『焼きもの趣味』池上千代鶴 1939
- (9) 鞠の保命酒醸造元中村家文書 弘化3年(1846)の条に「・・・近年小窯と云御趣法御座候處、是も一兩年御休釜同様に相成候出・・・」とある。
- (10) 『備前焼紀年誌土型調査報告書』備前市教育委員会 1998
- (11) 『佐藤陶崖』備前市歴史民俗資料館 2000

史料一
奉願上史料二
融通満規定

一、和氣郡伊部村四久、近年小金御免ニ而焼立試候處、年々結構ニ調子相定、焼立

候得其大釜燒立之時分、付釜ニ被、仰付、平日數之勝手次第ニ燒立候事、御免

無御座候ニ付、燒物ハ程よく出来揚がり、小釜人數五、六人之業職之益ニ者、

急度相成候中候得共、釜組一統之益ニ者相成不申候而、大釜組、結之者之迷惑

二者相成居中候。小釜組へ加入相談度々什願人候得共、私欲ニ迷ひ一切熟諳致

出不中、此段爭論御役介も既ニ出来仕合ニ御座候處、此度村方一統之為ニ改格

仕法始掛候事、既ニ至方業改格ニ而、少シ人氣變ニ相成居中候。本より此

小釜ハ村一統之為ニ相成候儀者、只今ニ而古毛頭無御座候ニ付、小釜并大釜迄

改格恐案、左之通乍恐奉願上候。

一、小釜毎月一釜宛、釜方ニ詫加入致セ候而、燒出シ御免被為、仰付候ハヽ、一統

難有奉存候。左候ハヽ小釜為試第候ニ付、間数凡五間位ニ而、未全備ニ燒立居

申候ニ而者、無御座候。此小釜底ニ凡五間位、懶延奉願上度奉存候。左様ニ候

ノ旨、差形全備仕候而、盜調子官敷能成候由、口數取く毎月一釜宛、燒出し誠

莫大之融通ニ相成候事、迄凡社會法相建、當夏ヨリ始相中候ニ付、差報社倉

金ニ而、散田片付之仕法誕生仕候。是迄度々小釜粗五、六人之者ヨリ毎日燒出

し御願者、小釜組長ト郎ヨリ伊部方様ハ加出候得共、一切御免無御座、前又ニ

申上候通、一統之為ニ者相成不中。私欲ニ迷此度ニ利害共相成候事、御免被為、仰付候ハヽ、一統

者格之貪欲ニ而、利潤も強通大ニ歟數奉存候。墨塵ニ通被為、仰付候ハヽ、一統

難有奉存候。尚又仕法立ニ活法者、相分兼候。御事者ハ恐口上ニ而可奉申上

然。以上

天保十年 玄七月

同 村名主 与惣兵衛

右之通中出候ニ付、承糾候處、前文之通相違無御座候。願上之通可被

仰付候哉奉

伺候。以上

大庄屋坂根村 山形三郎右衛門

谷藤石衡門様

高正鏡、抬武昌也

外ニ満土拂出シ武昌曰掛

但

連中拾五人升講十二口】

都合人數十六人芝人前武昌曰掛

右者伊部村就賣、為新案新ニ小釜武ツ相策、燒物業職致出情候而、以其餘澤村方

西興安度仕法改革事願上候處、御免許被、仰附候而、御網工人長十郎、名王與總兵

衛右衛人之者江、新善利御掛候、并釜方引請諸事拂役被、仰付難有合掌存候。

左候ハヽ都合本釜共釜設六ツニ相成候。然ル上者六釜共無懈怠拂出ニセ度、依ニ改

革融通釜為仕込ミ銀、此度融通滿利令候間御加入被下度、則謂融治足佐之通

一、來ル五年より辰迄迄六ヶ年之間、御口合之通、無帶講主掛出可叶候。但講主

巷口加入之分、如何様之義有之候共、滿滿遂人化致開候。為後口證書依而如

件

天保十一年 子

連中治定

御細工人 長十郎

名士 与惣兵衛

一、右御用御金融通満規定加入候上ハヽ、御規定之通迄例中間事

一、庶番より高ニ捨御畠目見込ニ入札仕、落札之者へ以賞數割合可致取還候。尤

一、得番者ハ相草堂も同様各入札仕、落札之者割合右同期

一、右得番者ハ相草堂も同様各入札仕、落札之者割合右同期

連中江御尋相御座候ハヽ、無遠慮相礼合不相苦之運ニ候ハヽ、武番札付各取

極可申事

一、當中、統納得之上引當治定ニ候ハヽ、御法之通譲文相認其所役ハヽ、致廣印外ニ

請判等取據指出可申事

一、銀之取直之儀年前後者勝手次第、十一月十日限拂出日、十五日得番之方江

相波し可申事

一、當中、掛銀拂出約定及延引候ハヽ、拂出之儀者引當物支拂之儀者、

連中可仕指圖并掛銀之玄板、木板之鑄銀元庚上申候間、後繼之者請請可申候。兩

名共脚見角申留候事

附編2 東6号窯跡検出炭化材の放射性炭素年代測定について

株吉田生物研究所

1. はじめに

備前市伊部南大窯跡東6号窯跡より検出された遺物1点について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表1のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計(コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3. 結 果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行った¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値をそれぞれ示す。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730土40年)を較正することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal3.10(較正曲線データ:INTCAL04)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

4. 考 察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

測定番号	遺構名	試料データ	前処理	測定
1	M06	試料の種類：炭化物・材	超音波煮沸洗浄	NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
	T601	状態：dry	酸・アルカリ・酸洗浄	
	011023	カビ：無	(塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	

表1 測定試料及び処理

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	${}^{\text{14}}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	${}^{\text{14}}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)
			1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	
1	-24.93 \pm 0.13	1185 \pm 30	780AD(68.2%)890AD	720AD(2.2%)740AD 770AD(88.4%)900AD 910AD(4.9%)950AD	1187 \pm 30

表2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

参考文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. *Radiocarbon*, 37(2), 425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon*, 43 (2A), 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ${}^{\text{14}}\text{C}$ 年代. 3-20.
- Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RI Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmehle, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029-1058.

附編3 東6号窯跡などから検出した炭化材の樹種同定について

(株)吉田生物研究所

1. 試 料

試料は東6号窯跡の灰原から検出した炭化材2点と切田遺跡(備前市新庄:弥生時代)から出土した木材1点である。

2. 觀察方法

No.1は剃刀で木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

No.2-1、2-2の炭化材は数mm立方の試料をエボキシ樹脂に包埋し研磨して、木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)面の薄片プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結 果

樹種同定結果(広葉樹2種)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) ブナ科コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*)

(遺物No.2-2)

(写真No.2-2)

放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管($\sim 200\mu\text{m}$)が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1~3細胞幅の独立帶状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は單穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州(宮城、新潟以南)、四国、九州、琉球に分布する。

2) ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節 (Sect. *Prinus* Loudon syn. *Diversipilosae*, *Dentatae*)

(遺物No.1, 2-1)

(写真No.1, 2-1)

環孔材である。木口では大道管（～380 μm）が年輪界にそって1～3列並んで孔圈部を形成している。孔圈外では急に大きさを減じ、薄壁で角張っている小道管が単独あるいは2～3個複合して火炎状に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柵目では道管は單穿孔と対列壁孔を有する。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ節にはコナラ、ミズナラ、カシワ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

備前市市内遺跡出土木製品同定表

No.	遺跡名	品名	樹種
1	新庄切田遺跡	流木	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
2-1	伊部南大窯跡東6号窯跡 011029 T601 束括張区 下層 炭	炭化材	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
2-2	伊部南大窯跡東6号窯跡 MOE-6 T601 北舷 黒 011113	炭化材	ブナ科コナラ属アカガシ亜属

参考文献

- 島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覽」 雄山閣出版 (1988)
 島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社 (1982)
 伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V」 京都大学木質科学研究所 (1999)
 北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編 I・II」 保育社 (1979)
 深澤和一 「樹体の解剖」 海青社 (1997)
 奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」 (1985)
 奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」 (1993)

使用顕微鏡

Nikon

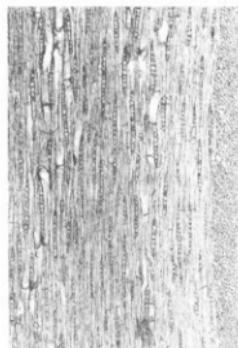
MICROFLEX UFX-DX Type 115



木口×40

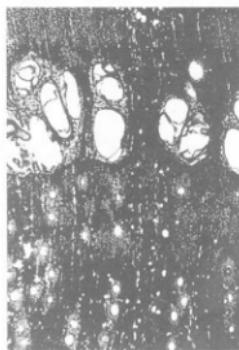


柾目×100



板目×40

No.1 ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節



木口×40

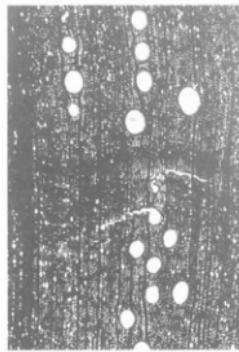


柾目×40



板目×40

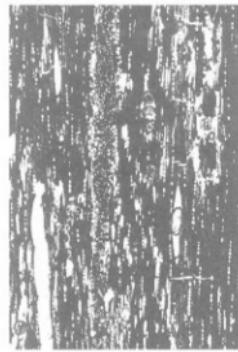
No.2-1 ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節



木口×40



柾目×40



板目×40

No.2-2 ブナ科コナラ属アカガシ亜属

附編4 窯の構造・立地からみる 備前焼生産画期の予察

第1節 はじめに

本編は平成17年度備前市で開催した備前歴史フォーラム「備前焼研究最前線Ⅱ」で石井が報告した内容を基本にしたもので、一部に修正を加えている。再掲に及んだ意図は、昨年度報告時においては発掘調査により確認されている備前焼の窯が19例であったが、その後文化庁の国庫補助事業で国指定史跡「伊部南大窯跡」内の調査をおこなうことができ、3例の新たな知見を加えることができたからである。また、その新知見により前回の報告の内容を若干修正する必要が生じたことにもよる。したがって、3例の新知見を加えた合計22例の調査例をもとに、窯構造や立地などの視点から備前焼生産状況の両期を予察というかたちでまとめてみたい。

第2節 窯の分布

備前市の南西部、瀬戸内市長船町に接する佐山地区は、中国地方では最大の須恵器古窯跡群である邑久古窯跡群の北東端に位置する。佐山地区では遅くとも7世紀末ごろには須恵器の生産が開始され、奈良時代に最盛期を迎える。平安時代後半まで続けられるが、その後はこの地で生産されなくなるという。それに呼応するかのように伊部の地で本格的に備前焼の生産が開始される。

12世紀のある時期、西の山窯跡〔田代健二1988〕や大ヶ池南窯跡など伊部の山麓で生産が開始された備前焼は、鎌倉時代中ごろになると山の中腹に立地するが多くなる。南北朝期にはさらに高度をあげ、熊山山上1号窯跡のように標高400mをこえるような熊山山塊に位置するものもある。南北朝期末ないし室町時代はじめ頃には、山崎古窯跡〔重根弘和2002〕、不老山東口窯跡〔河木清・葛原克人1972〕のように、ふたたび山麓に築かれるようになる。その後、16世紀の後半のある段階で、山麓に点在していた窯は北大窯、西大窯、南大窯に集約されることになる〔間壁忠彦・間壁設子1966ほか・伊藤晃1985・1987〕。

第3節 備前焼の生産開始（12世紀から）

備前焼の生産開始の時期については、「備前焼とは何か」という定義の問題と絡めて、奈良時代説、平安時代末説、鎌倉時代末説などが先駆・研究者によって提唱されてきた。それはさまざまな根拠に基づき提唱されているわけだが、本章では、昨年度の備前歴史フォーラムでの討論や、備前焼の碗と瓦器碗の研究をもとに備前焼の生産開始を12世紀代と考えており、以後の記述はその前提で進めたい。

本報告書に掲載している9世紀代の東6号窯跡については、報告のとおり小規模な窯の短期間の操業であり、12世紀代以降にはじまる継続的な築窯や大量生産とは区別して考えている。

12世紀代の窯としては、大ヶ池窯跡、西の山窯跡などを想定しているが、いずれも発掘調査を行なっ

ておらず窯構造についての知見はない。少し時期は下るが、13世紀の半ば頃の操業と推定している南大窯東4号窯は、全長が12.3m以下、幅が1.8m、傾斜角度が26度の窯である。これは須恵器の窯と大差なく、窯構造という視点から見る限り、古代の窯業とで両期を認めるものではない。ただ11世紀代の窯など前段階の資料も不足しており、今後さらに検討していく必要がある。

第4節 土柱使用と窯の大型化と量産化（14世紀中頃から15世紀初頭）

まず、窯構造の変化の中で、最初に認められるのは、土柱の使用である。15世紀中ごろを中心操業していたと考えられる不老山東口窯跡で土柱の可能性を指摘している報告例が初見である。14世紀後半頃と報告されている山崎古窯跡は、全長推定20m、幅2.1～2.5mで丘陵の先端部に立地するが、土柱構造は報告されていない。南大窯東5号窯跡、愛ヶ瀬北窯〔間壁忠彦・西川宏1965〕、グイビガケ谷窯跡など、14世紀後半以前に属するものは、窯の規模も全長10m前後、幅も1.5m前後で、須恵器の窯と大差なく、その立地も標高が高い山中に立地するものが多い。山崎古窯の段階で、窯の大型化が指向され、不老山東口窯跡段階で必然的に土柱が用いられるとして推定できる。土柱は、分煙性的機能というより、不老山東口窯跡の全長が40m、幅が3.2～3.4mの大形の窯である点からも、天井をさえるための柱と考えられる。窯の立地も丘陵部の先端や、山裾であり、片上窓による搬出の便を考えた結果であろう。

この土柱使用と窯の大型化、立地の変化は、すでに多くの研究者が認める「量産化」にともなうものであることは自明である〔伊藤晃・乗岡実ほか2004〕。不老山東口窯跡から出土した千数百箱にものぼる大量の擂鉢片をみても、その量産化の度合いは想像を絶するものがある。

第5節 窯場の集約と窯道具の使用、器種の爆発的増加と補完する専用窯（16世紀後半～17世紀初頭）

大型化を指向した窯は、南大窯東3号窯跡でひとつのピークを迎える。全長46m以上、幅3.4～4mの長大なもので、天井を支える柱が中央軸にそって規則的な間隔で縦一列に並んだ構造をもち、窯を取り囲むように大規模な溝が掘られている。出土した備前焼も擂鉢、平鉢、鉢、人型、壺、小壺、茶わん、茶入、徳利、皿、灯明皿、など非常に多岐にわたる。15世紀の終わりごろのKP-2窯跡の器構成が大量の擂鉢とごく少量の壺類である点からも、この段階で、爆発的に器種が増加していることが読み取れる。

この時期は備前焼の最盛期でもあり、「南窯」を珍重していた茶道においても、それにかわり「備前焼」がひとつのブランドとして確立した段階でもある（註1）。

この爆発的な器種の増加は、その前段階のシンプルな器種構成と対比しても、明らかに消費側からの需要の喚起がある。それは建水や平鉢などの特定の器種ばかり多量に生産していた全長13.6m以上、幅1.3～1.5mの小規模な南大窯跡西2号窯跡などが、大型化した窯と並行して操業している点などからも傍証できる。また、南大窯東3号窯跡においては、専用の窯道具はないが、それから数十年後の南人窯西2号窯跡では、製品をよりよい状態で焼成するため匣鉢や焼台といった窯道具の使用が確認

でき、破損率をさげ、需要に的確に対応する生産側の意図を読み取ることができる（註2）。

窯の立地で、従来から指摘されていることだが、この段階において、備前焼の窯場が権原山北山裾の「南大窯」、不老山南山裾の「北大窯」、医王山東山裾の「西大窯」の3箇所に集約されることである。この流れは、量産化を指向して搬出に便利な場所に窯場を集約させ、大形の窯で多量に生産するという文脈は読み取れるが、その要因は、消費者側の需要の変化、政治的な外因（註3）、生産地側の燃料や土の問題などが複雑に絡み合っていると考えられる。

第6節 備前焼最大の窯と藩の窯業施策（17世紀前半～17世紀後半）

備前焼の歴史の中で、最大の窯といわれているのは、国指定史跡伊部南大窯跡内にある東側窯跡である。全長約50m、幅約5m、勾配15度前後の巨大な窯である。文献からはその操業開始は延宝6（1680）年ごろではないかと推定されている〔間壁忠彦1991〕。窯の両側には小山のごとく物原（不良品や窯道具を廃棄した場所）が堆積していて、その生産量が膨大であったことが推測できる。その後、調査によりこの東側窯跡の操業年代については、出土遺物から17世紀の前半を中心とする時期と考えられ、従来より多少遅った年代観になっている。

この窯と前述の東3号窯跡の間に操業した窯には、同じ指定地内の中央窯跡、西側窯跡が想定されていたが、調査の結果、中央窯が17世紀初頭で、西側窯が17世紀末から18世紀前期と推定されている。規模は中央窯で全長約25m、幅約2.3mである。従って備前最大の窯に至るまでは、右肩上がりにその規模が拡大していくわけではなく、「ゆりもどし現象」を起こしている。この現象は後述する流通圏域の急激な縮小とも呼応するが、東側窯跡で再度規模が拡大し、備前最大となる。

その後この備前最大の窯がどれくらいの期間操業していたかは遺物検討を行なわなければならないが、後続する窯は西側窯で、全長約33m、幅約2.8mと明らかに縮小傾向にある。また、この西側窯は、物原などの様子からあまり長期間操業はしていないようである。

ちょうどこの時期は「御用窯」である閑谷焼窯が開窯する操業を始めたころであり、藩の窯業施策が大きく転換していった時期でもある。（註4）。

第7節 連房式の窯の導入と商品価値のある特定器種の多量生産（19世紀前半）

備前焼に連房式の窯が導入されるのは、江戸時代後期、天保年間（1829～）頃と考えられている。古文書〔木村平八郎泰武1849・金森得水1857・佐藤陶崖1840〕では、天保年間に3基の小窯が築かれたとあり、南大窯西1号窯跡、KP-1窯跡、天保窯（備前市指定建造物）がこれに該当する。後二者は天保年間に築窯されたあと、複数回改修がされていて、原形を留めている部分は多くないが、南大窯西1号窯跡は築窯時の平面形がよく残存している。全長16.7m、幅3.7～4.5m、勾配17度、初戸と呼ばれる燃焼室、5戸の焼成室、煙道とよばれる煙出し部からなる。無段斜狭間の連房式の窯である。構造的には従来からある大形の備前焼の窯に仕切りをただけという指摘もあるが、伊部の地において連房の窯が導入されたのはこれが最初であると考えられている。

しかし、伊部から東に7kmほど離れた閑谷という地では、貞享3（1686）年ごろから宝永7

(1710) 年頃にかけて既述の「閑谷焼窯跡」〔桂又三郎1696・臼井洋輔1992〕と呼ばれる連房式の「御用窯」〔仲野泰裕2000〕が操業している。「天保窯」の築窯の約150年も前に、「連房式の窯」が伊部の地からそう遠くない地点で操業しており、伊部の陶工も操業に深く関わったといわれる。「藩」主導で導入された閑谷焼窯跡は、現在でいえば窯業試験場的な性格をもつものであるが、「連房の窯」はその後、伊部の地で用いられることなく、天保窯まで採用されなかったことになる。150年のブランクをどう読み解くかは、今後の課題であるが、大形の窯と並行して操業した「小釜」(註5)の流れがあることは文献からも指摘でき、大形の窯の発掘調査とともに視点にいれておかなければなければならない。

「天保窯」では、人形徳利、角徳利、壺、灯明皿、土管など焼成している。人形徳利や角徳利は、鞆の浦(広島県福山市)に保命酒という有名な薬酒の容器として、相当量消費されていた〔桑田勝二1937〕。土管は新田開発用に、また鋤鉢は備前地域内の郷町、農村での消費という状況である。これは商品価値のある特定の器種のみを多量生産していることになる。

16世紀後半から17世紀にかけて最盛期を迎えた備前焼は、その後、流通圏域を備前一国内へと急激に狭め、人形徳利や灯明皿など特定の器種のみが圏外へ流通するようになる。それは天保窯が当時「融通窯」と呼ばれたように、燃料の節約と焼成日数の短縮が可能なこの形式の窯だからこそ可能な生産形態であったわけで、大窯を焚く時代はすでに終わっていたのである。

第8節 おわりに

以上窯の構造や立地の分析を通して、備前焼の生産状況の画期を設定したわけであるが、端的にまとめる以下のようなことになる。

12世紀のある段階、須恵器窯と大差ない全長10m前後、幅1.5m前後の窯で備前焼は生産され始める。南北朝期のおわりごろには全長20m、幅2.1~2.5mのやや大型化した窯を丘陵先端部や山裾部に築くようになる。この時期は、西日本において備前焼が国産陶器の需要を独占するようになる傾向とも合致する。

室町時代前半の不老山東口窯跡の段階では、火井をささえる上柱構造の可能性が指摘されており、以後の大形の窯構造の流れをつくるとともに、量産化を押し進める。16世紀終わりごろには、爆発的な器種の増加、窯場の集約がおこるとともに、大型化した窯と並行して特定の器種のみ多量に焼成する小形窯が出現する。これは消費側の需要の変化、為政者の干渉など外的要因が考えられる。

17世紀には、流通圏域の急激な縮小が関係するのか、窯が小形化するゆり戻し現象が起こる。しかし、17世紀前半には備前最大の窯ができ、17世紀後半には「御用窯」の閑谷焼窯跡が閑谷学校建設とともにあって築窯される。閑谷焼窯は連房式窯であるが、備前焼の中心生産地である伊部の地にはその後150年間も普及しなかったといわれている。

天保年間(1829~)には合計3基の「融通窯」とよばれる連房式窯が築かれ、人形徳利や灯明皿といった商品価値の高い商品を中心に窯業が営まれる。このとき大形の窯は完全に廃窯になっていたわけではなく、窯規模の縮小、焼成回数の削減などをおこないながら、明治初年頃まで焼きつがれていった。

基本的にはごく少数の調査事例から生産状況の画期を設定したわけであるが、今後調査事例の少な

い12世紀代の窯跡調査が進めば、より詳細な分析が可能になっていくと思う。

(備前市教育委員会 石井啓)

【註】

- (1) 「なんばん」の「土もの」として珍重されていた安南の焼き締め陶器にかわり、備前が用いられるようになるのは、16世紀後半からといわれている(赤沼多佳2002)。
 - (2) 窯道具の使用開始は、ひよせと呼ばれる田土の使用と同時期であり、それは田土が山粘土に比較して、焼成時に扱いににくい点をおぎなうものではないかと考える。
 - (3) 『松屋筆記』という文書の中にこういうくだりがある。「いんべと云ふ村を某は通り候 爰にて とつくり かめなど作る所にて候 兼ては備前の國中より作り出すべきと存候所に 此村にかぎり候 龍など焼候かま あまた候處に 先任太閤様御下向之助御賜有て かかる天下の重寶をあまたやき候ては 口惜き山被仰 ことごとくうちやぶらせられ候 唯一所指被賜候き・・・」。
- これは文禄元年(1592)、秀吉の朝鮮侵略のため、九州へ向かった當陸佐竹家の家老平塚山城守藤俊が名護屋(佐賀県)の陣中から国元へ送った書状の一節で、秀吉が多くの窯を破壊し、一ヵ所だけ窯を焚くように命令したことが記されている。文中に「先年」とあるのは天文15年(1587)ごろのことと考えられていて、今回確認された窯が操業していた時期と重なる。
- 『松屋筆記』は国学者高田與清(1783-1847)が、膨大な量の藏書などを抜粋し、他の文献などを参考に解釈を加えたもので、全部で120巻にもなる。
- (4) 備前岡山藩主池田光政は寛文8・9年(1688-1689)ごろまで、熊澤苔山を信任して意見を求めたり、献策を用いたりしていた。その熊澤苔山は、政治、人君天賦、勤農、因産興隆などにわたった独特の経世治民論を展開した著書『東夷外書卷一(寛文12年板行)』の中で、「塙浜と焼物との山林を全くすることは大なる事なり。それは山林は國の本なり。(中略)國に忠あらん人は塙浜と焼物とを減ずとも増すべからず。其上、占人も山をつくすものは子孫おとろふと申伝候(集義外書卷1 寛文12年板行)」と述べている。これによれば過度に拡大した窯業について山林資源との関係で憂いを述べており、蒲の窯業施策にも影響を及ぼしたことが推定される。ただ「ゆりもどし現象」や窯規模の縮小化とどう関連するのかは、今後検討していくべきだ。
 - (5) 佐藤陶崖が「私シ工夫の小釜」(南大窯西1号窯跡など)が「大釜」に比較して経済的で、窯方の衰えを救うためにいかに必要か説いた「陶器忌瓶小釜焼感問」(佐藤陶崖1843)という文献があり、その記述から陶崖が京阪の各地で見聞した連房の窯を備前に導入した可能性が高い。「大窯」についても、「小釜」導入によって完全に廃窯になったわけではなく、近くしたり、床をあげるなどの改窯を行ないながら、「連房」と併行して、明治の初めごろまで操業していたという。

【引用文献】

- 赤沼多佳2002『伝世品に見る南蛮茶道具の様相』『東南アジアの茶道具』茶道資料館
 伊藤晃1985『15世紀から17世紀の備前焼』『近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会
 伊藤晃1987『窯業』『岡山県の考古学』古川弘文館
 伊藤晃・栗岡実はか2004『中世陶器の物流―備前焼を中心にして―』『日本考古学協会2004年度広島大会研究発表会資料集』日本考古学協会2004年度広島大会実行委員会
 小井洋輔1992『御庭焼と御用窯(備前)の窯業』『茶道雑誌』 河原書店
 桂又三郎1982『伊部南大窯址発掘資料』日本陶磁協会
 桂又三郎1969『備前閑谷焼とお庭焼』 大雅堂
 金森得水・渡會末彌1857『木本朝陶器攷証』 安政4

附編4 宮の構造・立地からみる備前焼生産歴期の予察

- 木村平八郎泰武1849(五間五答古伊部紙電路区) 嘉永2
桑田勝三1937「保命酒の徳利(上・下)」『茶わん』73号 74号
河本清・葛原克人1972「不老山古備前窯址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県文化財保護協会
佐藤陶崖1840「融通誠規定控」 天保11
佐藤陶崖1843「陶器忌瓶小釜焼惑問」 天保14
重根弘 and 2002「山崎古窯跡」『岡山県埋蔵文化財報告』167 岡山県教育委員会
田代健一1988「備前市内採集の遺物について」「古代吉備」第10集
仲野泰裕2000「御用窯と御庭焼き」『茶道学大系 第五巻 茶の美術』 淡交社
栗岡実2002「近世備前焼擣鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会
備前市教育委員会2003「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書1」備前市埋蔵文化財調査報告5
間壁忠彦・間壁寛子1966、1966、1968、1984「備前焼研究ノート(1)~(4)」「倉敷考古館研究集報』1、2、
5、18、
間壁忠彦1991「備前焼」『考古学ライブラリー』60 ニューサイエンス社
間壁忠彦・西川宏1971「岡山県備前町合が瀬古窯群」『日本考古学協会年報』19
間壁忠彦1982「備前焼の編年と分布」『鳥取県立博物館調査報告』第3分冊
間壁忠彦2000「備前焼の窯跡」『陶説』569 日本陶磁協会



第1図 主な窯分布図

第1表 調査された備前焼窯跡一覧

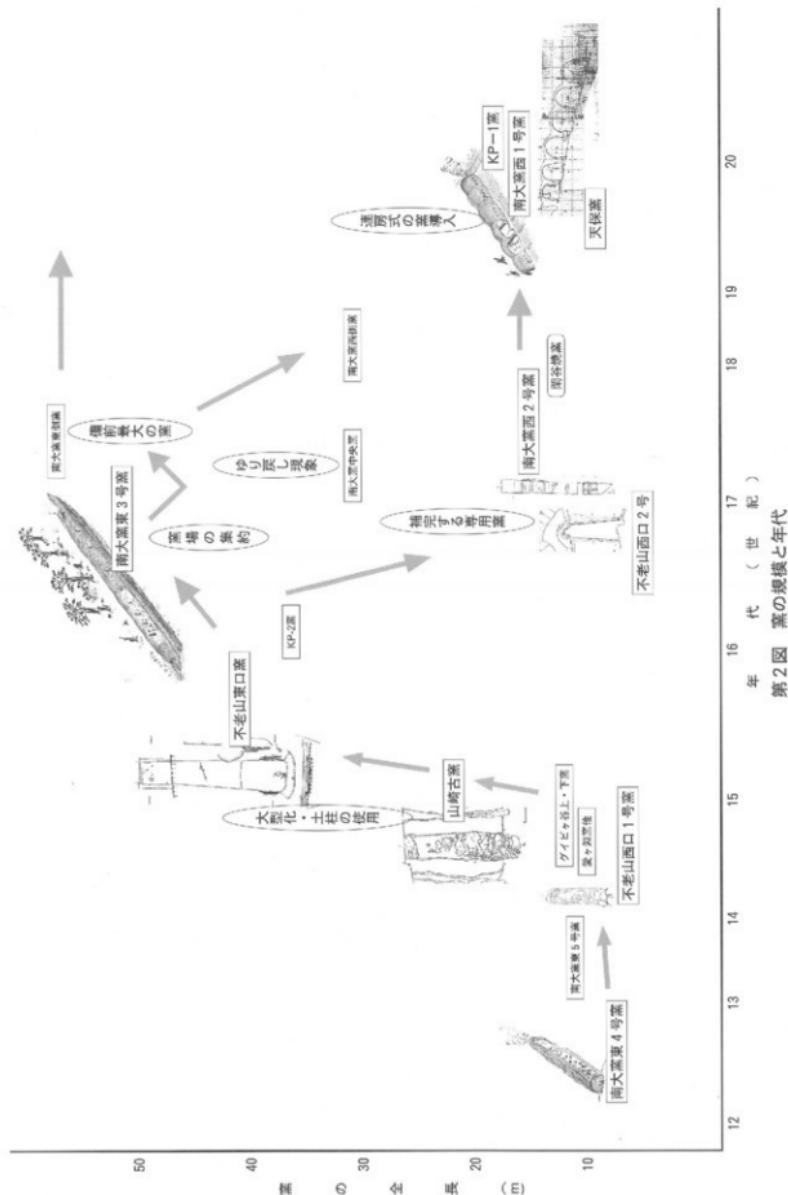
時期	窯名	今長	幅	角度	構造		窓	備	参考文献
					立地	窓			
900	備前大窯車6号窯跡	4.5m	0.8~1m	30度	標高67mの谷筋斜面	不明	不明	不明	①
1200	南人窯車4号窯跡	不明	不明	約1m	標高58mの緩斜面	不明	不明	不明	②
片1	匂焼窯跡	12.3m以上	1.8m	26度	標高40mの緩斜面	窓無	窓無	窓無	3
南人窯東5号窯跡	10.1m	1.3~1.4m	22~25度	標高80m弱の谷筋斜面	窓無	窓無	窓無	2	
愛ヶ瀬南2号窯跡	8m以上	1.5~1.6m	17度	標高40mの谷筋斜面	●	●	●	5	
不老山西口1号窯跡	推定約6m	1.6~1.7m	30度	標高40mの谷筋斜面	●	●	●	5	
グイビヶ谷上窯跡	約112m	約1.4m	約30度	標高190mの谷筋斜面	窓無	窓無	窓無	6	
グイビヶ谷下窯跡	約12m	約1.4m	約31度	標高190mの谷筋斜面	窓無	窓無	窓無	7	
1350	愛ヶ瀬南1号窯跡	11.5m	1.3~1.6m	20~35度	標高80m弱の谷筋・山腹	窓無	窓無	窓無	7
1400	山船古窯跡	推定20m以上	2.1~2.5m	18度	標高180m前後の丘陵先端部	窓無	窓無	窓無	8
	不老東山1号窯跡	推定10m以上	3.2~3.4m	15~20度	標高40m前後の丘陵端部	長人は苦氣	長人は苦氣	長人は苦氣	6
1500	K.P2窯跡	推定30m以上	2.6m	18度	標高40m前後の丘陵部	地下下式單房窯	地	地	1
片口山側窯跡新	不明	不明	不明	標高40mの緩斜面	不明	不明	不明	不明	4
1575	南人窯車3号窯跡	40m以上	3.3~3.9m	18度	標高40m前後の谷部	長人は大窓	地	地	6
不老山西口2号窯跡	推定10m	2.7m	15度	標高40mの斜面	地上式單房窯	地	地	地	6
1600	備前大窯西2号窯跡	14.2m以上	約1.5m	15度	標高30m前後の斜面	地	地	地	2
	南人窯車10号窯跡	約35m	2.0~2.3m	15.5度	標高30m前後の斜面・山腹	地	地	地	7
片口山側窯跡	53.8m	3~5.2m	17度	標高30m前後の斜面・山腹	地	地	地	地	7
南人窯車西側窯跡	36.3m	2.3~2.6m	17度	標高30m前後の斜面・山腹	地	地	地	地	7
1830	南人窯車1号窯跡	16.7m	3.7~4.5m	17度	標高25m前後の斜面・山腹	斜坡開削より火窯	斜坡開削より火窯	斜坡開削より火窯	2
	KP1窯跡	18.6m	約3.6~4.5m	9~16度	標高30m前後の斜面・山腹	地	地	地	1

【参考文献・第2回引出文献】

- 備前市教育委員会2006「伊部陶人窯跡周辺踏査結果調査報告書Ⅱ 備前市埋蔵文化財調査報告」(本文)
- 備前市教育委員会2003「伊部南大窯跡周辺空疎斜面認調在報告書」! 備前市埋蔵文化財調査報告書
- 石川哲也「備前燒」第23回研究会「中世須恵器と山茶碗」資料集」日本中世工芸研究会
- 備前市教育委員会1998「備前燒」(上型削作)
- 岡田信也「岡田信也記念展」(上型削作)
- 河本清「1972「岡山縣備前窯跡(合川羅山窯跡)」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会
- 藤本善昌「グイビガ谷窯跡」『岡山県大日川事業』山陽新聞社
- 畠田弘治2002「山崎山窯跡」『岡山県電磁文化財報』167 岡山県教育委員会
- 坂又一郎1982「伊部南大窯跡発掘調査資料」日本陶磁協会

第2表 伊部南大窯跡周辺窯跡群一覧

登記番号	窯跡名	例2号窯跡	例2号窯跡	東3号窯跡	東4号窯跡	東5号窯跡	東6号窯跡	KP1窯跡	KP2窯跡	南大窯生側窯跡	南大窯中央窯跡	南大窯西側窯跡
金食	16.7m	14.2m以上	16m以上	不明	12.3m以下	4.5m	1.8m	約0.8~1m	18.6m	30m以上	63.8m	後35m
金鶴	3.7~4.5m	約1.5m	3.3~3.9m	不明	26度	約3.4~4.5m	2.6m	9~16度	2.6m	3~5.2m	2~2.3m	2.3~2.6m
計合	17度	15度	18度	不明	26度	30度	9~16度	18度	17度	15.5度	17度	
備	無段の連房式の 窯 ■初(火窓室) と後(煙出し) が燃焼の前後 につく穴と呼ばれる 窓	半地式半房窯 ■半地式半房窯 ■窓の一部が石 で覆はれる ■長袖に直火する 形で規則的な間 隔で構成する ■火格子	半地式半房窯 ■窓の一部が石 で覆はれる ■長袖に直火する 形で規則的な間 隔で構成する ■火格子	■窓窓	■窓窓	■窓窓	■窓窓	■連房式の窯 ■切口と煙窓が付 いてる ■窓の前に付 いてる ■火格子と土質を 使った剛弱な組 合せ	■半地下式串房 窯 ■窓口がよく焼 き切る ■窓口以前に土足 り跡 ■窓のほどに列 る窓口	■窓窓	■窓窓	■窓窓
数	5(1)	1	1	不明	1	1	不明	1	6(+2)	不明	出窓	出窓
内	出入り口と通道を 1(1)付	不明	不明	不明	前面	不明	不明	不明	(2箇所確認)	不明	確認できず	確認できず
外	物販・溝	不明	物販	物販	物販	物販	物販	物販	物販	物販	物販	物販
人形・花牛・皿・鉢・ 大平鉢・大甕・水・ 土・瓦・瓦・盆・ 道具	人形・花瓶・小走彌縫・ 大平鉢・大甕・水・ 土・瓦・瓦・盆・ 道具	立窯取用の溝	立窯取用の溝	物販	物販	物販	物販	物販	物販	物販	物販	物販
特	備透的には、 特に仕切り 多い	大窓、窓が事故で陥没 した窓見が 窓が事故で陥没	窓が事故で陥没 した窓見が 窓が事故で陥没	■窓の多くで 窓が事故で陥没	■窓の多くで 窓が事故で陥没	■窓の多くで 窓が事故で陥没	■窓の多くで 窓が事故で陥没	■窓の多くで 窓が事故で陥没	■窓の多くで 窓が事故で陥没	■窓の多くで 窓が事故で陥没	■窓の多くで 窓が事故で陥没	■窓の多くで 窓が事故で陥没
徴	備前では付署な 形態の窓構造	17世紀の窓4つ半 明治初筋付(1868)年 平成11(1999)年 4月 1年	17世紀の窓4つ半 明治初筋付(1868)年 平成12(2000)年 4月 1年	17世紀の窓4つ半 明治初筋付(1868)年 平成13(2001)年 4月 1年	天保11(1840)~ 明治18~19(1886)年 平成13(2001)年 平成14(2002) 年4月	天保11(1840)~ 明治18~19(1886)年 平成13(2001)年 平成14(2002) 年4月	天保11(1840)~ 明治18~19(1886)年 平成13(2001)年 平成14(2002) 年4月	天保11(1840)~ 明治18~19(1886)年 平成13(2001)年 平成14(2002) 年4月	17世紀前半~ 17世紀初~ 平成17(2005)10月 11月	17世紀前半~ 17世紀初~ 平成17(2005)10月 11月	17世紀初~ 17世紀初~ 平成17(2005)10月 11月	17世紀初~ 17世紀初~ 平成17(2005)10月 11月



写 真 図 版

図版 1



1. 東 6号窯跡調査着手時（東より）



2. トレンチ601灰原（一部）



3. トレンチ603（北西より）



4. 東 6号窯跡作業風景（北西より）



5. トレンチ602断面一部（北より）



6. トレンチ602（東より）

図版2



1. トレンチ605・東6号窯跡煙出（西より）



2. トレンチ605・東6号窯跡煙出（南西より）



3. トレンチ606断面（北東より）



4. トレンチ601灰原（南西より）



5. トレンチ605煙出（西より）



6. トレンチ601灰原（南より）

図版3



1. トレンチ604（北西より）



2. トレンチ601サブトレンチ（北より）



3. 平成14年度調査開始（北西より）



4. トレンチ602東区（北西より）



5. トレンチ601南区南端土壤断面（南より）



6. 作業風景（北より）

図版 4



1. トレンチ602南区窯検出時
(北上より)



2. トレンチ601南区窯延長断面（西より）



3. トレンチ602南区窯調査中（北より）



4. トレンチ602南区窯調査中
(北上より)



5. トレンチ602南区窯中央断面（西より）



6. トレンチ602南区窯中央断面（西より）

図版5



1. トレンチ602南区（北より）



2. トレンチ601南区西壁断面（東より）



3. トレンチ601灰原検出時部分



4. トレンチ601灰原最終検出時
(北上より)



5. トレンチ601灰原検出時部分



6. トレンチ601灰原（南上より）

図版 6



1. トレンチ601南区窯中軸延長断面（西より）



2. トレンチ602南区窯長軸断面（西より）



3. トレンチ602南区窯横軸断面（北より）



4. トレンチ602南区煙出部断面（西より）



5. トレンチ602南区焚口部分（北上より）



6. トレンチ602南区焚口部分
(南上より)



1. トレンチ602南区窯全景
(北上より)



2. トレンチ602南区煙出部 (北上より)



3. トレンチ602南区焚き口 (北より)

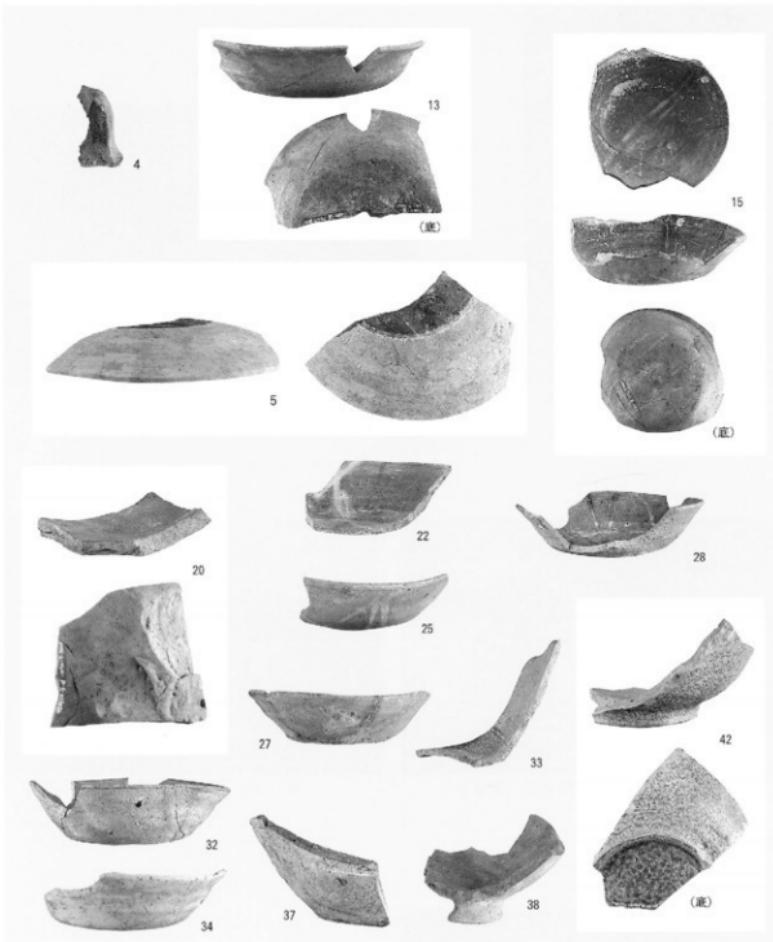


4. トレンチ601灰原粘土塊



5. 東6号窯跡埋め戻し

図版8



トレンチ601出土遺物



トレンチ602出土遺物

図版9



59



60



トレンチ605出土遺物



62



64



70



74



78



(底)



(底)



79



82



88



83



96



89



101



97



98



99



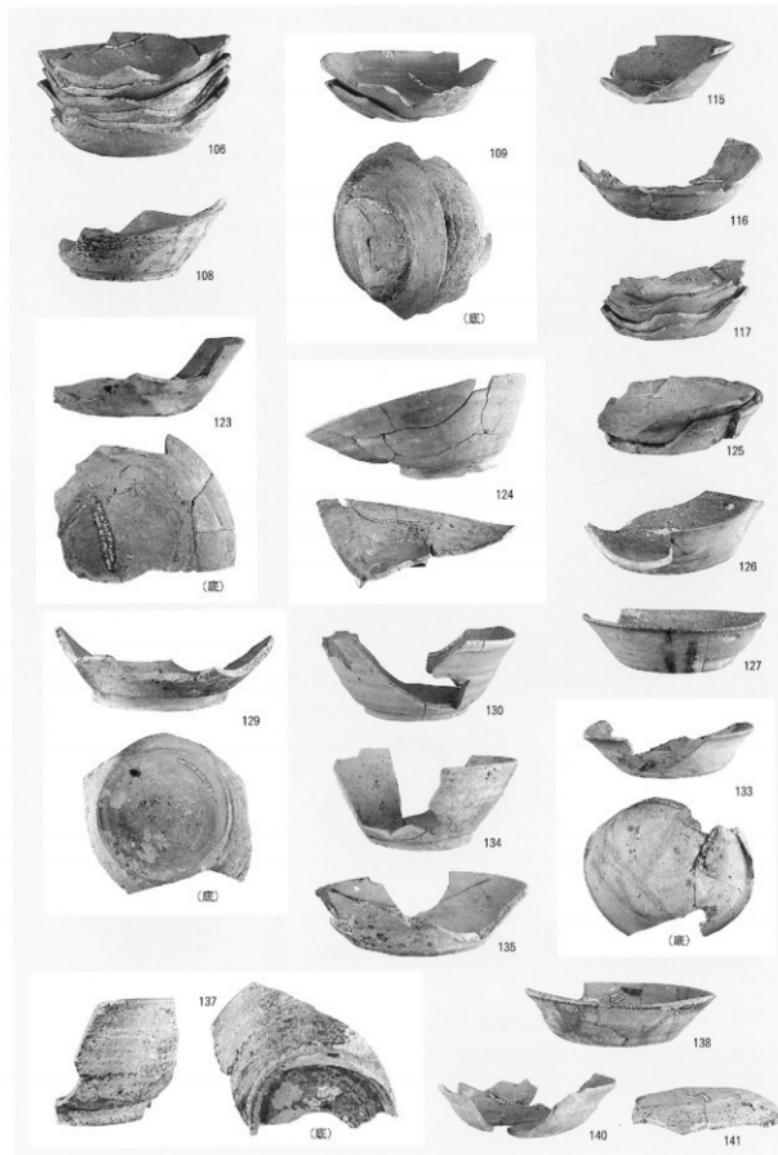
100



(底)

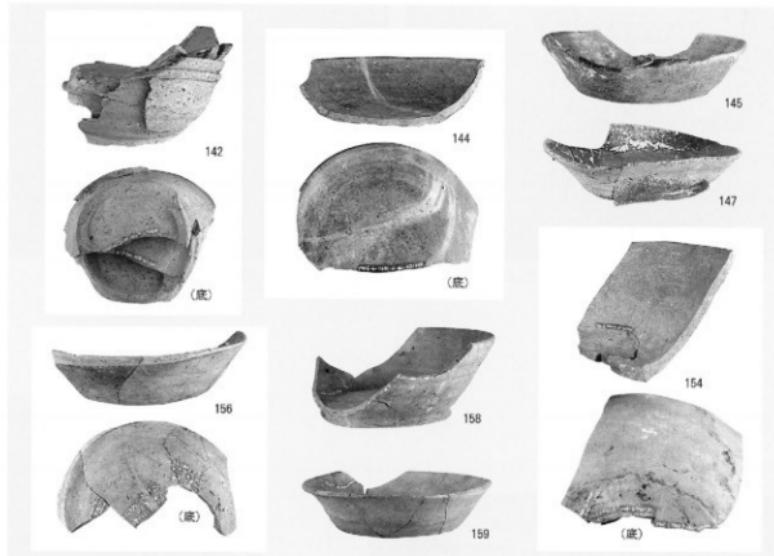
トレンチ601出土遺物（1）

図版10

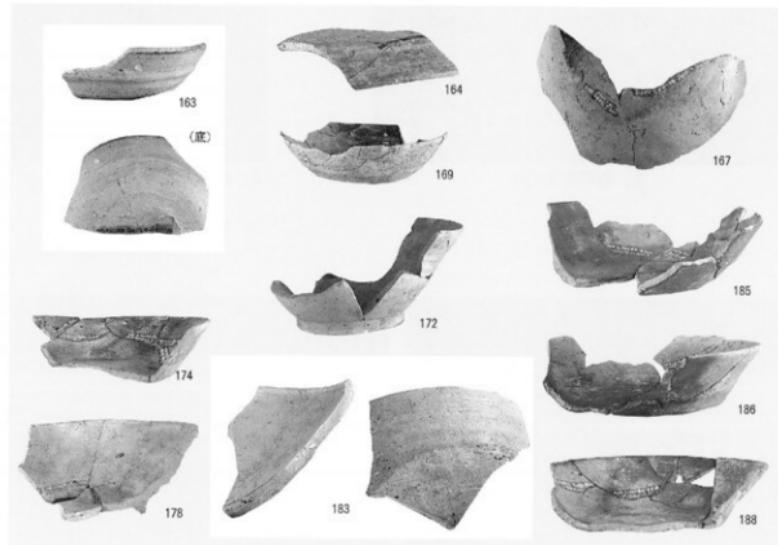


トレンチ601出土遺物（2）

図版11



トレンチ601出土遺物（3）



トレンチ602南区出土遺物

図版12



1. KP-1地点調査前（北より）



2. 調査風景（北より）



3. 初戸崩落天井



4. KP-1地点窯跡全景（北より）



5. 初戸土柱（北上より）



6. 初戸土柱（東より）



1. 2房の板状窯道具（北より）



2. 2～3房仕切（北より）



3. 3～4房仕切（南西より）



4. 4房入り口（西より）



5. 5～6房仕切り（西上より）



6. 6～煙出仕切り（北より）

図版14



1. 6～煙出（東より）



2. 煙出から焚口方向をみる（南より）



3. 初戸（北より）



4. 初戸入口（南より）



5. 初戸土柱（北より）



6. 初戸東側土柱（北より）



1. 初戸中央土柱（北より）



2. 初戸床面（北より）



3. 初戸（南西より）



4. 煙出（北より）



5. 煙出南溝断面（東より）



6. 煙出（北西より）

図版16

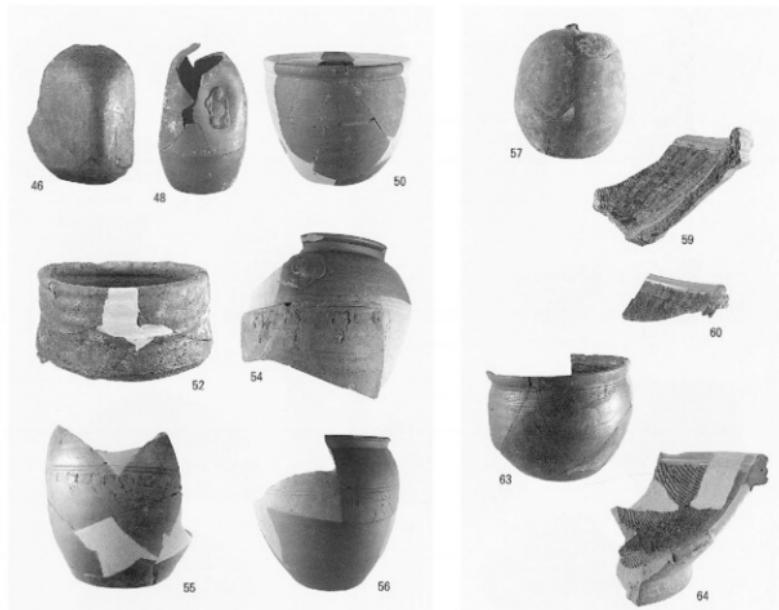


初戸出土遺物



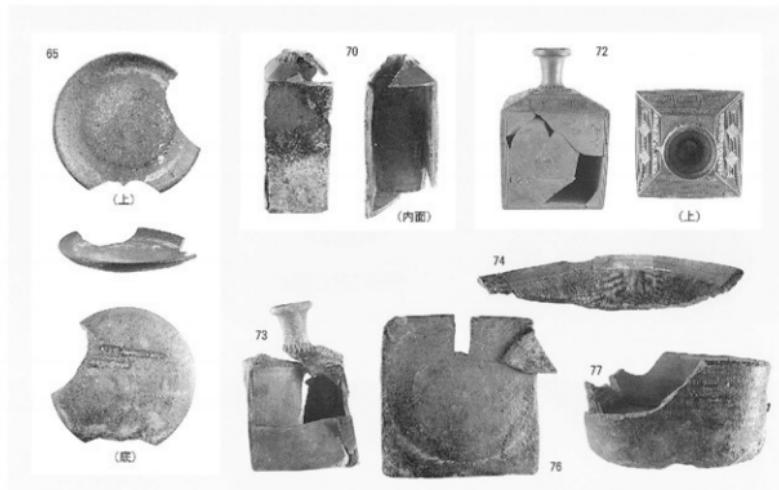
1房出土遺物

図版17



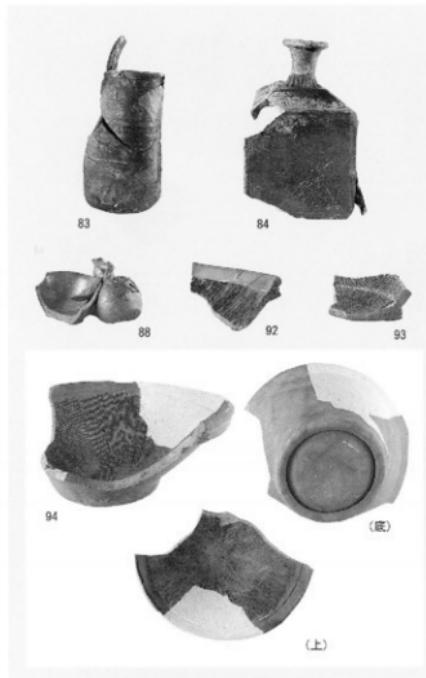
2房出土遺物

3房出土遺物



3~4房出土遺物

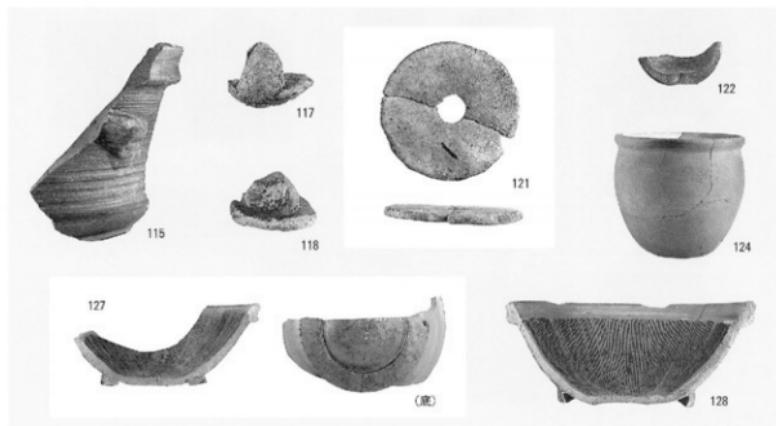
図版18



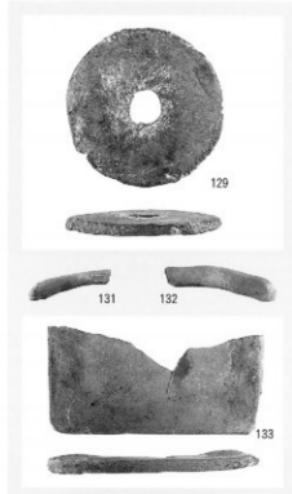
4 房出土遺物



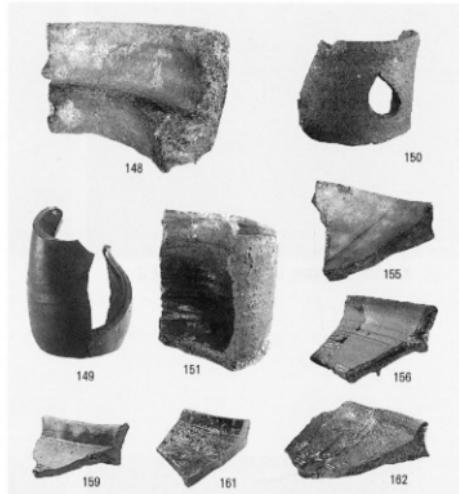
5 房出土遺物



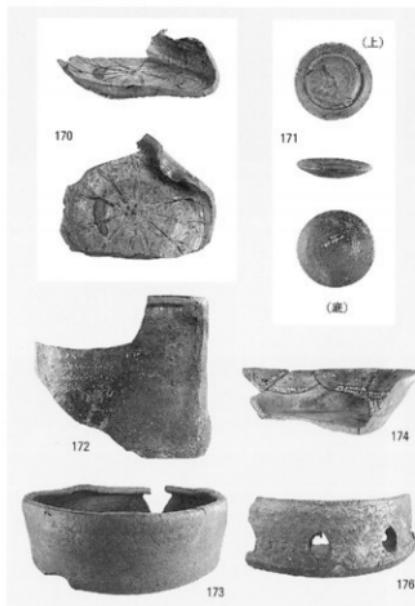
6 房出土遺物



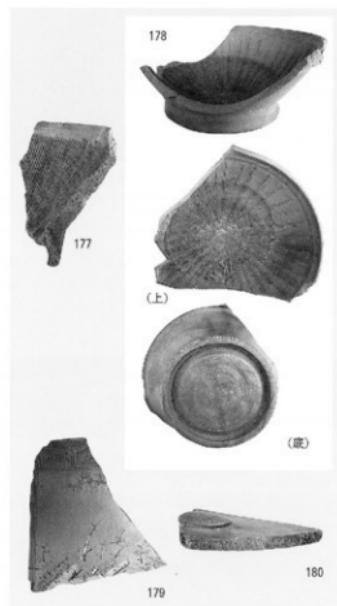
6 房東側トレンチ出土遺物



北トレンチ出土遺物



初戸上層出土遺物

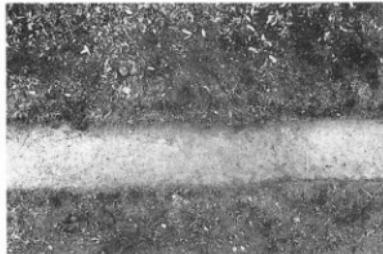


表探資料出土遺物

図版20



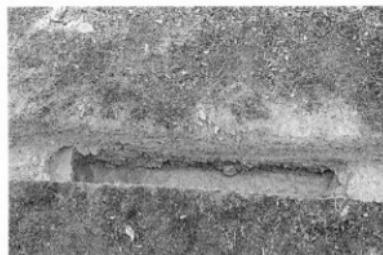
1. KP-2地点窯跡トレンチ1・2 (東より)



2. トレンチ1窯床面 (北上より)



3. トレンチ1・2西半 (東より)



4. トレンチ2窯検出 (南上より)



5. トレンチ1・2東半 (西より)



6. トレンチ1断面 (北東より)



1. トレンチ1物原断面（北東より）



2. トレンチ1物原断面（北西より）



3. トレンチ2断面（北東より）



4. トレンチ2窯断面（北東より）



5. トレンチ2断面（北西より）



6. トレンチ2東側窯壁（西より）

図版22



1. トレンチ 2 西側窯壁（東より）



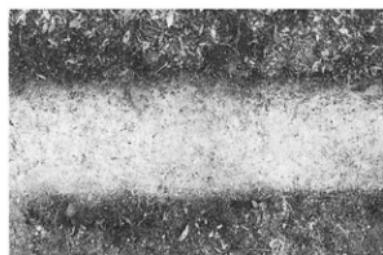
2. トレンチ 2 窯中央部断面（北より）



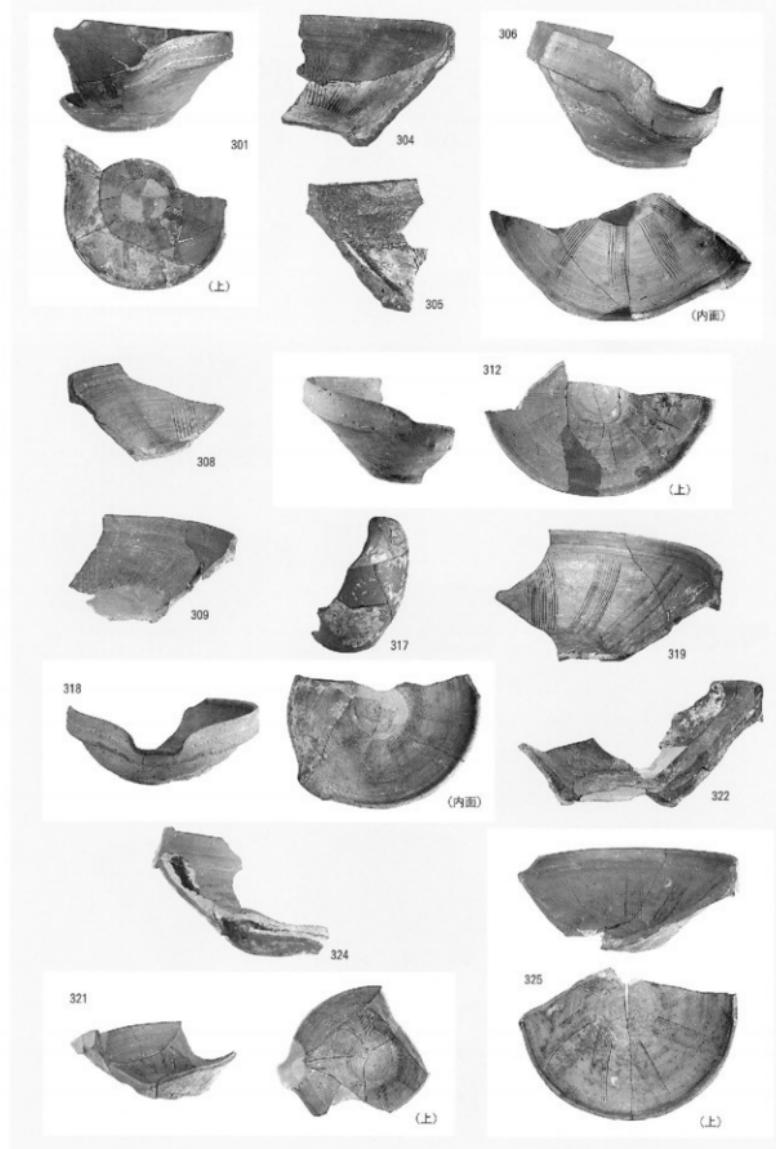
3. トレンチ 2 窯窓（北上より）



4. トレンチ 1 物原サンプル断面

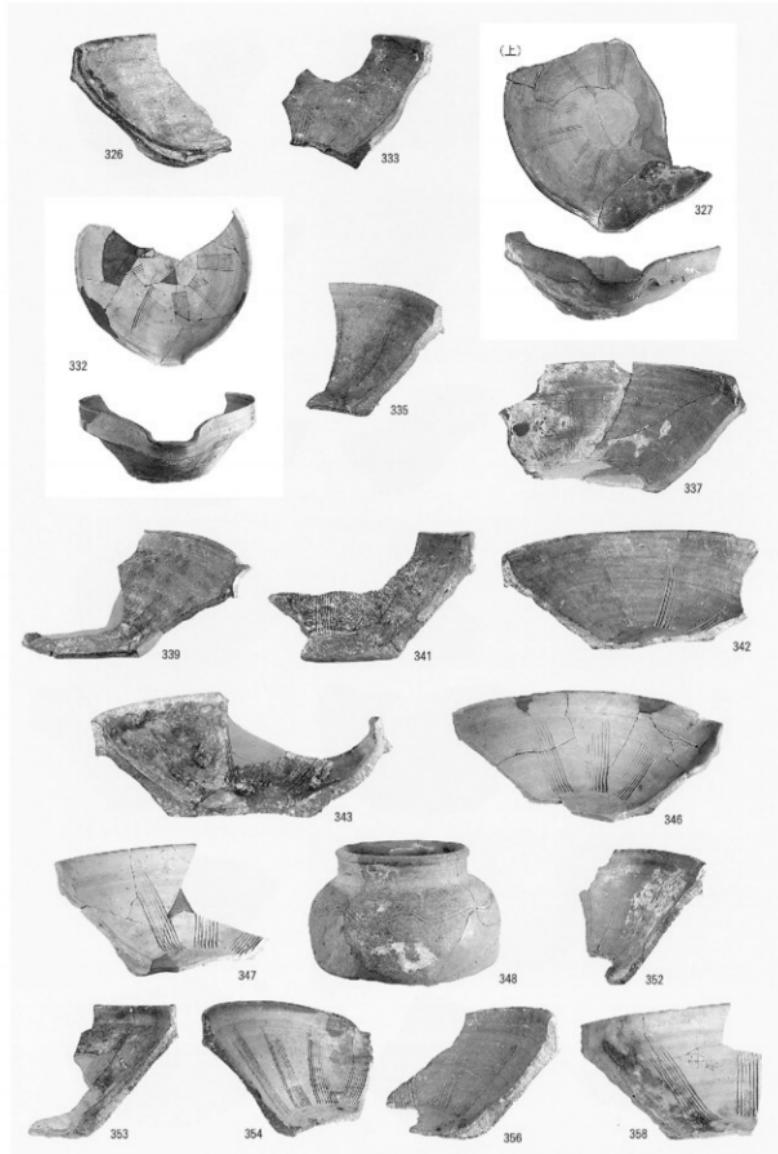


5. トレンチ 1 溝？（北より）

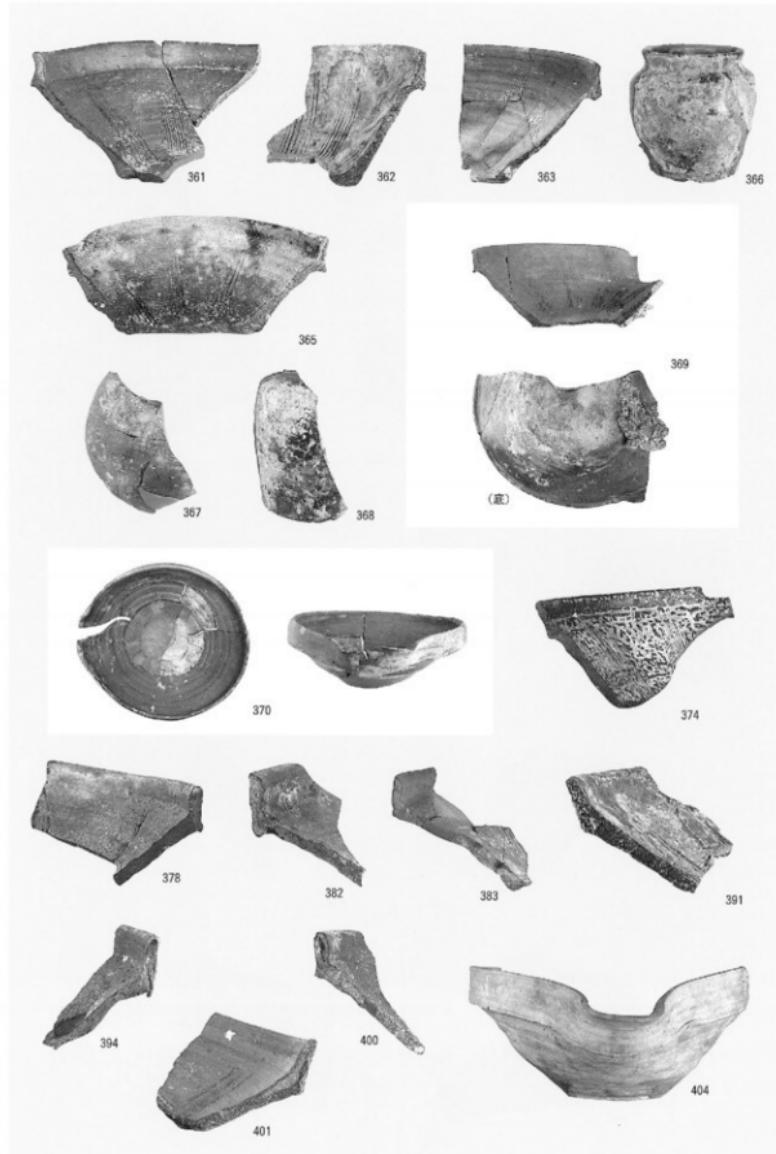


トレンチ1出土遺物（1）

図版24

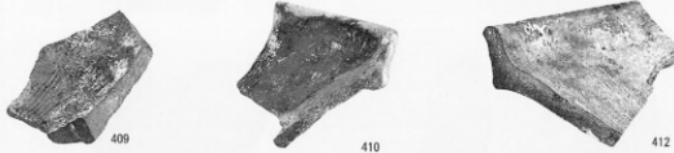


トレンチ1出土遺物（2）



トレンチ 2 出土遺物

図版26



物原等出土遺物

あとがき

本書は、備前市教育委員会が「伊部南大窯跡」周辺窯跡群の調査成果をまとめたもので、「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ」に続いて2冊目の報告書になります。ここに刊行できますのは、文化庁、史跡伊部南大窯跡整備委員会、岡山県教育委員会、地元関係者の方々のご協力・ご指導のおかげと感謝しております。

さて、岡山県において行政発掘が開始されたのは、昭和42年から43年にかけて山陽新幹線の建設とともに実施された「不老山東口窯跡」「不老山西口窯跡」が嚆矢と聞いております。その調査にあたられたのが、河本清先生、葛原克人先生であります。膨大な量の備前焼片と毒蛾に悩まされたと聞いております。

時を経ること30有余年。国指定史跡「伊部南大窯跡」の周辺において公園の開発計画を持ち上がったを契機に、平成14年「史跡伊部南大窯跡整備委員会」が設置され、委員長に河本清先生が選出されました。委員会では、整備の手法や整備スケジュールなどを検討し、その成果を「史跡伊部南大窯跡整備基本構想」としてまとめました。

そのような中、設置当初から委員として強力なリーダーシップを發揮し、指導いただいた葛原克人先生が、平成17年12月14日に急逝されました。先生のご逝去は伊部南大窯跡整備事業にとりまして大きな痛手であります。

先生はご多忙にもかかわらず整備委員会に出席する時間をたびたびつくっていただきました。委員会では、懇切に指導助言をいただき、また重要な事案については適切なご助言もいただきました。先生が出席された最後の整備委員会は平成17年2月6日の日曜日でした。その18日後の2月24日、先生は職場で倒れられました。雪が降る寒い日、会議中と聞いております。先生はこの時期ご多忙を極めておられ、予定が空いている6日の日曜日に設定したところ、「日曜日ぐらいやすませてくれよ。殺すきかー」と冗談でおっしゃられたのを記憶しております。今思えば、強引に会議日を設定したことが悔やまれてなりません。

昭和52年「水の子岩海底遺跡」の調査にあたられた先生は、先駆的な調査手法で中世の海上交通について多くの知見をもたらされ、また、平成7年から3年間にわたり文化庁国庫補助事業として実施した「備前焼紀年銘土型調査事業」では調査員のとりまとめ役として事業を推進されました。先生は、備前焼の研究について地元行政の奮起を常にうながされていました。本来であれば本書を備前焼研究の成果の一部として献早できたはずですが、残念でなりません。

ここで謹んで先生のご冥福をお祈りしますとともに本書の刊行をご報告したいと思います。

報告書抄録

ふりがな	いんべみなみおおがまあとしゅうへんようせきぐんかくにんちょうさはうこくしょ							
書名	伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書							
卷次	II							
シリーズ名	備前市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	7							
編著者名	石井啓・小西通雄							
編集機関	岡山県備前市教育委員会							
所在地	〒705-8602 岡山県備前市東片上126 TEL 0869-64-1841 E-mail : syougai@city.bizen.okayama.jp							
発行年月日	西暦2006年7月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ○° ′ ″	東経 ○° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	(日本測地系)				
いんべみなみおおがまあとしゅうへんようせきぐんかくにんちょうさはうこくしょ 伊部南大窯跡周辺窯跡群	おかやまけん 岡山県 びぜん 備前市 いのべ 伊部	211	-	34° 44' 01"	134° 09' 45"	2001.10.5～ 2001.12.26 2002.4.2～ 2002.6.13	184	ボランティア団体による公園開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物		特記事項		
伊部南大窯跡周辺窯跡群	窯跡	平安時代	東6号窯跡	杯・鉢		伊部で最古の窯跡		
	窯跡	室町時代	KP-1地点窯跡	備前焼				
	窯跡	江戸～近代	KP-2地点窯跡	備前焼		第3の天保窯		

備前市埋蔵文化財調査報告 7

伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書 II

平成18年7月28日 編集

平成18年7月31日 発行

編集・発行 備前市教育委員会
岡山県備前市東片上126

印 刷 (株) 大西商店印刷部
岡山県備前市西片上62

